

# 第66回 全国造形教育研究大会 東京大会

第52回 東京都図画工作研究大会 城東大会

第31回 東京都中学校美術 教育研究大会

66  
R  
ZZ  
2013 東京

## 造形美術教育のダイナミズム — 成長と連携 —



**期日：2013年(平成25年)11月28日(木)，29日(金)**

● 第1日目:全体会 11月28日(木)

会場:国立オリンピック記念青少年総合センター

● 第2日目:校種別分科会 11月29日(金)

会場:文京区立千駄木幼稚園・江東区立南砂小学校・墨田区立両国中学校





# 2013 TOKYO

## 造形美術教育のダイナミズム

— 成長と連携 —

# 第66回 全国造形教育研究大会 東京大会

第52回 東京都図画工作研究大会城東大会

第31回 東京都 中学校美術 教育研究大会

期日：2013年(平成25年)11月28日(木)，29日(金)

- 第1日目：全体会 11月28日(木)  
会場：国立オリンピック記念青少年総合センター
- 第2日目：校種別分科会 11月29日(金)  
会場：文京区立千駄木幼稚園・江東区立南砂小学校・墨田区立両国中学校

●主催：全国造形教育連盟 東京都造形教育協議会

●後援：文部科学省、東京都教育委員会、新宿区教育委員会、文京区教育委員会、墨田区教育委員会、江東区教育委員会、目黒区教育委員会、世田谷区教育委員会、渋谷区教育委員会、荒川区教育委員会、葛飾区教育委員会、江戸川区教育委員会、全国国公立幼稚園長会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国特別支援学校長会、全国公立学校教頭会、東京都国公立幼稚園長会、東京都公立小学校長会、東京都中学校長会、東京都公立高等学校長協会、東京都立特別支援学校長会、東京都公立小学校副校長会、東京都公立中学校副校長会、東京都立高等学校副校長会、公益社団法人日本PTA全国協議会、一般社団法人東京都小学校PTA協議会、東京都公立中学校PTA協議会、東京都公立高等学校PTA連合会



## 正 誤 表

ページ	誤り	正しい
8ページ 右半分	挨拶「東京都立けやきの森学園学園長 山口真佐子」の文面	付属シールにて張り替えてください
81ページ 上部	[助言者]宮城県仙台市立南中山中学校 三品良治	[助言者]宮城県仙台市立南中山中学校 三品良春
89ページ 上部	[助言者]山梨県北杜市立須玉中学校 鷹野 晃	[助言者]山梨県富士・東部教育事務所 小俣博昭
93ページ 上部	[助言者]横浜国立大学 小池研二	[助言者]京都市総合教育センター 小泉繁雄



# 目次

## 3 あいさつ

永関和雄（全国造形教育連盟委員長）  
菊田 寛（第66回全国造形教育研究大会 大会会長）

## 4 祝辞

ひがしら まさひと  
東良 雅人（文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官）  
岡田 京子（文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官）  
比留間 英人（東京都教育委員会 教育長）

## 6 あいさつ

田村 秀子（幼稚園部会代表 文京区立千駄木幼稚園長）  
高橋 香苗（東京都図画工作研究会会長 全国造形教育研究会東京大会実行委員長  
東京都造形教育協議会会長）  
小島 弘美（第52回東京都図画工作研究大会城東大会実行委員長）  
殿村 靖廣（東京都中学校美術教育研究会会長）  
佐藤 清親（東京都高等学校美術工芸教育研究会顧問 東京都立総合芸術高等学校長）  
山口 真佐子（東京都立府中けやきの森学園校長）  
新野 貴則（全国大学造形美術教育連絡協議会・全造連大学部会部長 山梨大学）  
稲庭 彩和子（東京都美術館 学芸員 アート・コミュニケーション担当係長）

## 10 大会テーマ

## 12 大会日程・会場図・授業と分科会一覧

## 16 講評者・講師・パネリスト紹介

幼稚園	17
小学校	29
中学校	75
高等学校	105
特別支援学校	113
大学・美術館	117

## 123 研究の歩み・規約・名簿



## 東京から全国へ 造形美術教育のダイナミズムを



全国造形教育連盟委員長

永関 和雄

第66回全国造形教育研究大会が第52回東京都図画工作研究大会、第31回東京都中学校美術研究大会とともに開催されることを嬉しく思います。

言うまでもなく東京は日本の首都であり世界に開かれた国際都市です。その東京から発信される造形美術教育の輝きは、芸術文化の素晴らしさを多くの人々に伝えることができることでしょう。

残念なことではありますが、我が国において造形美術の各教科は、極めて重要な教科であるという認識が希薄で、小中学校における授業時数は削減されている現実があります。しかし、広い国土や地球資源に恵まれない我が国が、世界をリードし、平和で美しい生活の素晴らしさを発信するために、造形美術教育で育つ感性は、技術力や勤勉さとともに重要な要素となります。

「センスオブジャパンー図工・美術が日本の感性を育てる」。これは今年度、全造連本部より全国に発信するメッセージです。日本を美しい物や空間であふれた国にしたいと思う気持ちは造形美術教育に携わる私たちの願いでしょう。そのためには、子どもたちが自ら美を感じて愛好する心情や創造する資質・能力を育てる必要があります。

日本が目指している産業立国としての「もの作り」でも、デザイン性の優れた物は、見る楽しさ、使う喜びとともに生活を美しく心豊かにする力をもっています。

今回の東京大会は、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学、美術館と造形美術教育を支えるすべての指導者が参加する大会となりました。造形美術教育のダイナミズムを力強く全国へ発信する大会にしましょう。

最後となりましたが、本大会の開催にご支援をいただいた文部科学省、東京都教育委員会をはじめとする関係各位に心よりお礼を申し上げます。

## 将来を担う造形美術教育



第66回全国造形教育研究大会  
大会会長

菊田 寛

全国造形教育研究大会が10年ぶりに東京で開催されます。日頃から造形美術教育に関わり、熱い思いを持って実践されている皆様を全国より大勢お招きし、盛大に大会が開催できますことを大変嬉しく感じております。

今、日本経済は少し上向きの傾向ですが、変化の激しいこれからの社会で必要な力は、豊かな生活を創造していく力であり、そのための感性やアイデアを発想したり構想したりする力であると考えます。このことから、学習指導要領の教科の観点の中で「発想や構想の能力」の育成を掲げ、生きる力を育てる造形美術教育は、将来を担う子どもたちにとって、とても重要なものとなります。

本大会では、「造形美術教育のダイナミズム」～成長と連携～という主題の基に研究を進めて参りました。造形美術教育は、人の心に内在する様々な力を、表現活動や鑑賞活動を通して、開花させ伸ばし育てていくものであると考えます。また、その力は成長と共に変化することから、生涯に渡って生き方に関わるダイナミックな営みであると捉えています。私たちは、この造形美術教育が果たす力を再度認識し、これからの指導のあり方を改めて考えなければなりません。

近年、多くの研究大会で「校種連携」が取り上げられてきました。今回は、東京という地域の特質を活かして、各校種が「成長と連携」をキーワードに、公開保育や授業、展示を行います。成長をつなぐ美術教師の支援や関わり、そして将来の心豊かな生活へつなげるための造形美術教育のあり方や役割を皆さんで考えて参りたいと思います。

最後になりましたが本大会の開催にあたり、ご協力・ご支援いただきました関係の皆様、ご指導ご助言をいただきました多くの方々から感謝申し上げます、実り多い大会になることを祈念し、ご挨拶いたします。



## 祝 辞



文部科学省初等中等教育局  
教育課程課 教科調査官  
ひがし ら まさひと  
**東良 雅人**

第66回全国造形教育研究大会 2013 東京大会が、全国各地からの多数の先生方の御参加のもと、東京の地で盛大に開催されますことに対し、心よりお喜びを申し上げます。

今回の図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）の改訂では、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的に関わっていく態度を育むことなどを重視しています。そして、教科目標を実現するために、発達の段階に応じて、各学校段階の内容の連続性に配慮し、育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にしました。

これらのことを踏まえ、子どもたち一人一人が創造活動の喜びを味わうことができるようにするためには、それぞれの発達段階における造形表現、図画工作、美術、工芸による教育の意味を明確にし、描いたり、つくったり、見つめることなどを通して、どのような資質や能力を身に付けさせるのかを考える、子どもたちの学びを起点とした授業づくりが行われることが必要です。

本研究大会はテーマを「造形美術教育のダイナミズム—成長と連携—」として、幼稚園から大学、そして生涯学習につながる美術館との連携の中で、造形美術教育のあり方を考えるとしています。他校種などのことを知ることや連携することは、今、目の前にいる子どもたちに何をすべきなのかを明確にすることにつながります。このことが子どもたちに確かな資質や能力と豊かな感性、情操を育むことにつながるのだと思います。本大会を通じて、参加者一同がそのことを共有し、今後の子どもたちの学びと成長に寄り添える授業づくりにつながりますことを心から御期待申し上げる次第であります。

最後になりましたが本研究大会の開催のために、御尽力されました関係者の方々に感謝申し上げますとともに、本研究会の一層の御発展と皆様方の御健勝を祈念いたしまして、祝辞といたします。

## 祝 辞



文部科学省初等中等教育局  
教育課程課 教科調査官  
**岡田 京子**

平成23年度より全面実施となった学習指導要領も3年目になりました。各学校、教育委員会においては、授業研究会や研修会等を通して、学習指導要領の内容の実現に向けて熱心に取り組んで頂いております。今後ますます、目の前のひとりひとりの子どもに目を向け、子どもの学びの充実にご尽力頂きますようお願い申し上げます。

大会テーマ『造形美術教育のダイナミズム』のもと、第66回全国造形教育研究大会ならびに第52回東京都図画工作研究大会、第31回東京都中学校美術教育研究大会が開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。

小さな子どもが白い紙に、グルグルと線を描き、できた形を確かめるように見てから、「ほら」という表情で振り向く、あの姿。自分の行為により、世界を変えることができたという実感、新しい意味や価値を見付ける時間。

子どものそばにいる大人が、このような活動の意味をどのように捉えるか、そして、その意味を共有しながら、各場所で見ないでいけるかが、子どもの成長に大きく関係します。みなさんの目の前にいるであろう「この子」が、心豊かに生きていくこと、そこに造形美術教育がどのように関わっていけるかを、一人ではなく、みんなで考えることが大切です。

その意味において、幼稚園、小学校、中学校、高校、特別支援、大学、そして美術館とが連携し、お互いに発達の段階に応じた役目を考えていくという本大会は、子どもにとって価値ある場となることは間違いありません。未来を担う子どもを育てる視点で活発に交流し、造形美術教育をますます元気にしていきましょう。

最後になりましたが本大会を開催するにあたりまして、ご尽力いただきました関係各位の皆様へ深く感謝申し上げますとともに、本大会のますますの発展とお集まりの皆様方のご活躍を祈念致しましてお祝いの言葉とさせていただきます。



## 祝 辞



東京都教育委員会  
教育長

**比留間 英人**

「第66回 全国造形教育研究大会」が、首都東京におきまして開催されますことを、心からお祝い申し上げます。また、本会が創設以来、堅実に築き上げてきた研究活動が、東京都をはじめ、全国の造形美術教育の充実と発展に寄与してこられたことに、深く敬意を表します。

さて、東京都教育委員会は、本年度4月に策定した東京都教育ビジョン（第三次）に基づき、社会全体で子供の「知」「徳」「体」を育み、グローバル化の進展など変化の激しい時代における、自ら学び考え行動する力や社会の発展に主体的に貢献する力の育成を目指して取り組んでおりますが、その中では、都内各地区の教育研究活動の中核となる教員を養成し、教育の質の向上に資する「教育研究員」の設置、都内公立小・中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校の児童・生徒の代表作品が校種を越えて一堂に会する「東京都公立学校美術展覧会」の開催など、造形美術教育に関する具体的な取組を行っております。

造形美術教育においては、子供達が創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断・表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的に関わっていく態度を育むことが求められております。

そのような中で、本大会が「造形美術教育のダイナミズム - 成長と連携 -」を研究テーマとして開催され、先生方が校種や都道府県の枠を超えて協議を深めていられることは、大変意義深いことです。

本会の研究の成果が、各学校等に広く周知され、全国の造形美術教育の一層の充実が図られることを期待しています。

結びに当たりまして、本大会のために御尽力いただきました関係の皆様へ感謝と敬意を表しますとともに、関係団体のますますの御発展を祈念いたしまして祝辞とさせていただきます。



## 遊びの中で豊かな表現活動を



幼稚園部会代表  
文京区立千駄木幼稚園  
**田村 秀子**

全国造形教育研究大会東京大会の開催、おめでとうございます。幼稚園部会の代表としてこの大会に関わる中で、小中学校、特別支援学校、高等学校、大学、美術館等の先生方から学ぶ、貴重な機会を得ることができました。東京都公立幼稚園教育研究会でも関係の先生方を招いて実技研修会を行い、教員が造形遊びの楽しさを味わい、教材についての知識を広げることができました。

幼児にとって遊びは大切な学びの場です。園庭で見つけた大きな木の実を土の上に並べているうちに顔に見えることに気付き、指で線をかき始める姿など、日々の遊びの中でたくさんの表現が生まれています。

先日、恩師の故角尾稔先生の息子様のご尽力により、故宮武辰夫先生の造形遊びのビデオを見ました。滑り台や雲ていなどの遊具で思い切り遊び、動物になって表現したり、縄遊びを楽しんだりした幼児が、稲の束や縄などの素材とたくましくかわり、生き生きとした表現を生み出していました。宮武先生の「深い愛と理解をもってダイナミックに子供の暮らしを扱ってくれる指導者が、如何に子供の精神を、そして描画をクリエイティブなものにしているか」という記述のように、一人一人の幼児の思いを理解し、様々な素材と出会う環境をつくり、共にダイナミックな生活を創り出していくことが、豊かな表現につながるのではないかと考えます。

今回の大会を通じて、幼稚園から大学までそれぞれの実践事例や指導案に学び、理解を深めるとともに、同じ幼児教育に携わる保育所、こども園、私立幼稚園等の皆様と連携を深めることができれば幸いです。共に学び合いましょう。

幼児教育に目を向け、ご理解、ご指導、ご支援いただきました関係の皆様方に、深く感謝申し上げます。

## 挨拶



東京都図画工作研究会会長  
全国造形教育研究会東京大会実行委員長  
東京都造形教育協議会会長  
**高橋 香苗**

全国造形教育研究大会東京大会の開催に際して、東京都の各校種の代表で構成される東京都造形教育協議会が母体となり、準備を進めてきました。

本大会は、『造形教育のダイナミズム－連携と成長－』をテーマに掲げ、幼・小・中・校・大・特別支援・美術館…と、現時点で可能な限りの校種の連携を実現しようとしたものです。

子ども達の成長について思いをめぐらせた時、それぞれの年代の子ども達が、造形活動の中で今この時を生きる姿は、子どもが通り過ぎていく一瞬一瞬がかけがえない鍵(キーポイント)として働くことを伝えてくれます。また、日々子ども達が作り出したものは、家族や地域社会を結びつける触媒としても働いています。静かに深く私達を変えていくのです。

幼い子ども達のポテンシャルの高さは、創造性について考えをめぐらせるチャンスを、私達に与えてくれます。造形活動の中で、子ども達は年代と共に階段を上るといふより、階段そのものを変容させながら、かけがえのない時間をすごしているかのようです。

さて、本大会の2日目に、小学校部会は都図研大会城東大会(江東区立南砂小学校)を開催します。身体も心も、劇的に成長する6年間。そこで子ども達がつくり考える姿を授業をもって提案いたします。会場で、多くの方々と熱く交流できることを、心から期待しております。

最後になりましたが、本大会を開催するにあたって、数え切れないほどの多くの方々のご尽力を賜りました。会場校の皆様、ご指導をいただいた皆様、ご支援、ご協力いただいた関係諸機関の皆様に、心からの感謝と御礼を申し上げます。



## 大会を迎えるにあたって



第52回東京都図画工作研究大会  
城東大会実行委員長

小島 弘美

パブロ ピカソはある時、愛犬を亡くしたガールフレンドを慰めるため、カフェに置いてあった紙ナフキンをその場でちぎり小さな犬を作りプレゼントしました。慰めの言葉より心が伝わるメッセージ。

そして、世田谷美術館の扉には「芸術と自然はひそかに協力して、人間を健全にする」と書かれています。

人間の一生を豊かにする造形表現は、人間らしく生きるために必要不可欠なものであります。このように生涯を通じて、自己表現としての造形活動を行うために、「感じる心」から始まる図画工作科が果たす役割は、情操教育という点で非常に大きいと考えます。また、インターネットを含む情報社会において、言語能力によるコミュニケーションだけでなく、視覚的な表現力を含めた新たなコミュニケーションツールを獲得する図画工作科という教科は、その重要度を増していくことでしょう。

城東5区では、造形表現活動を促す図画工作科の原点にたちかえるため「感じる 広がる つくりだす」を大会テーマとし、研究を進めていきました。また、図画工作科による～子どもの力と子どもの育ち～をどのように育てゆくかをさまざまな授業の中で検証していきました。

若手教員がほぼ半数を占める現在、各校一人しかいない図工専科が「子どもにとっての図工の授業とはなにか」を同じ図工教員と話し合い、研究を深めていく時間は大変貴重な場といえます。悩み試行錯誤する時間こそ、これからの仕事に対する意欲や自信につながっていくと思います。

本大会を開催するにあたり、ご後援いただきました東京都教育委員会、会場地区の江東区、ならびに江戸川区、葛飾区、荒川区、墨田区の各教育委員会、東京都公立小学校校長会、東京都小学校PTA協議会、関係諸団体に厚く御礼申し上げます。また、本大会の会場校を快く引き受けていただきました江東区立南砂小学校、山田誠一校長先生をはじめ、全教職員の皆様、保護者の皆様、地域の皆様にご理解ご協力いただきましたことを深く感謝申し上げます。

## 挨拶



東京都中学校  
美術教育研究会会長

殿村 靖廣

この度、第2ブロック（新宿・渋谷・世田谷・目黒）の4区による、第32回東京都中学校美術教育研究大会が開催されます。

今年は、10年ぶりに「全国造形教育研究大会」が東京で開催されるため、墨田区立両国中学校を会場として全国造形教育連盟と共同開催される運びとなりました。

幼稚園から大学までの全ての校種と美術館と連携を図り、造形美術教育のあり方を見直していく良い機会と捉えており、第2ブロックの大会は、この全国造形教育研究大会の中学校分科会として位置づけられています。

大会のテーマは「造形教育のダイナミズム」として、「成長」と「連携」の2つの視点で、研究を進めてきました。

造形美術教育が子どもたちの人間形成に果たす役割について検証し、成長していく過程において、「何を学ばせ、学んでいくなかで、何の力を身につけさせていくのか？」について明確にしていく必要があります。小学校から中学校へ、そして、高等学校へと、子どもたちの成長と共に変容していく造形活動とのかかわりや連続性に迫りたいと考えています。

この大会を通して、これからの造形美術教育の方向性を示すとともに、各学校が取り組んでいくための道標になる大会とすべく、あらためてその重責を実感しています。

本研究大会開催にあたり、新宿区、渋谷区、目黒区、世田谷区の教育委員会をはじめ中学校校長会、教育研究会、各関係機関には、ご支援を賜り誠にありがとうございました。また、墨田区両国中学校の校長先生を始め教職員の皆様には、多大なご協力を頂きましたことに感謝申し上げます。



## 第 66 回全国造形教育研究大会の 開催にあたり



東京都高等学校美術工芸  
教育研究会顧問  
東京都立総合芸術高等学校長

佐藤 清親

今から 20 年近くも前のことである。なかの Z E R O をメイン会場として 1996 / 東京大会が開催された。「人間・表現・環境」を大会テーマとしたこの大会で、自分は研究局長を仰せつかり、局員と共に基調提案の取りまとめや全体会のイベント・ステージ上で当時は一般的ではなかったインターネット回線を利用して、子供たちが台湾の子供たちとパソコン上で絵の共同制作を行うもの一の実現のために人や物の調達に奔走していた事を思い出す。

その大会冊子に大会テーマの趣旨説明を書いた。一部分を再掲する。「現在、我が国は急速に高度情報社会化が進んでいます。情報メディアの多様化や進展は社会構造や文化そのものに変化を生み、私たちの生活を変えつつあります。子どもたちの育つ家庭や社会の環境の変容は、子どもたちの表現の在り方を変えようとしています。しかし、表現するという行為は不易不変であり、人間の根源的な営みです。」と書き出し、「実際に主体的、能動的なものにはたらきかけ、材質の特徴を感じ取り、材料とのかかわりの中で自己の表現を見出し、結果として実感を伴う経験を重視すべきです。このように造形、美術教育は人間にとって目と手と心、そして頭の統合的な活動なのです。」と締めくくった。

これが、図工や美術、工芸の授業を担当している教員の実感である事は今も変わりないと思う。この間、ICT 技術は格段に進展し、我々の生活を大きく変える部分もあるが、我々の営みである人間教育を行うという視点は揺るぎない。先の趣旨説明文の最後に、「この三つのキーワードが統合された学習の場を、幼児・児童・生徒・学生に対して保障することを、次代に引き継いでいくために本大会のテーマとしました。」と書いたが、今もますますこの重要性を確認される今大会となるよう祈念する。

## 挨拶



東京都立  
府中けやきの森学園校長

山口 真佐子

東京都特別支援学校文化連盟の総合文化祭には、造形美術、音楽、写真、職業・作業、手芸・家庭、囲碁・将棋・オセロ、書道、放送・映像、演劇の 9 部門が教育活動の発表を行っています。児童生徒の文化活動の充実を図るとともに、発表の喜びと、生活、社会自立への意欲を育てる機会を設定しています。日頃の造形活動の成果を展示し、創作活動の発表の場としています。心神障害児への理解を深めていただく目的で 22 回続けられています。造形美術教育は、一人一人の子供たちのもつ可能性を伸ばし、自らの力で表現力を広げて、豊かな感性を育てることを目標にしています。

特別支援学校では、キャリア教育を研究し推進しております。「キャリア教育」とは、障害の有無や状態にかかわらず、すべての人の生き方にかかわる概念である。子供たちが「生きる力」を身につけ、社会の激しい変化に流されることなくさまざまな課題に柔軟に、たくましく対応し、社会人、職業人として自立できるようにする教育の推進である。広い意味でのキャリア教育とは、社会的な関係性の中で「人間が自己の役割を發揮していく力」を育むもろもろの営みである。と説明されています。障害がある児童生徒の場合、学校教育が一人一人の生き方に与える影響が大きいことや障害の状態が多様であることから、様々な役割の充実をめざすことが求められています。

障害の多様化、重度化にともない、普通学校に重度の生徒や対応が難しい生徒が多く在籍している現状です。一成長と連携一造形美術の役割がダイナミズムに展開していくことを願っています。

## 挨拶



全国大学造形美術教育連絡協議会・  
全造連大学部会部長 山梨大学

**新野 貴則**

東京大会開催おめでとうございます。今大会を機に大学部会は全造連大会への関わりを強化してきました。今までは分科会の指導助言者としての参加はあったのですが、今大会では公開授業の指導助言を引き受け、中学校においては授業作りから事前に関わらせていただきました。

本大会のテーマ「造形教育のダイナミズム」は、人の一生において、どのように造形美術教育に関わるべきかを考えるテーマだと思います。このことは、即ち成長段階における校種の隔たりをいかに連結させていくかという課題でもあります。即ち、全校種の教員それぞれが、自分たちができることを考え積極的な連携を図る具体的な事例を生み出す大会でなければならないと考えられます。

さて、大学部会は、旧国立大学教育学部を中心に組織されている全国教育大学協会美術部門（教大協）と、教大協に加わらない国公立大学と私立大学とが組織している全国大学造形美術教員養成協議会（全美協）が連絡協議会を設け、全造連の窓口になっております。このことで幼児教育から小、中、高校までの造形美術教育の研究を様々な大学で網羅し、大学が持っている研究資産を広く現場に還元し、造形美術教育の発展に寄与することが可能となります。本大会を契機にますます全国造形教育研究大会が充実し、多くの実践研究の交流が生まれ、造形美術教育のダイナミズムにつながることを祈念いたします。

## 挨拶



東京都美術館 学芸員  
アート・コミュニケーション  
担当係長

**稲庭 彩和子**

学校と美術館が連携した取り組みの事例は近年着実に増えてきています。その背景には、学校側では新しい学習指導要領に美術館等との連携した活動がより明確に記された事があり、また美術館・博物館側の体制としては、学芸員資格課程で「博物館教育」が必修となったことなどがあり、今、美術館が社会教育施設として確かな成果を求められている事は、動かしがたい潮流となっています。

本大会の副題にもなっているキーワード「連携」は平たくいえば「かかわり合い」です。「連携」は単に学校が美術館や博物館を利用するという事ではなく、まさに学校の教員と学芸員（またはエドューケーター）などが、ある目的に向かって関わり合って、子どもたちの学びの環境を作っていく事だと考えています。その「かかわり合い」によって、子どもの学びだけでなく、学校の先生と学芸員の「学び合い」も起こり本当の意味での「連携」が生まれるように思います。

今回の大会では美術館部会は、私立、公立そして企業の美術館の学芸員、専門担当者などが公開授業の実施や助言、パネルディスカッションなどを引き受け「かかわり合い」の実践を通してこれからの連携を考える機会としました。この東京大会を連携のさらなる模索の場とし、今後も「かかわり合い」が発展し、造形美術教育のダイナミズムが生まれるよう願っております。



大会テーマ  
について

# 造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～

## 造形美術教育の今

幼稚園から高等学校まで、今年から全ての学校で新しい教育要領と学習指導要領等に基づく教育活動が始まった。この新しい教育活動では、子どもたちが身に付ける力を互いに確認しながら、学校や教科の特性を生かし、子どもたちの成長を願う教師の夢が授業の中で形になっていく。表現や図画工作、美術、芸術などの学びでは、つくる子どもたちの柔らかく、温かい、そして時には研ぎ澄まされた、熱い思いが、造形美術の創造という行為や作品に注ぎ込まれて溢れている。

グローバル化が進む世界のなかで、理数教育や外国語教育等の充実が国際社会に生きる日本人を育む視点から重要と考えられている。しかし、人間形成の視点に立って考える時、表現や図画工作、美術、芸術などの領域や教科における造形美術教育が果たす役割は、それに匹敵するほど大きく、そして古くから存在している。ものやこと、空間や環境などとの幅広い関わりの中で展開される造形美術は人の成長と分かちがたく結びついており、成長とともに一人一人にとって造形美術がもつ意味は変化し、そのアプローチも異なるものとなる。それは、生涯を通じて生きる豊かさを生み出す貴重な要素である。

日々、造形美術教育に携わっている私たちには、ものをつくり、生み出すことが人間の成長や一人一人の生きる上での豊かさに、どのような影響を与えているのか、確かな答えを出すことが求められている。そして、授業実践等における造形活動を通して、形や色によって創造的に表現する力やよさや美しさを味わう感性、豊かな情操や生涯にわたって美術を愛好する心情など、目指す教科の目標に照らして造形美術教育が果たす役割や可能性を検証し、真摯に問いかけていく必要がある。

## 造形美術の展開と造形美術教育の課題から生まれた本大会のテーマ

本来、造形美術の活動は、学校の授業の中に収まるものではなく、幼児期からの体験を基盤としながら、大学や美術館、社会等を含めた広大な次元での造形美術活動へと発展し、常に拡大し広がり続けていく極めてダイナミックなものである。それは、イメージやデザインの力が社会の様々な動向を左右するように、多くの人々に働きかけ、一人一人の生き方に関わり、あたかも湧き出す泉のごとく尽きることなく新たな形を生み出している。

今回の大会では、そのような造形美術の在り方を、活力に満ちた力強さを持ち、しかも、いかなる状況にあっても柔軟に働きかけていくしなやかさをもったものとしてとらえ、それを今後の造形美術教育の展開へとつなげていくものとした。そのために、幅広く学校等の研究の指標となる共通のテーマを「造形美術教育のダイナミズム」として研究を推進することとし、「成長」と「連携」の二つを、具体的な実践を通して検証するためのキーワードとして進めることとした。

今回の学習指導要領改訂において、図画工作、美術、芸術(美術、工芸)についての改善の基本方針には、「図画工作科、美術科、芸術科(美術、工芸)」については、その課題を踏まえ、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐ

くむことなどを重視する。」とある。さらに、「このため、子どもの発達の段階に応じて、各学校段階の内容の連続性に配慮し、育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にするとともに、小学校図画工作科、中学校美術科において領域や項目などを通して共通に働く資質や能力を整理し、〔共通事項〕として示す。」ことが明示されている。これは小、中、高等学校のみならず、幼児期から成人までの人の成長に伴って展開される造形美術にかかわる教育全体を貫く方向性ではないかと考える。

ただし、今回の大会における「連携」は、各学校間の連携といった「つながり」としての縦の関係を指すのではない。これからの造形美術の在り方として、生活や社会と豊かに関わる態度や生活を美しく豊かにする造形や美術の働きも同様に重視されていることから、従来からの美術館との連携に加えて、他教科や地域社会等との「かかわり」など、横の関係をも含めた意味で「連携」をとらえている。

また、「成長」も単なる発達の段階や特性を単線的に考えるのではなく、造形美術活動の体験を通して得られた出会いや発見を積み重ね、経験の蓄積などによって獲得されていく総合的な力としての「育ち」ととらえている。人は、広がりや深まり、そして新たなものとのつながりを拡大していくことで成長していく。それが「伸びゆく姿」であり、個としての成長、社会に働きかける主体としての成長である。

本大会の研究は、各学校等の研究実践を通して、成長とともに変容する姿を見せる子どもたちの造形活動の意味を考察し、造形活動を通して開かれた子どもたちの心に触れて、造形美術の意義を明らかにしながら、造形美術教育が人間形成に果たす役割の重要性を検証するものである。そして、パズルのピースが埋め込まれるように各学校等の実践が研究の成果としてまとまった時に、初めて見える全体像こそが本研究の目指すところの造形美術教育のダイナミズムであるに違いない。そして、子どもたちの変化を通して明らかになるであろう「成長」と、その実現のために求められる「連携」の意味を互いに確認していくことで、これからの造形美術教育の力強く、アクティブな地平が拓かれることになると確信している。

以上の趣旨から、本大会で目指す共通の研究テーマを次のとおりとした。

## 大会テーマ：造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～

### 造形美術教育の豊かな広がり

全国造形教育連盟は、造形美術教育に関わる学校及び関係諸機関による連合体であり、それぞれが独自の活動を展開しながら、造形美術教育の充実と活性化を目指して集まっている組織である。幼稚園や小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学、美術館など、造形美術教育に関わる学校、各機関が、それぞれの課題に応じた取組や研究をしながら、相互に連携して研究を深めていく場が全国造形教育連盟の存在意義であり、全造連の研究大会の在り方である。

本大会は、それぞれの課題へのアプローチを独自に追究しながら、大会全体としてその全容を明らかにしようとするものである。その際にもまた、各学校等の縦軸と全国津々浦々の実践の集約という横軸の交差から生まれるダイナミックな展開を期待したい。それは、必ずや造形美術教育の次の豊かな広がりを生み出す基盤となるに違いない。



# 大会日程・会場

## ●第1日目 全体会 11月28日(木)

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

9:15	9:40	11:15	12:15	13:15	14:15	15:55	16:25	17:15
受付	校種別 部会	全造連 全国代議員 会議	昼食	全体会				レセプション
			受付	開会 セレモニー	校種別代表 パネル ディスカッション	文部科学省 指導講評	閉会	

## ●第2日目 校種別部会 11月29日(金)

会場：文京区立本駒込幼稚園(幼稚園部会)

9:30	10:00	11:30	12:30	13:30	14:00	15:30	16:40	
幼稚園	受付	公開保育	昼食	公開保育	移動・休 憩	全体会	分科会	閉会
						開会セレモニー 実践発表 講師講評	素材別分科会協議 指導助言	

会場：江東区立南砂小学校(小学校部会)

9:00	10:00	11:35	12:40	13:30	15:00	16:00	16:50	18:00
小学校	受付	公開授業	昼食	分科会		全体会		交流会
				発表 代表者 各道府県	各分科会 研究発表	移動	研究協議全体会 文部科学省 指導 講評	

会場：墨田区立両国中学校(中学校部会、高等学校部会、特別支援部会、大学・美術館部会)

8:50	9:40	10:30	12:10	13:30	14:45	16:45
中学校	受付	公開授業	研究協議 関連授業発 表 指導助言	昼食	各道府県による 実践事例発表 指導助言	全体会
						研究協議全体会 基調提案 文部科学省 指導講評・講演

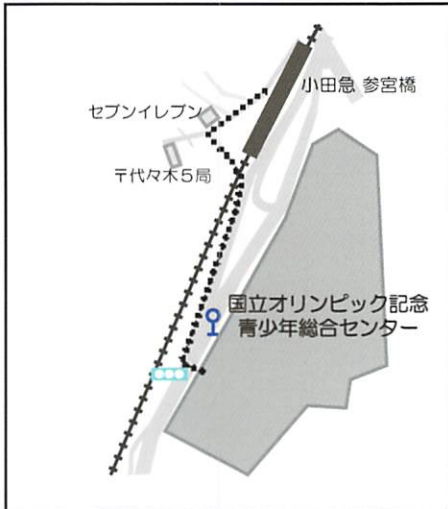
9:00	9:40	10:30	10:40	12:10	13:30	14:45	15:00	16:50
高等学校	受付	公開授業	研究協議 関連授業 発表	昼食	各道府県による 実践事例発表	休憩	パネルディスカッション 「創造的な生活者を育てる 造形美術教育」	閉会

特別支援	常時受付			昼食	「素材遊び・音遊びアート」実技演習とワークショップ	閉会
	教材教具・作品展示・授業実践紹介					

9:00	9:40	10:30	13:30	14:45	16:45	
美大 美術館学	受付	公開授業	大学・美術館 合同シンポジウム ①	昼食	大学・美術館 合同シンポジウム②	全体会
						研究協議全体会 基調提案 文部科学省 指導講評・講演

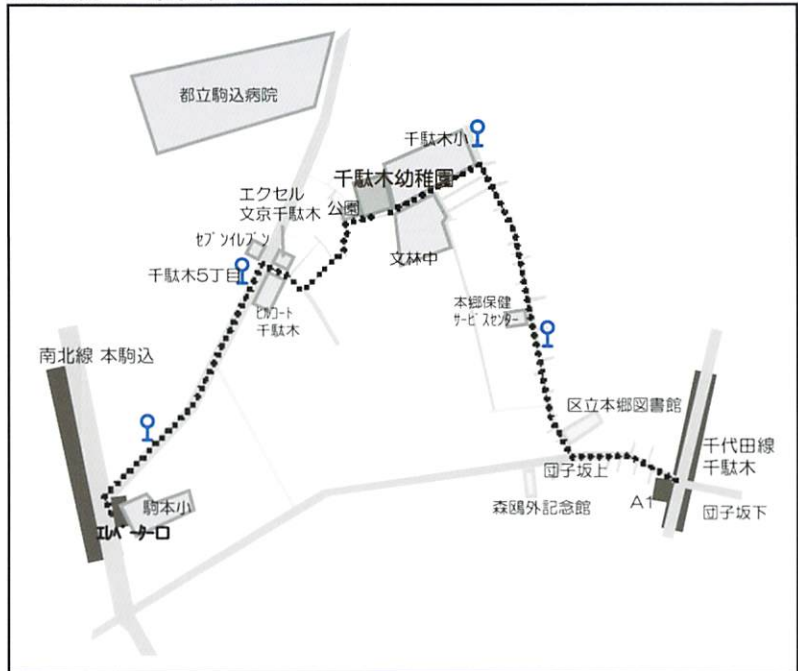
# 案内図

## 1日目 全体会会場 国立オリンピック青少年総合センター

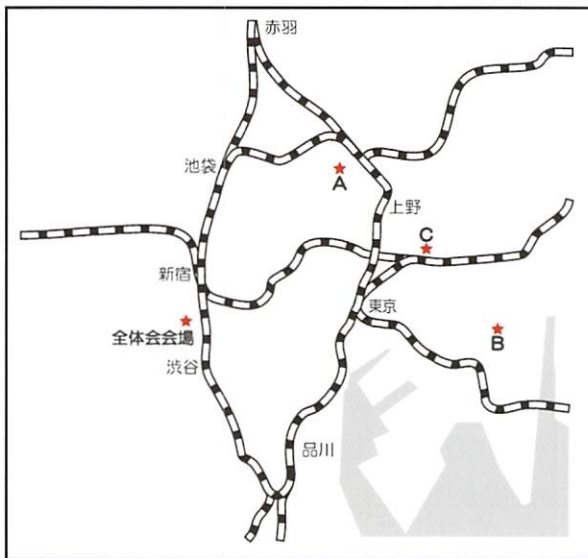


私鉄 小田急線 参宮橋駅 徒歩10分

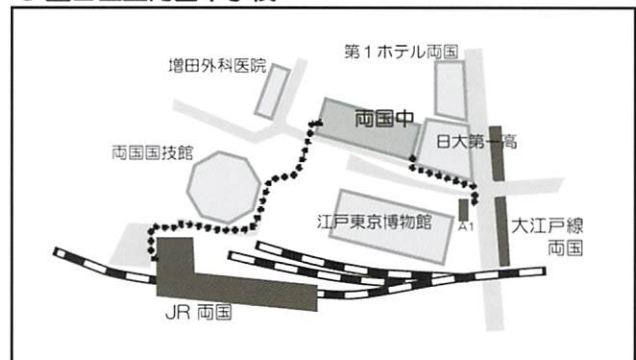
## A 文京区立千駄木幼稚園



地下鉄 南北線 本駒込駅エレベーター出口 徒歩10分  
地下鉄 千代田線 千駄木駅A1 徒歩 12分

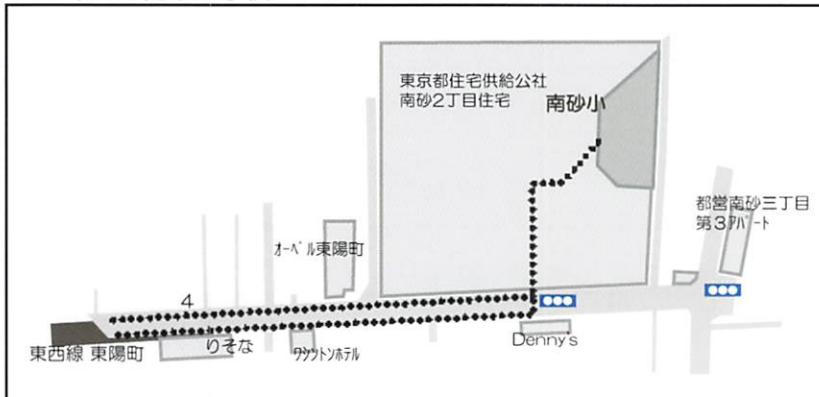


## C 墨田区立両国中学校



JR 両国駅 西口 徒歩5分  
都営地下鉄大江戸線 両国駅 A1出口 徒歩2分

## B 江東区立南砂小学校



地下鉄東西線 東陽町駅 徒歩10分

詳細は、WEBで…「全造連 東京」  
<http://2013tokyo.zenzouren.net>

お問い合わせ：大会事務局  
〒132-0035  
江戸川区平井7-22-24  
江戸川区立平井西小学校 大道博敏  
Tel: 03(3612)9498  
Fax: 03(3611)3201  
大道Pc-mail  
kantstr40ho@hotmail.com



# 公開授業と分科会 …午前の部

## ● 幼稚園 「感じるままに のびのびと -素材との出会いや感動体験を生かして-」(会場④：文京区立千駄木幼稚園)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案	指導講師	都道府県
1	幼稚園	1	矢澤 弘美 (文京区立千駄木幼稚園)	篠原 直子 (練馬区立光が丘さくら幼稚園)	横 英子 (淑徳大学)	千葉
		2	鈴木 直子 (文京区立千駄木幼稚園)	大澤 ちづる (東京学芸大学附属幼稚園)	小串 里子 (造形教育家)	神奈川

## ● 小学校 「感じる 広がる つくりだす ~ 子どもの力と子どもの育ち ~」(会場⑥：江東区立南砂小学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案	指導講師	都道府県
2	子どもの “みる”	3	片山 知子 (江東区立毛利小学校)	近藤 麻里 (江東区立東雲小学校)	佐々木 達行 (前千葉大学)	宮城 東京
		4	岩崎 陽 (江東区立水神小学校)			
		5	小林 ちあき (江東区立第二亀戸小学校)			
3	子どもが “かかわる”	6	木澤 奈月 (江戸川区立下小岩小学校)	中村 和哉 (江戸川区立第三松江小学校)	水島 尚喜 (聖心女子大学)	北海道 福島
		7	衛藤 陽子 (江戸川区立下鎌田東小学校)			
		8	水谷 さくら (江戸川区立新堀小学校)			
4	子どもが “てあう”	9	山川 知也 (葛飾区立青戸小学校)	朝重 久美子 (葛飾区立白鳥小学校)	立川 泰史 (東京学芸大学 付属学校)	山梨 福岡
		10	渡邊 梨恵 (葛飾区立葛飾小学校)			
		11	奥山 美香 (葛飾区立金町小学校)			
5	子どもは “おもう”	12	桑島 有子 (荒川区立第二日暮里小学校)	山崎 雅愛 (荒川区立尾久西小学校)	西野 範夫 (元上越教育 大学院)	神奈川 兵庫
		13	川田 幸那 (荒川区立尾久宮前小学校)			
6	子どもの “うごく”	14	京嶋 一喜 (墨田区立言問小学校)	東郷 拓巳 (墨田区立第一寺島小学校)	辻 政博 (帝京大学)	長野 愛媛
		15	内田 康予 (墨田区立隅田小学校)			
7	子どもの遊びが 生きる図工	16	河原 賢一 (狛江市立和泉小学校)	雨宮 玄 (あきる野市立東秋留小学校)	山本 高之 (アーティスト)	沖縄
		17	杉山 聡 (板橋区立板橋第六小学校)			

## ● 中学校 「造形美術教育のダイナミズム」(会場⑦：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案	指導講師	都道府県
8	思いをかたちに	18	田邊 真由美 (渋谷区立松濤中学校)	鹿倉 美帆 (渋谷区立広尾中学校)	小澤 基弘 (埼玉大学)	沖縄 宮城
		19	花里 裕子 (中野区立第五中学校) 三浦 悦子 (足立区立青井中学校)	桶川 希三子 (世田谷区立千歳中学校)	大成 哲雄 (聖徳大学)	長野 岡山
9	他者への眼差し	20	檜原 純子 (目黒区立日黒中央中学校) 奥山 たみ恵 (目黒区立第八中学校)	河本 珠実 (目黒区立東山中学校)	渡辺 邦夫 (横浜国立大学)	山梨 岩手
		21	志手 伸圭 (足立区立洲江中学校)	高澤 健太郎 (世田谷区立弦巻中学校)	井坂 健一郎 (山梨大学)	北海道 京都
10	形・色彩・イメージ の視点を活かして	22	深見 響子 (世田谷区立上祖師谷中学校)	中村 奈穂子 (世田谷区立世田谷中学校)	大泉 義一 (横浜国立大学)	山梨 福井
11	多様な経験から育 む豊かな表現活動	23	神野 智彦 (新宿区立西早稲田中学校)	立川 英司 (新宿区立新宿中学校)	石賀 直之 (東京造形大学)	岐阜 熊本

## ● 高等学校 「社会へつなげる」(会場⑧：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案	指導助言者	都道府県
12	社会へつなげる	24	奥田 陽子 (都立世田谷泉高等学校)	東京都高等学校	鈴木 斉 (帝京科学大学) 西尾隆一 (熊本県熊 本市立藤園中学校)	秋田
		25	甲斐 健太 (都立浅草高等学校)	美術工芸教育研究会		

## ● 特別支援学校 「造形美術教育のダイナミズム」(会場⑨：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	東京都特別支援学校 美術教育研究会	実技演習とワークショップ 石丸良成(東京都立府中けやきの森学園)
13	素材遊び・音遊びアート			

## ● 大学・美術館 「造形美術教育のダイナミズム」(会場⑩：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案
14	大学教育	26	米徳 信一 (武蔵野美術大学)	シンポジウム「連携でつくりだす 美術の授業」
15	大学と美術館	27	原瀬 裕孝 (ルーヴル DEP ミュージアム)	
16	美術館	28	亀井 愛 (三井記念美術館) 熊谷香寿美 (東京都美術館)	

# 実践発表・各都道府県分科会ほか …午後の部

## ● 幼稚園 (会場㊤：文京区立千駄木幼稚園)

分科会	分科会・テーマ	都道府県の分科会	指導助言者
1	幼稚園	當銀 玲子(千葉県浦安市立美浜南幼稚園)	高村 弘志(中央区立泰明小学校)
		飯島 弘子(横須賀市立大楠幼稚園)	浅野 瑞枝(白百合学園中・高等学校)

## ● 小学校 (会場㊤：江東区立南砂小学校)

分科会	分科会・テーマ	都道府県の分科会	指導助言者
2	子どもの“みる”	山崎 睦子(宮城県仙台市立七北田小学校) 熊谷 英之( // 仙台市立木町通小学校) 堀江 美由紀(東京都台東区立蔵前小学校)	小川 直人(せんだいメディアテーク) 郷 泰典(東京都現代美術館)
3	子どもが“かかわる”	菊地 惟史(北海道札幌市立柏楊小学校) 森口 律(福島県福島大学付属小学校)	天形 健(福島大学)
4	子どもが“であう”	臼井 恭子(山梨県甲府市立貢川小学校) 徳永 直大(福岡県福岡市立福重小学校)	遠藤 久(富士川町立増穂西小学校) 今林 功一(福岡市立石丸小学校)
5	子どもは“おもう”	伊藤 龍豪(神奈川県川崎市立南生田小学校) 藤井 有子(兵庫県神戸市立若草小学校)	川合 克彦(川崎市立玉川中学校) 鎌田 和見(神戸市立北山小学校)
6	子どもの“うごく”	下平 怜那(長野県茅野市立湖東小学校) 野村 晃晴(愛媛県松山市立道後小学校)	吉池 光則(東御市立田中小学校) 上迫 博幸(西条市立三芳小学校)
7	子どもの遊びが生きる園工	佐渡山 園美(沖縄県浦添市立内間小学校)	大城 悦子(沖縄県うるま市立江洲小学校)

## ● 中学校 (会場㊤：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	都道府県の分科会	指導助言者
8	思いをかたちに	田中 浩美(沖縄県金武町立金武中学校) 高橋 清子(宮城県仙台市立館中学校) 高橋 伊智郎(長野県茅野市立東部中学校) 五味 一男(県助言・茅野市立茅野北部中学校) 松永 美紀子(岡山県倉敷市立水島中学校)	三品 良春(宮城県仙台市立南中山中学校) 稲庭 彩和子(東京都美術館)
		鷹野 敦貴(山梨県甲府市立南中学校) 高橋 知志(岩手県岩手大学教育学部付属中学校) 則友 冴子(北海道札幌市立札幌北中学校) 湯口 みゆき(京都府京都市立蜂ヶ岡中学校) 小泉 繁雄(京都市総合教育センター)	小俣 博昭(富士・東部教育事務所) 小池 研二(横浜国立大学)
10	形、色彩、イメージの視点を活かして	新野 貴則(山梨大学) 吉田 千春(福井大学教育地域学部付属中学校)	松永 かおり(東京都教育庁指導部)
11	多様な経験から育む豊かな表現活動	佐々木和哉(岐阜県多治見市立多治見中学校) 林 徳和( // 岐阜市立境川中学校) 宮尾 有(熊本県熊本市立城北小学校)	石賀直之(東京造形大学)

## ● 高等学校 (会場㊤：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	都道府県の分科会	指導助言者	パネルディスカッション パネリスト	モデレーター・講師
12	社会へつなげる	黒木 健(秋田県立西目高等学校)	鈴木 斉(帝京科学大学)	西尾 隆一(熊本県熊本市立藤園中学校) 黒木 健(秋田県立西目高等学校) 小野征一郎(千代田区立九段中等教育学校)	大坪圭輔(武蔵野美術大学)

## ● 特別支援学校 (会場㊤：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	東京都特別支援学校美術教育研究会	教材教具・作品展 授業実践の紹介
13	素材遊び・音遊びアート		

## ● 大学・美術館 (会場：㊤墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	シンポジウム パネリスト
14	大学教育	平谷 美華子(東京富士美術館) 米徳 信一(武蔵野美術大学), 三澤 一実(武蔵野美術大学)
15	大学と美術館	原瀬 裕孝(ルーヴル-DNP ミュージアムラボ), 亀井 愛(三井記念美術館), 熊谷香寿美(東京都美術館)
16	美術館	伊藤 達矢(東京芸術大学)



● 文部科学省 指導者



岡田 京子 氏

昭和 61 年 4 月 東京都公立小学校 教諭  
 平成 21 年 4 月 東京都公立小学校 主任教諭  
 平成 23 年 4 月 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官  
 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官



東良 雅人 氏

昭和 62 年 4 月 京都市立中学校 美術科教諭,  
 京都市立小学校 図画工作科専科教員  
 平成 14 年 4 月 京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事  
 平成 23 年 4 月 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官  
 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官

● 第 52 回東京都図画工作研究大会城東大会 記念講演・講師



藤森 照信 氏

建築家、建築史家、工学院大学教授、東京大学名誉教授、工学博士  
 2006年第10回ベネチアビエンナーレ日本館コミッショナー  
 主な建築作品《神長官守矢資料館》《タンポポ・ハウス》《ニラ・ハウス》《高過庵》  
 《秋野不矩美術館》《熊本県立農業大学学生寮》《矩庵》《ラムネ温泉館》  
 《ねむの木こども美術館》《焼杉ハウス》《忘茶船・入川亭》《空飛ぶ泥船》他  
 主な著書 「藤森照信の茶室学」六耀社 「藤森照信建築」TOTO 出版  
 「明治の東京計画」岩波書店 「建築探偵の冒険」筑摩書房 「路上観察学」  
 筑摩書房 「東京路上博物誌」鹿島出版会他多数

● 第一日目（全体会）校種別代表パネリスト （敬称略・五十音順）

**長尾 菊絵** 東京都西東京市立ひばり丘中学校主任教諭。大学卒業後、東京都公立中学校美術教諭として勤務。今年より、都中美の教科研究部の部長。「子供の思いを大切にす  
る美術」をモットーにしてきたが「他者や社会と繋がる美術」を、次のテーマに考えている。小学生二人の育児と仕事に奮闘中。

**中西 一洋** 東京都立両国高等学校・附属中学校主任教諭。講師として品川区立の小学校で1年間、正規採用として兵庫県立の中学校で4年間勤務。2008年より入都し、都立高校で5年勤務。現在、両国高等学校・附属中学校に在籍している。モットーは「美術好きにさせる」です。

**三澤 一実** 武蔵野美術大学教授。埼玉県の公立中学校教諭、埼玉県立近代美術館主査、文教大学教育学部准教授を経て、現在、武蔵野美術大学教授。旅するムサビを主宰し、学生と全国各地の学校で鑑賞ワークショップを展開。5年間で12都道府県と海外の延べ52校で計69回実施され、延べ約8000人と関わる。

**山野井 誠** 東京都狛江市立第五小学校教諭。一般企業就職後、2004年か～2005年まで産休代替職員として中央区立城東小学校に勤務。その後、2013年まで目黒区立東山小学校に勤務。現在は狛江市立狛江第五小学校の図画工作科の専科教諭として在籍。今年度より都図研研究局員。



# 幼稚園



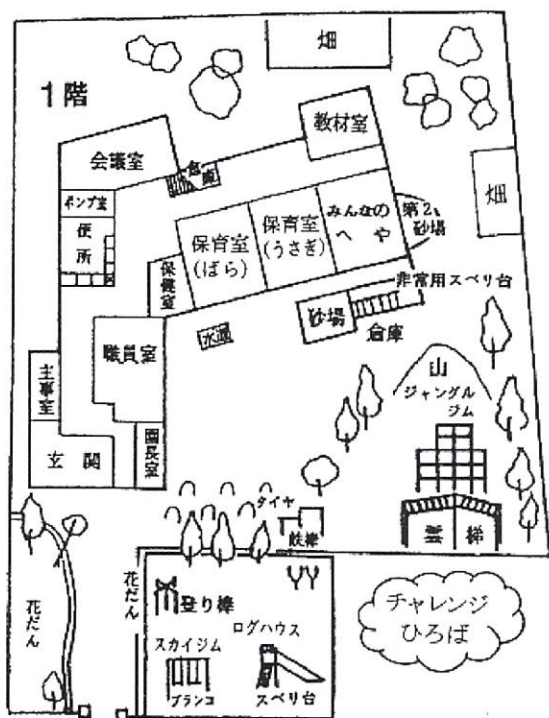
# 幼稚園部会 時程

9:30~10:00      11:30      12:30      13:30      14:00      15:30      16:30~16:40

受付	公開保育	昼食	公開保育 素材体験 コーナー	移動	全体会	分科会	閉会
----	------	----	----------------------	----	-----	-----	----

- ・年少ばら組一斉活動
- ・年中ことり組一斉活動
- ・自分で選択する遊び  
(年少 ばら組)  
(年中 うさぎ組・ことり組)  
(年長 やま組・そら組)

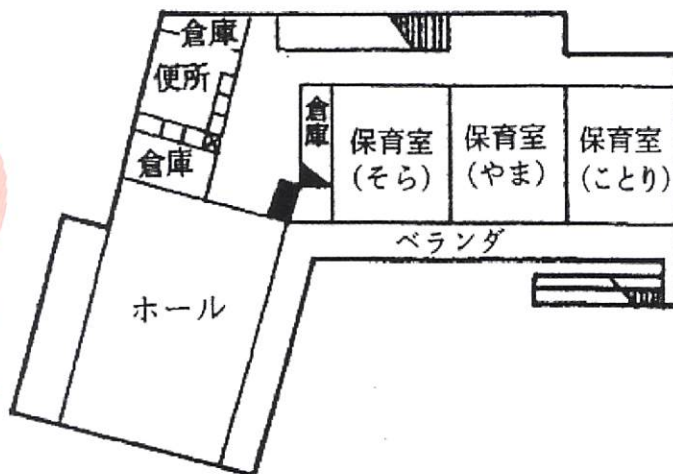
## 会場図



- ・受付を通過して玄関からお入りになり、自由にご参観ください。
- ・3歳児ばら組学級で10時30分より一斉活動の公開保育を行います。
- ・昼食後は園庭、裏庭で秋の自然とかかわって遊ぶ様子をご参観ください。
- ・昼食をとる方は「みんなのへや」をご利用ください。

- ・4歳児ことり組で11時より一斉活動の公開保育を行います。
- ・午後2時よりホールで全体会を行います。3時30分からの分科会は人数により、ホール、そら組保育室、やま組保育室で行います。

## 2階



## 幼稚園発表一覧

- 公開保育① 文京区立千駄木幼稚園 3年保育3歳児学級（絵の具遊び）
- 公開保育② 文京区立千駄木幼稚園 3年保育4歳児学級（泥粘土遊び）
- 公開保育③ 3年保育 4歳児・5歳児  
ごっこ遊び、砂遊び、落ち葉や木の実の遊び など
- ★実践発表① 練馬区立光が丘さくら幼稚園 教諭 篠原 直子先生
- ★実践発表② 千葉県浦安市立美浜南幼稚園 園長 當銀 玲子先生
- ★実践発表③ 東京学芸大学附属幼稚園 教諭 大澤ちづる先生
- ★実践発表④ 神奈川県横須賀市立大楠幼稚園 主任 飯島 弘子先生

## 講師紹介

### ●淑徳大学 准教授 榎 英子先生

淑徳大学総合福祉学部教育福祉学科准教授。専門は、造形教育・幼児教育。親子の造形サークルの指導を30年以上継続し、こども環境学会活動賞受賞。幼稚園で実践研究を行い、保育者の養成と支援に取り組んでいる。主著は『保育をひらく造形表現』（萌文書林）



### ●造形教育家 小串 里子先生

1959年から東京都の特別支援学校で美術教師として造形指導を担当。また現代美術の創作活動を行い、様々な展覧会に出品。その後、武蔵野美術学校で非常勤講師を務める。越後妻有アートトリエンナーレ（2006）、みんなのワークショップ展（さいたま市2009）などのワークショップを行い、造形教育家として活躍中。主著は『ワクのない表現教室（自己創出力の美術教育）』（フィルムアート社）、『みんなのアートワークショップ』（武蔵野美術大学出版局）

助手として ●オガサワラマサコ（小笠原真子）先生（造形教室 主宰）  
●加藤 蘭里先生（カリタス学園小学校）

## 助言者紹介

- 中央区立泰明小学校 主任教諭 高村 弘志先生  
（元東京都図画工作研究会 副会長）
- 白百合学園中・高等学校非常勤講師 浅野 瑞枝先生  
（造形教室ホットクレヨン主宰）



公開保育1《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都文京区立千駄木幼稚園

矢澤 弘美

## ・造形遊び ・感触 ・色 絵の具に触れることを楽しんで

▶ 幼稚園 3歳児 表現

### ① 研究テーマとのつながり

3歳児にとって園生活の中では初めて見るものや経験することがたくさんあり、日々自分のアンテナをはりめぐらせて、おもしろそうと感じたものにかかわって遊んでいる。3歳児と同じ目の高さで園庭を見たり、しゃがんで地面をじっと見たりしていると、面白い世界に気付くことも多い。

3歳児が「感じるままにのびのびと」遊べるように、たっぷり感触を味わったり体全体を使って遊んだりできる環境をつくり、一人一人の見つけた面白さを受け止めてかかわっていききたい。

### ② 分科会の視点から

6月に指絵の具に触れて遊ぶ活動を行った。始めは指先で絵の具に触れていた幼児も手の平全体で触ったり教師と手を合わせたりして感触を味わい、自分なりの楽しみ方を見付けて楽しんでいた。絵の具の色を白からピンクへと変化させることで、どの子も抵抗なくクリームに触るような感じで触れたり、自分の手に塗りたいくったりし、指先で模様を描いたり、歩きながらダイナミックに描いたりして楽しんでいた。遊びの持続時間には差があり、すぐに手を洗いたくなる幼児、手を洗ってまた遊び始める幼児、ずっと描き続ける幼児など様々な姿が見られた。

今回も体全体を使って自由にのびのびと表現したり、感触を味わったりできるよう、いろいろな場を用意する。偶然色が混ざることやいろいろな形に見えることに気付き、楽しんでほしい。

### ③ 題材の概要

絵の具に触れる活動として、指絵の具の他、色水遊び、ビー玉ころがし絵、手形遊び、スタンプ遊びなどを行ってきた。絵の具に触れることをいやがる幼児はほとんどなく、いろいろなものに塗ったり、かいたりすることを楽しんでいる。偶然できた色や形に「きれい」とつぶやいたり「～

みたい」と見立てたりする姿が見られる。汚れた手を自分できれいにしようとする姿も見られるようになってきた。

今回は絵の具と筆を用いて、広い平面や大きい立体に色を塗ったり、動きなが



らかいたりして、自分なりにのびのびと表現する楽しさを感じてほしい。絵の具は初めに薄い色を準備し、後から濃い色を提示することで、混色や色のコントラストを楽しめるようにしていく。また模造紙、段ボール、ビニールクロスなどいろいろな場を用意し、白地にかくだけでなく、色の濃い紙や透明のものに塗ったりかいたりできるように準備し、幼児が自分なりの面白さを発見して楽しめるようにしたい。

取り組みには個人差があるので、ゆったりと個々の取り組みを受け止め、次の機会へとつなげていくようにする。





公開保育2《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都文京区立千駄木幼稚園

鈴木 直子

## 造形遊び・感触 体全体で泥粘土に触れて

▶ 幼稚園 4歳児 表現

### ① 研究テーマとのつながり

4歳児はいろいろな遊びの中で自分なりのイメージをもったり、「おもしろい」と感じたことに夢中で取り組んだりすることが多くなる。同じ遊びをしていても、一人一人が面白さを感じていることは様々であり、自分のイメージを広げたり、「こうしたい」という思いをもってじっくり取り組む姿も見られる。泥粘土は自分の手足を使ってかかると形が変わり、手応えがあり、いろいろな表現をすることができる。パワーのある幼児にとっては楽しい素材である。「感じるままにのびのびと」遊べるように、ゆったりした場で、友達の動きも意識しながら、いろいろな動きをたっぷりと楽しめるようにしたい。

### ② 分科会の視点から

6月に学級全体で初めて泥粘土の活動を行った。始めは指先で触っていた幼児も、だんだんと足で踏んだり、腕全体を使って粘土をこねたり、投げ下ろしたりして楽しみ始めている。広い場をつくると、粘土の上を歩いたり、投げつけたり、粘土を山にしてその上からジャンプしたりする動きも出てきた。何回か遊ぶうちに、いろいろな動きが出てくる。今回も体全体を使って遊び、感触を味わい、イメージをもったり、自分なりの表現をしたりして楽しんでほしい、また友達の表現に目を向けたり、教師や友達と一緒に遊んだりすることの楽しさも感じてほしいと考える。

### ③ 題材の概要

粘土は泥粘土の他、小麦粉粘土、油粘土などに親しんできた。恐竜や虫、動物が好きで、自分もすぐになりきって遊ぶ幼児や、じっくりと遊び、上手に力加減をしながら最後までしっかりと片付ける幼児もいる。泥粘土の遊びが気持ちを解放して遊んだり、友達とつながったりするきっかけになっている。

今回は泥粘土を固まりにしてベニヤ板の上に出し、叩いて伸ばし、裸足でその上を歩く動きをしながら気持ちをほぐしていきたいと考える。そして手足を使ってダイナミックに遊ぶ中で、イメージがわいてきたら、じっくりとつくれる場を用意していく。一人一人のイメージを認め、共感し、教師も一緒に粘土に触れたり、イメージを広げとかかわったりしながら、友達の表現にも気付かせていきたいと考える。

そして片付けも教師と一緒にいき、たっぷり遊んだ満足感や力一杯やりとげた充実感を味わえるようにしたい。





午後の公開保育《連携・つながりのポイント》

[保育者]

東京都文京区立千駄木幼稚園

野崎 美幸・野木村温子

木下えり子・吉田 広恵

## 造形遊び・感触・自然とのかかわり 秋の自然に触れて

▶ 幼稚園 4・5歳児 表現

### ① 研究テーマとつながり

幼児の遊びの中には様々な表現がある。砂場で遊んでいる幼児、積木で遊んでいる幼児、お面をかぶってごっこ遊びをしている幼児など、幼児は遊びの中で自分が必要と感じた時や「つくりたい」と思った時に、その場にあるモノを使ってつくり、見立てたりなりきったりして楽しむ。

砂の上に並べた木の実や小石、何気なく地面に引いた線などにも幼児の思いが表れている。

保育室でも園庭でも屋上でも、遊びの中で様々な表現が生まれている。ちょっとしたきっかけでイメージがふくらみ、身近なモノを使ってかいたりつくったりする中で遊びがどんどん楽しくなっていく。

幼児にとって、かいたりつくったりすることは全身運動でもあり、言葉の表現を伴うものでもあり、自然への興味・関心を広げるものでもあり、人とかかわりを豊かにするものでもある。全ての領域にまたがって幼児の遊びは展開しており、遊ぶ力のある子どもは、絵画制作においても、自分の力を発揮していく。好きな遊びの中で、幼児の遊びの中にどんな造形の楽しさがあるのか、幼児の遊びがどんな可能性を秘めているのか、参観の皆様と一緒に幼児の遊びを見て、一人一人の思いやイメージに目を向け、一緒に考えてみたい。

### ② 分科会の視点から

千駄木幼稚園は「土と緑の幼稚園」というキャッ

チフレーズの通り、都内でも木々の多い、自然豊かな園である。幼児は日々、園庭を探検し、木の実や草花で遊んだり、虫を見つけたり、小動物とかかわったりしている。秋には園庭は黄色い銀杏の葉やカエデ、カキ、サクラなどの葉で埋まり、赤いイイギリやドングリ、シイノミ、クリの実などが落ちる。園庭でどんな遊びが展開されるか、どんな環境があると幼児の遊びが更に楽しくなるか、助言者の先生方と参観者の皆様と一緒に考えてみたい。そして参観者の方にもぜひ、様々な素材に触れて、幼児と一緒に楽しんでいただければと思う。



### ③ 題材の概要

木の実や落ち葉、木の枝、砂泥等を使った遊びをたっぷり、体全体で楽しめるようにしたい。2日間、園行事が続いた後の公開であるが、自由な雰囲気の中で、気持ちを発散し、ダイナミックに自然との触れ合いを楽しませたいと考えている。





## 分科会1 幼稚園

実践発表《連携・つながりのポイント》

[発表者]

東京都練馬区立光が丘さくら幼稚園

篠原 直子

## 「出会い→味わい→満足する」 共に感じ、味わうことをめざして

▶ 練馬区立光が丘さくら幼稚園 4・5歳児 表現・人とのかわり

### 1 提案趣旨

本園は、東京都練馬区光が丘の大型団地の1Fに位置する2年保育の幼稚園である。平成21・22年度に『豊かに感じ表現する子供をはぐくむ』をテーマに、のびのびと描くための手立てを探ってきた。その中で、幼児が『豊かに感じ表現する』ためには、『出会い』『味わい』『満足する』という循環の大切さを学んだ。一人一人の幼児が、十分にそのサイクルを体験していくことが、互いの『表現』を受け止め合い、やがて『共に感じ、味わう』ことにつながっていくと考える。

### 2 実践の概要

私たちは、幼児が素材や画材そのものの特性を味わっている姿に着目した。

フィンガーペイントでは、最初は無色の小麦粉糊で感触を味わい、やがて色を入れることで模様が浮き上がる様や複数の色が混ざり合う美しさを味わった。

泥粘土では、水分量による感触の違いを感じ、ダイナミックに壁面に投げつけたり指でかたどったりすることも楽しんだ。

教師も素材の特性の変化を共に面白がり、豊かな『出会い』をたっぷり『味わい』『満足』するための環境の工夫が大切である。



また、5歳児後半になると共に園生活を進めてきた学級の友達とイメージや目的を共有し、それぞれの表現を受け止め合っている。修了間際、自分たちが育てたヒヤシンスの開花を喜び、じっと見つめて描くまなざしには、巣立つ日を感じながら、これまでの仲間との日々を愛しむ気持ちがこもっていた。



### 3 成果と課題

私たちは、幼児が豊かに感じ表現するために次の3点の大切さを学んだ。①素材そのものが変化し多様な特性をもつものとの『出会い』—例えば、砂や水、光や影、泥粘土やシャボン玉、絵の具や色水、スタンプなど②たっぷりと『味わう』ための環境の工夫—垂直の壁面や広い空間いっぱいにつなげた画面、向こう側が見える透明シートなど、互いの動きや取り組みが伝播し合っていくような工夫③共に『満足する』体験を積み重ねる—このことは、造形活動のみならず園生活全てにおいて、豊かな体験が繰り返し展開されるような保育が重要であることを確認した。



## 分科会1 幼稚園

実践発表《連携・つながりのポイント》

## 素材「砂」を共に感じる

[発表者]

千葉県浦安市立美浜南幼稚園

當銀 玲子

▶ 浦安市立美浜南幼稚園 3, 4, 5歳児 表現

## ① 提案趣旨

園庭において幼児がしゃがんで地面の砂に触れたり、両手ですくってこぼしたり、絵を描いたりすることを自然に行っている。この姿（表現）を視覚的な魅力を高めることで、より楽しい活動にできるのではないかと考えて開発した教具が『カラー板』である。今回は、これまで4・5歳児への実践研究を進めてきたが、新たに3歳児を対象とした実践結果を加え、『カラー板』から生まれる表現の豊かさについて考察する。

## ② 実践の概要（題材について等）

題材『カラー板』：カラーベニヤ板に木枠をつけたもの。砂をふるった画面に指で描くと枠をゆすただけで絵が消える。型抜き、箱庭的な表現等、立体表現も可能。設定の仕方：戸外遊びの際、園庭に『カラー板』を設定し、幼児が自由に用いて遊ぶ様子を観察する。

事例1：3歳児 向かい合って座り、砂を載せて偶然にできる形を見ては顔を見合わせ笑う。両端を持ち、カラー板をゆすり、砂が形を変えていく様子を見て楽しむ。一人が板を持ち上げると砂が相手側に移動し、もう一人が持ちあげると反対側に移動することから、二人は立ち上がって、交互に板を持ち上げたり下げたりしながら、園庭をリズムカルに歩き始める。

その際、砂が動く際に発する音も楽しんでいた。

事例2：4歳児 カラー板をビールケースに斜め立てかけ、滑り落ちる砂の動きと音を楽しみ始めた。



どンドン砂を乗せて板を埋める遊びに発展するが、滑らせるたびに、「見て！こんな形になった！」とできる形（模様）を楽しんでいた。

事例3：5歳児 戸外なので、園庭で集めたさまざまな自然素材を利用して表現を楽しむ姿が見られる。枠があることが、美的に仕上げようとする意識や完成させようとする意欲、達成感につながる。（上記以外は発表時に提示する）



## ③ 成果と課題

成果『カラー板』を活用しての表現行為を整理した結果、下記の通りの多様な表現が生まれている。

楽しさ	事例にみられる表現行為	学びの要素
砂の動き	傾け動きに見入る、ゆすって消す	感性
砂の音	砂が動く音を楽しむ	音表現
砂の形	偶然の形を見立て、変化を楽しむ	見立て
砂の性質	ふるう、滑らせる、白砂とめれた砂等の区別	素材体験
運動跡	腕のストロークや回転による跡を楽しむ	触覚、身体
ごっこ遊び	家の中をイメージしてごっこ遊び	イメージ
共感共鳴	偶然性を共に楽しみ笑いあう	人間関係
線描	指での線描、地と図による描画を体験する	描く体験
型取り型抜き	葉の上から砂をふるって型をとる、ケーキ作り	つくる体験
削りと付加	湿った砂を固めて削る、棒をさす	つくる体験
構成	組み合わせて遊びの場をつくらうとする	工夫する
自己表現	砂で自分なりの世界を表現して楽しむ	造形表現
協同的表現	イメージや発想を伝え合ってくる	人間関係

課題 今後『カラー板』という環境から生まれた「砂」による多様な表現が、幼児の発達の特性とどのように関係しているのかを明らかにすることにより、更なる豊かな表現への援助が可能になると考える。



## 分科会1 幼稚園

実践発表《連携・つながりのポイント》

## 本物との出会いが イメージを豊かにする

[発表者]

東京都東京学芸大学附属幼稚園  
小金井園舎

大澤ちづる

▶ 東京学芸大学附属幼稚園 4歳児 表現・人とのかかわり

### 1 提案趣旨

この実践では、幼児の興味を受けて、教師がその興味を広げたいと思い、本物と出会う機会を設定した。そこでの経験が幼児のイメージを豊かにし、遊びの中での表現につながっていった姿を報告したい。

### 2 実践の概要（題材について等）

10月下旬頃、幼児たちは気の合う友達と一緒にキャンディー屋さん、人魚姫などイメージに合ったものをつくったり、動いたりして楽しむ姿が育ってきていた。人魚姫になりきって遊ぶ幼児たちは、姫のイメージから紙皿や牛乳パックで靴をつくり、かかとに木片をつけてヒールに見立て、それを履いて遊んでいた。

教師は、そのような幼児の育ちから、イメージの世界を遊ぶことや、友達とイメージを共有する楽しさを十分に経験できるようにしたいと考えた。そして、それが11月下旬の「子ども会」で行う劇につながることを願っていた。

紙皿や牛乳パックの靴は、履けることやヒールがあることが魅力的で、それを真似する姿もあった。しかし、素材が固く、直線的な靴しかできないために、イメージを十分に表現するものとはなりにくかった。教師は素材として、もう少し扱いやすく、イメージが引き出される素材はないか考

え「包装紙」を用意した。平面から立体をつくるのは4歳児にとって難しさを感じたが、足に合わせて形を整えるつくり方に

包装紙で靴づくり



は、試行錯誤しながらも色々な形が生まれる面白さがあった。また、包装紙の色や柄も幼児の思いやイメージを引き出し、それぞれの個性が表れてきた。教師も「靴屋」となって、幼児たちと一緒に靴づくりを楽しむことで、イメージの世界と幼児をつなげることができた。

そのような中、幼児の興味を深める体験として靴職人による靴づくりの実演を計画した。1枚の革から靴が出来上がる行程を初めて目の前で見て、ものをつくることの面白さや不思議さに感動していた。多様な道具を見たり、店頭にはない個性的な手づくり靴に触れたり、履いてみたりすることが刺激となった。素材は違っても、1枚の皮からつくり上げられる靴は、包装紙でつくる靴とつくり方が似ているところがあった。「コンコンぐつ」（写真右側）は、折り紙でキツネを折って、それを貼りつけたことで生まれた靴である。

靴職人実演の翌日、靴づくり遊びができるように用意していた保育室のコーナには多くの幼児が集まり、靴づくりに熱中した。また、ひとりひとりが自分の靴をつくり上げ、「こびととくつや」の劇を楽しみ、一体感を味わうことができた。



ふらっとしゅーず

コンコンぐつ

### 3 成果と課題

「包装紙」という素材との出会いと「靴職人との出会い」という感動体験がイメージを豊かにし、幼児たちの遊びに取り込まれていった。また、教師や友達がそのプロセスを共有したことで豊かな遊びへとつながったと感じている。



## 分科会1 幼稚園

実践発表《連携・つながりのポイント》

## 遊びからイメージを引き出して

▶ 横須賀市立大楠幼稚園 5歳児 表現・環境

[発表者]

神奈川県横須賀市立大楠幼稚園

飯島 弘子

[助言者]

白百合学園中・高当学校

浅野 瑞枝

## ① 提案趣旨

横須賀市立大楠幼稚園は、横須賀市の西部に位置し海・山・川と自然に恵まれた環境にある。

幼稚園行事の中に自然を生かしたり、制作活動に自然物を取り入れたりなど、豊かな環境を生かす保育計画に日々取り組んでいる。

幼児たちは園外保育やマラソンで海・山・川に行ったとき、流木や石・貝殻などを拾ってくる。

そのままの形を見ているだけでも様々なことを想像し楽しい気持ちになるが、それだけで終わるのではなく、ひとつの形にする楽しみを体験してほしいと思い「流木あそび！」を提案したいと考えた。

## ② 実践の概要（題材について等）

① 幼児たちと園外保育に行ったとき拾ってきた流木・石・貝殻を見ながら、どんなものを作ってみたいかを考える。

② イメージがまとまった幼児と共に材料探しを行う。イメージが浮かばないときは、教師の作品を参考にしながらイメージを膨らませる声かけをする。

写真たて・風鈴・植木ばちカバー・いす・テーブル・かたち見つけ（鳥・魚など）

③ 幼児のイメージを聞き、教師が「ホットボンド」でおおまかな形にする。

④ 形に出来上がった作品に流木・石・貝殻などの飾りつけをする。

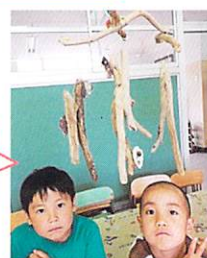
⑤ 自然物を張り付けるため、幼児がボンドで貼り

付けにくい場所は、教師が「ホットボンド」で丁寧にはる。



流木を組み合わせた写真たてです！

流木の風鈴  
♪いい音でるよ♪



## ③ 成果と課題

- ・豊かなイメージづくりをするためには、豊富な材料が必要となるため、教師は幼児と共に収集する他にたえず素材を集めるという気持ちを忘れないようにする。すると、シーガラスは〇〇海岸・貝殻のたから貝は〇〇海岸・つるつるの石は〇〇川というように、収集場所を把握することもできる。
- ・幼児のイメージを形にする時に、教師がどうしても技術的に困難な時は、教育支援ボランティアの協力を得ることもできた。
- ・自然物を使っただけの作品は同じ作品がふたつとなく、どんな作品も失敗がないように思われる。そのためダイナミックな作品に仕上がりに、楽しみながら制作活動を行うことができる。
- ・幼児と海・山・川を散歩する中、流木や貝殻以外に落ちているものが多すぎる。素材集めの他に、環境問題を目の当たりにし話し合いをする機会に恵まれた。
- ・今後も様々な素材に触れ、素材を生かし、楽しみながら制作活動を行っていきたい。



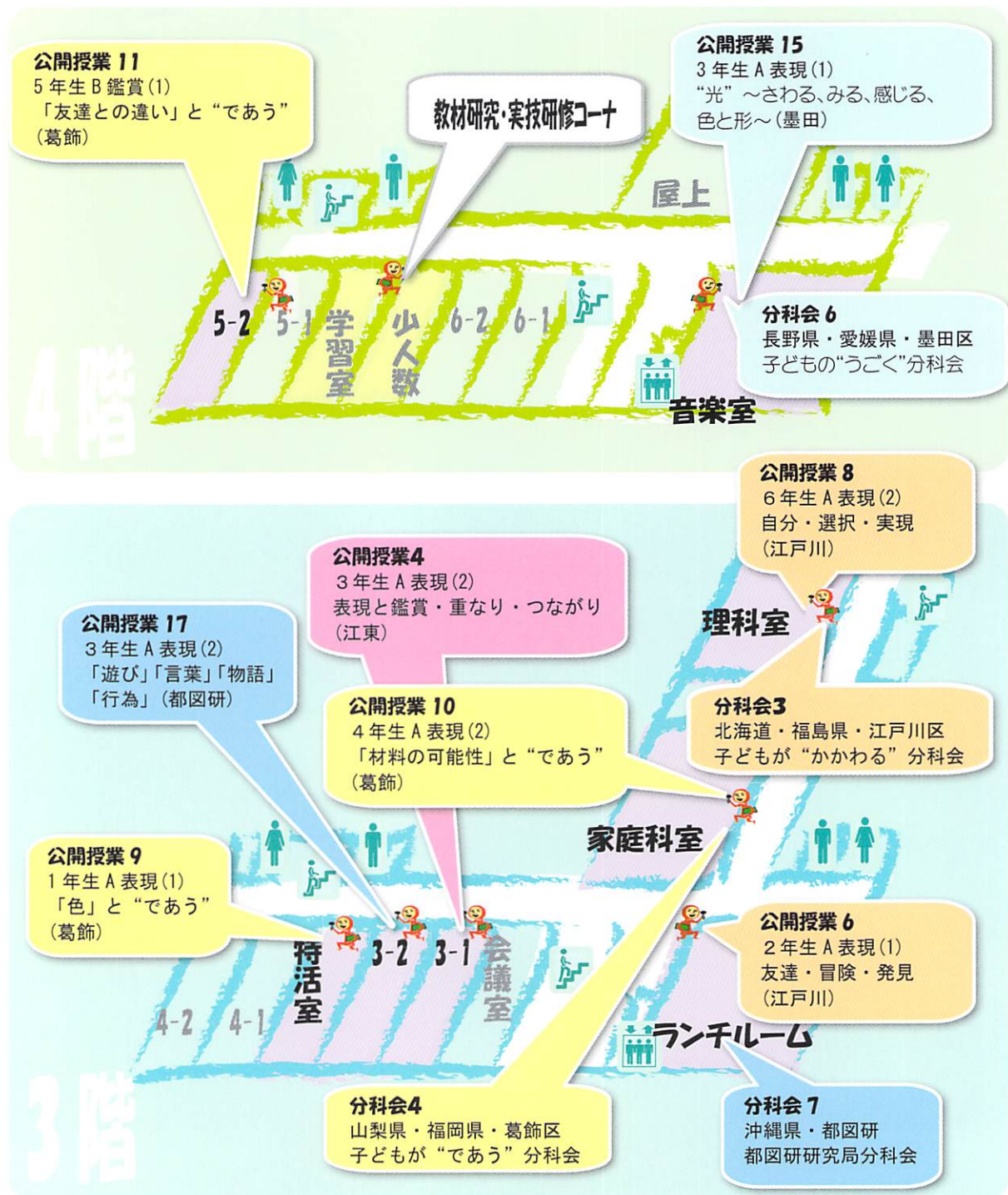
# 小 学 校



# 大会日程

9:00	10:00	11:35	12:40	13:30	15:00	16:00	16:50	18:00
受付	公開授業	屋食	分科会		移動	全体会		交流会
			各道府県 代表者発表	各分科会 研究発表		研究協議全体会 文部科学省 指導講評	藤森 照信氏 記念公演	閉会

## 分科会・公開授業会場一覧



小学校





**公開授業7**  
4年生 A 表現 (1)  
自分・友達・夢中・発展 (江戸川)

**公開授業16**  
1年生 A 表現 (2)  
「遊び」「イノセント」  
「ピュア」(都図研)

**公開授業5**  
6年生 B 鑑賞 (1)  
鑑賞・美術館との連携 (江東)

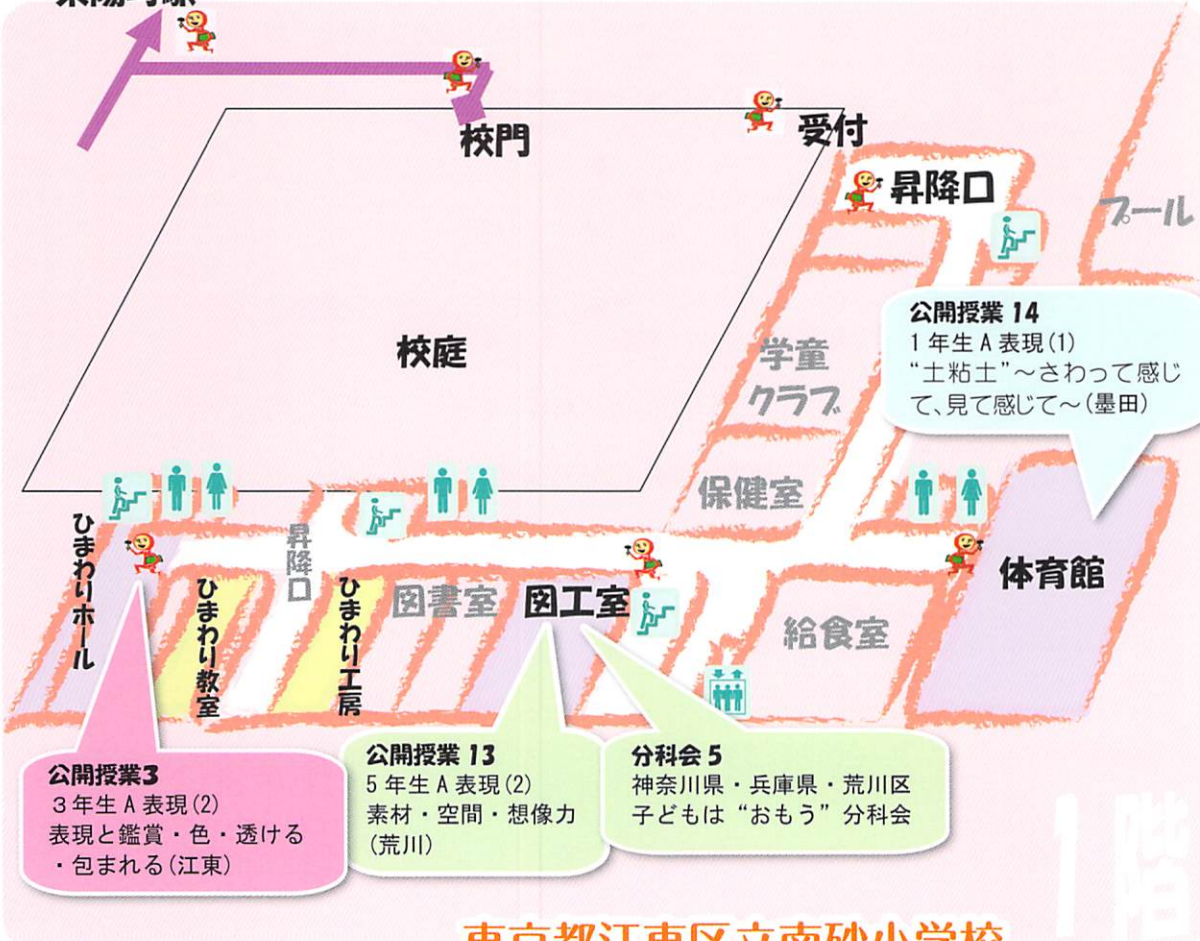


**公開授業12**  
2年生 A 表現 (2)  
素材・手・感じて“おもう”  
“ひろがる”(荒川)

**分科会2**  
宮城県・東京都・江東区  
子どもの“みる”分科会

2階

東陽町駅



**公開授業14**  
1年生 A 表現 (1)  
“土粘土”～さわって感じて、見て感じて～(墨田)

**公開授業3**  
3年生 A 表現 (2)  
表現と鑑賞・色・透ける  
・包まれる (江東)

**公開授業13**  
5年生 A 表現 (2)  
素材・空間・想像力  
(荒川)

**分科会5**  
神奈川県・兵庫県・荒川区  
子どもは“おもう”分科会

1階

東京都江東区立南砂小学校



分科会発表一覧



分科会2	子どもの“みる”分科会 表現と鑑賞の関連した働き合い・鑑賞・美術館との連携			ｺﾝﾋﾞｰﾝ
	提案者	東京都江東区立東雲小学校 近藤 麻里		
	公開授業 3	表現と鑑賞・色・透ける・包まれる 授業者 東京都江東区立毛利小学校 片山 知子	2年生 A表現(1)	ひまわり ホール
	公開授業 4	表現と鑑賞・重なり・つながり 授業者 東京都江東区立水神小学校 岩崎 陽	3年生 A表現(2)	3-1教室
公開授業 5	鑑賞・美術館との連携 授業者 東京都江東区立第二亀戸小学校 小林 ちあき 画家 内海 聖史 東京都現代美術館学芸員 池尻 豪介	6年生 B鑑賞(1)	ｺﾝﾋﾞｰﾝ 廊下他	
分科会3	子どもが“かかわる”分科会 「自分」「ひと」「友達」「教師」「場所」「もの」「こと」			理科室
	提案者	東京都江戸川区立第三松江小学校 中村 和哉		
	公開授業 6	友達・冒険・発見 授業者 東京都江戸川区立下小岩小学校 木澤 奈月	2年生 A表現(1)	ランチ ルーム
	公開授業 7	自分・友達・夢中・発展 授業者 東京都江戸川区立下鎌田東小学校 衛藤 陽子	4年生 A表現(1)	多目的 室
公開授業 8	自分・選択・実現 授業者 東京都江戸川区立新堀小学校 水谷 さくら	6年生 A表現(2)	理科室	
分科会4	子どもが“であう”分科会 試行錯誤のきっかけとしての“であい” “であい”の視点で、授業をデザインする			家庭科 室
	提案者	東京都葛飾区立白鳥小学校 朝重 久美子		
	公開授業 9	「色」と“であう” ~つくって“わくわく”やりたいことを広げていく子~ 授業者 東京都葛飾区立青戸小学校 山川 知也	1年生 A表現(1)	特活室
	公開授業 10	「材料の可能性」と“であう” ~“であい”を自分の知識や経験とつなげてつくります子~ 授業者 東京都葛飾区立葛飾小学校 渡邊 梨恵	4年生 A表現(2)	家庭科 室
公開授業 11	「友達との違い」と“であう” ~感じて、語って、活動へつなげる子~ 授業者 東京都葛飾区立金町小学校 奥山 美香	5年生 B鑑賞(1)	5-2教 室	
分科会5	子どもは“おもう”分科会 自分の思いを表すための想像力“おもう”の広がりや変容			図工室
	提案者	東京都荒川区立尾久西小学校 山崎 雅愛		
	公開授業 12	素材・手・感じて“おもう”“ひろがる” 授業者 東京都荒川区立第二日暮里小学校 桑島 有子	2年生 A表現(2)	2-3教室
公開授業 13	素材・空間・想像力 授業者 東京都荒川区立尾久宮前小学校 川田 幸那	5年生 A表現(2)	図工室	
分科会6	子どもの“うごく”分科会 子ども 身体性 みる			音楽室
	提案者 講師	東京都墨田区立第一寺島小学校 東郷 拓巳 帝京大学 講師 辻 政博		
	公開授業 14	“土粘土”~さわって感じて、見て感じて~ 授業者 東京都墨田区立言問小学校 京嶋 一喜	1年生 A表現(1)	体育館
	公開授業 15	“光”~さわる、みる、感じる、色と形~ 授業者 東京都墨田区立隅田小学校 内田 康予	3年生 A表現(1)	音楽室
分科会7	都図研研究局分科会 “子どもの遊びが生きる図工”子どもの遊び			ランチ ルーム
	提案者	東京都あきる野市立東秋留小学校 雨宮 玄		
	公開授業 16	「遊び」「イノセント」「ピュア」 授業者 東京都柏江市立和泉小学校 河原 賢一	1年生 A表現(2)	1-3教室
公開授業 17	「遊び」「言葉」「物語」「行為」 授業者 東京都板橋区立板橋第六小学校 杉山 聡	3年生 A表現(2)	3-2教室	



# 分科会 講師紹介



子どもの「みる」

分科会2  
コンピュータ室



佐々木 達行(ささき たつゆき) 横浜国立大学教育学部卒業。東京都立学校、筑波大学附属小学校教官教諭、宮崎大学教授を経て千葉大学教授となり退官。現在、東京福祉大学非常勤講師。著書『造形教育における授業デザインと授業分析』、『造形教育における授業の課題・目標と評価』、等多数。文部省図画工作科指導資料作成協力者。国立教育政策所、評価規準、評価方法等の研究開発協力者、研究指定校に係わる企画委員会の協力者、等を歴任。

子どもが「かかわる」

分科会3  
理科室



水島 尚喜(みずしま なおき) 聖心女子大学文学部教育学科教授  
〈専門〉初等及び中等美術教育学 〈職歴等〉小学校学習指導要領及び解説書図画工作編作成協力者、文部科学省学習指導要領改善協力者(中学校美術)等を歴任。2013年4月より美術科教育学会副代表理事(学会誌編集委員長)  
〈主要著書〉『新版造形教育実践全集』(日本教育図書センター)、『新訂図画工作・美術教育研究』(教育出版)等

子どもが「あゆむ」

分科会4  
家庭科室



立川 泰史(たちかわ やすし) 東京学芸大学附属小金井小学校現職  
東京学芸大学大学院教育学研究科美術教育専攻修了。東京学芸大学、東京造形大学、関東学院大学にて非常勤講師を兼任。子どもが身体や言葉で結ぶ固有な「意味」の生成過程に注目。大きな布に印刷した絵画に包まる「汗をかく鑑賞活動」、エピソードの語り(ナラティブ・ヒストリー)を生かす自己評価などを実践。

子どもは「おもむく」

分科会5  
図工室



西野 範夫(にし のりお) 元上越教育大学教授・文部省視学官  
「学習臨床学」自ら生き学ぶ有能な存在であるという「子ども観」に立つ教育を一貫して追究。文部省では、子どもが自ら生き学ぶ教育の基礎として「造形遊び」を位置付け、その論理を発展させ、「新しい学力観の教育課程」の作成に携わる。大学でも、「学習臨床学」を立ち上げ、子どもの学びに寄り添う実践学的研究によって「子どもの学びの論理が生きる教育」を追究。現在もそれを深めている。

子どもの「つくる」

分科会6  
音楽室



辻 政博(つじ まさひろ) 帝京大学教育学部専任講師  
東京造形大学卒業。東洋大学大学院修了。大正大学大学院単位取得満期退学。東京都図画工作研究会前会長。文部省教育課程に関する総合調査結果分析協力者。国立教育政策研究所「評価規準、評価方法の工夫改善に関する調査研究協力者」等。『子どもの絵の発達過程』日本文教出版。『図工のきほん大図鑑』PHP 研究所等

都府研研究局

分科会7  
ランクルーム



山本 高之(やまもと たかゆき) 愛知県立芸術大学非常勤講師  
1974年愛知県生まれ。愛知教育大学大学院修了後、渡英、チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン MA 修了。小学校教諭としての経験から「教育」を中心テーマのひとつとし、子どものワークショップをベースとした映像作品を国内外で制作、発表している。



# 感じる 広がる つくりだす ～子どもの力と子どもの育ち～

研究局長  
東京都江東区立枝川小学校  
谷田 直勝

## ◆研究テーマと研究の方向性◆

造形表現とは、もの、こと、人、場面や状況などを通し、様々に感じ、それらを広げながら、自らをつくりだしていく活動である。

そこで、子どもが造形表現活動に向き合い図画工作科の授業の原点にたちかえる言葉として生まれたものが「感じる 広がる つくりだす」という大会テーマである。

また、図画工作科として「子どもの成長」をどのような課題として捉えていくのか、サブテーマとして「～子どもの力と子どもの育ち～」を設定した。

「感じる」とは、造形表現活動の中で様々なもの、こと、人、場面や状況などに会い、かかわる中で子ども自身が体全体の諸感覚を通して心を動かし、エネルギーを受け取ることであると考えた。

それはまた、造形表現活動を通し、子どもと教師、子ども同士、あるいは自分と対話するなどの中で子どもが深く感じ、自らの感覚や感性を磨いていくことでもある。

「広がる」とは、感じたものや感じ取ったものから心が動いて、その振動が増幅され、他者とのかかわりの中で外へ向かっていくエネルギーになったり、自分の内側へ向かっていくエネルギーになったりして、造形表現活動に対する思いや意図などが広がっていくことであると考えた。

「つくりだす」とは、感じたり、広がったりしたエネルギーから造形感覚や感性を働かせながら新しいものやことを造形的に表現していくことを意味すると捉えた。

また、造形的な表現だけではなく、自らと対峙し、新しい自分自身も発見していくことも含まれている。

この「感じる」「広がる」「つくりだす」が相互に関係し合いながら、子どもの自主性や主体性、造形的な創造力や豊かな情操が育まれると考えた。

## ◆サブテーマとしての～子どもの力と子どもの育ち～について◆

「子どもの力」とは、「つくりだす喜びを知っていること」（造形への関心・意欲・態度）、「どのように表現するか考える力」（発想や構想の能力）、「表現に向けて用具や用法を選び工夫する力」（創造的な技能）、「見たり感じたりする力」（鑑賞の能力）等の、造形的な“資質や能力”のことをいうと考えた。

子どもの好奇心や探究心、また造形表現活動を通して発揮されるエネルギーのすべては、「子どもの力」につながっているものであると考えた。

「子どもの育ち」とは、子どもが本来もっている資質がより豊かに発揮されるような場や状況を設定することで、子どもが自ら気付かなかった内在された力や自主性や主体性が培われていくと考えた。

つまり、「育ち」とは知識や技術のように「教える」ことによってではなく、子ども自らが変容し、より豊かに成長していく過程で生まれていくものであるといえる。



図画工作科は、子どもが新しい自分と出会い、自らが本来もっている資質をより豊かに発揮できるような環境を設定することで、「子どもの力」と「育ち」が幾重にもスパイラルにかかわり、生きる力が培われていくのではないかと考えた。

本研究で私たちは、この子どもの力と子どもの育ちの関係が、授業の中でどのような子どもの姿として表れているのかを改めて捉え直すことにより、図画工作科で育まれる力を明確にしていこうと考えた。そして小学校の6年間の図画工作科の授業の充実を図っていくことで、育ちゆく子どもの中に内在する力を引き出し、一層伸ばしていくことができるのではないかと考えた。

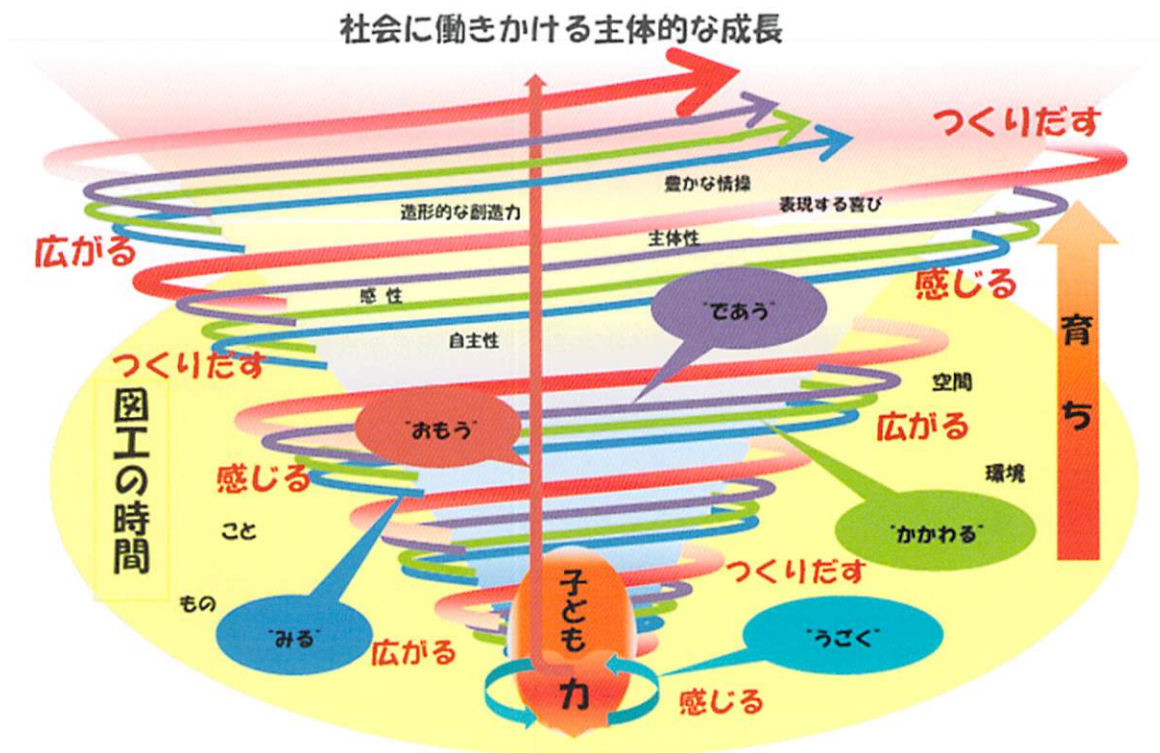
### ◆分科会の考え方◆

子どもは図画工作の授業の中で様々な造形表現活動を行っている。子どもは自分の活動に夢中になり、新しい素材に目を輝かせたり、知らず知らずに素材の手触りを楽しんだり、全身を使って自分の思いを表そうとしたり、友達の作品をみたりするなど、「感じて 広がって つくりだす」活動をする。

子どものもっている本来の力を健やかに伸ばし、育てるには、このような子どもの活動を一つ一つ丁寧にみていき、そこにどのような心の動きや学びがあるかを検証し、研究していく必要がある。

そこで、大会テーマ「感じる 広がる つくりだす ～子どもの力と子どもの育ち～」の基、子どもにとっての「みる」、「かかわる」、「であう」、「おもう」、「うごく」に焦点をあて、造形表現活動における「子どもの成長」について研究を重ねていくことにした。

### ◆研究構想図◆





# 子どもの“みる”分科会

[提案者]  
東京都江東区立東雲小学校  
近藤 麻里

## キーワード

表現と鑑賞の関連した  
働き合い・鑑賞・美術館との連携

[講師]  
前千葉大学 教授  
佐々木達行先生

## ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

幼稚園から高等学校まで、全ての校種で学習指導要領に基づく教育活動が始まった今年度、そのつながりをふまえ、教育のあり方を再構築していくことが必要である。グローバル化が進む現代社会において、人間形成に大きくかかわる造形美術教育。それは、造形美術を愛好する心を育てるにとどまらない。何をみ、何を感じ、何を思うのか。そして、何を伝えるのか。

小学校段階における造形美術教育は、それらの視点を育てること、そして感じ取る心を育てていくことにもつながると考える。造形表現は、言葉を超え、言語以外の感覚で感じ取ることができる。そして、その感じ取った心の動きは、大きくダイナミックに自分の内や外へと広がっていく。そして、その広がり、自己の学びとなり、それが形や色、イメージとして、あるいは言葉となって作りだされていく。

まず、その感じ取るきっかけとして、何を“みる”のか。そして、どのように“みる”のか。

“みる”ことからの学びは、造形表現活動の始まりだけでなく、活動していく中でも“みる”ことで、新しい価値が得られることもあると考える。そのため、あらゆる視点から“みる”ことを考察し、本質に迫る見方や、新しい見方など、自分の世界を広げられるように迫っていきたいと考える。

幼児期からいかにバトンをつなぎ、中学校へバトンをつなぐか。そして生涯にわたって自身の“みる”力を養いながら、豊かに成長し続けられるよう寄り添っていけるかが、鍵になると考える。

## ◆この分科会の概要◆

子どもは様々なものをみて、様々なことを思い、体の諸感覚を総動員し、全身で感じたことから、多くの学びを得、成長している。同じものをみても、人によって感じる場所は様々、視点もそれぞれ違っている。学びは“みる”ことから始まったり、“みる”ことで深まったりすることがある。また、“みる”行為から、イメージはふくらみ、次なるイメージを呼び起こすこともある。しかし、その“みる”行為から感じることや、その時に心が動く大きさも様々である。人は、あらゆる経験からイメージを広げ、それが形や色や線となって、表現につなげていくことが多いのではないだろうか。その経験が多ければ多いほど、イメージはより豊かになり、表現にもつながると期待できる。そして何より個人の成長につながっていくと考える。

子どもは無意識に、“みる”行為と表現することを同時におこなっている。そのことは今回の学習指導要領で明文化された。江東区では、その相互に関連して働き合う“みる”行為と“表現”活動の学びに焦点をあて、どのような“みる”があるか、どのように“みる”を取り上げるか、あるいは意図的に大きくは取り上げず、ごく自然な形で“みる”場や状況、環境などをつくり、その学びを子どもたちに返すか、“みる”行為自体と、“みる”ことからはじまる可能性を考えている。また、“みる”ことの可能性から、美術館と連携し、更なる広がりを考えている。



造形表現は、体の諸感覚を総動員し、自らの表現を追求していくことである。本分科会では、「子どもの“みる”」から造形表現活動を捉え、「何を“みる”か」の視点を整理したり、授業において「子どもの“みる”」場や環境をどのように設定したりするのかを考察しながら、成長し続けられるよう寄り添う図画工作科のあり方について探っている。

本分科会は3ブロックに分かれ、AブロックとBブロックは、表現と鑑賞が一体となっておこなわれている「表現」の中の「鑑賞」について着目し、Cブロックは「鑑賞」の中でも美術館と連携し、その可能性と学びについて研究することとした。

【何をみる】

- ・材料を“みる”
- ・色、形、材質などを“みる”
- ・テーマを“みる”
- ・表し方を“みる”
- ・自分の表現の過程や表現そのものを“みる”
- ・人の表現の過程や表現そのものを“みる”
- ・まわり、環境、場を“みる”
- ・人を“みる”
- ・全体を“みる”
- ・部分を“みる”
- ・変化を“みる”

【どのようにみる】

- ・最初の出会いで“みる”
- ・かかわる中で“みる”
- ・表現しながら“みる”
- ・意図されたタイミングで“みる”
- ・視点をもって“みる”
- ・イメージしながら“みる”
- ・じっくり“みる”
- ・さりりと“みる”
- ・客観的に“みる”
- ・視覚だけでなく、触るなどして諸感覚を使いながら“みる”

◆研究経過・授業研究◆

【Aブロック】

絵や立体、工作などに表す、表現の中の鑑賞を探っている。

意図的に“みる”場が必要な題材設定の中で、子どもたちの“みる”行為を活動の途中で取り上げ、よさや面白さをお互いに共有し、自己の表現や自分自身の成長につなげられるよう研究をしている。



【Bブロック】

造形遊びにおける表現の中の鑑賞を探っている。

材料を“みる”ことから始まり、体の諸感覚を使いながら材料や人とかかわる中で、その変化や過程も“みる”ことで、変化したり再認識したりし、自己の表現や自分自身の成長につなげられるよう研究をしている。



【Cブロック】

鑑賞について、美術館と連携した、“みる”ことからの学びを探っている。

東京都現代美術館との連携の中で子どもの“みる”視点を育てたり、新しい価値を知ったりする中で、自己の感覚や自分自身を育てられるよう研究をしている。



東京都現代美術館にて学芸員と鑑賞の授業





## 表現と鑑賞・色・透ける・包まれる

片山 知子

▶ 小学校 2年生 A表現(1)

## ① 研究テーマとのつながり

子どもの学びの中で“みる”ことから始まったり、“みる”ことで深まったりすることがある。そして、感じたことからの心の動きは、自己の内や外へ大きく広がっていき、それが更なる力になると考える。

まず、その感じ取ることのきっかけとして、「何を“みる”」のか、また「どのように“みる”」のか、その可能性について考え、時間を組み立てていくよう考えた。

## ② 分科会の視点から

Bブロックは「表現しながら鑑賞し、鑑賞しながら表現している」という、子どもが無意識におこなっていた行為に焦点をあて、題材を通して子どもは「何を“みる”」のか、また「どのように“みる”」のか、その可能性を模索しながら、アプローチ方法やタイミングなどを鍵に、表現の中の鑑賞について研究している。

まずは材料を“みる”ことから始まり、体の諸感覚を使いながら、材料や人とかかわる中、自分自身が最初にみたものだけでなく、その変化や過程も“みる”ことで、変化したり再認識したりし、自己の表現や自分自身の成長につなげられるようにしたい。

活動しながら他の様子をみに行ったり、活動中のみあう時間でみたりし、他の人の表現のよさや面白さを感じ取ったり共有したりすることで、さらに思いを広げ、表現につなげられるよう期待したい。

## ③ 題材の概要

本題材につなげるにあたり、中学年の造形遊びとして、【A表現(1)】の領域の中でも、「身近な材料や場所などを基に発想してつくること」の内容で、これまでになじみの深いお花紙と、養生用のプラスチック段ボールを使った活動を行った。子どもは、お花紙を様々につけたプラスチック段ボールでつくった空間のよさにこだわり、“みる”ことを通してつくったりつくりかえたりしていく。子どもは自分の“いい感じ”や“好きな感じ”になるように、材料や方法を選んだり、みつけたり、あるいは表現したいものを決めたりするなどしながら、活動の中でよさや面白さを体で感じられるように設定した。



<江東Bブロック：第2回目の研究授業>  
南砂小3年／授業者：上野果菜子（平久小）

本題材では、低学年の造形遊びとして、体の諸感覚を使って、材料のお花紙とプラスチック段ボールとかかわりながら、子どもがみながら活動し、活動しながらみていく中、その“みる”行為を自己の表現や自分自身の成長につなげていく展開について考えている。

ただ“みる”だけでなく、何をどう“みる”か。体で感じ、諸感覚を使いながら材料と関わり、心を動かしたり、発見をしたりしていく中で成長につなげることをめざしている。



## 表現と鑑賞・重なり・つながり

岩崎 陽

▶ 小学校 3年生 A表現(2)

### 1 研究テーマとのつながり

“みる”ことで感じるものが生まれ、みあうことでイメージはふくらみ、次なるイメージが呼び起こされる。子どもたちが感じた心の動きは大きく広がり、新たな表現をつくりだしていく。“みる”ことをきっかけに「感じる 広がる つくりだす」の学びのスパイラルがさらに発展していくのではないかと考えた。

### 2 分科会の視点から

江東区Aブロックは「表現しながら鑑賞し、鑑賞しながら表現している」という、子どもが無意識におこなっていた行為に焦点をあて、今次学習指導要領で明文化された鑑賞の中でも、表現と相互に関連して働き合うところの鑑賞のあり方について、絵や立体、工作に表す活動を通して研究している。

鑑賞のあり方を探る中、二つの視点を考えた。

一つは、前述のみながら表す、表しながら“みる”という、子どもが無意識に、自ずと行っている鑑賞である。環境を工夫し、声かけの内容やタイミングを考えることで、友達の表現を自分がみたり、自分の表現を友達がみたりという活動がより活発化し、子どもの学びがより大きくなるのではないかと考えた。(A)

もう一つは、活動の途中で自他の表現を“みる”時間をとって行う鑑賞である。よさや面白さを共有することで、自分の表現や自分自身の成長につなげていく。それらから得た学びを今後の造形活動に生かせるよう期待した。(B)

### 3 題材の概要

(A) (B) 二つの視点で実践授業を二つ行った。

最初に行った題材はトレーシングペーパーを材料にコラージュする授業である。B視点に立って、製作途中に“みあうタイム”を設け、個々の表現の広がりを期待した。発想することが難しい子には有効だったが、自分の製作に夢中になっている子には、思考の妨げとなる場合があったようだ。そこで、A視点をもち、個で作品を製作するのではなく、他の子と共に作品を描く授業を考えた。

次に行った授業は、クレヨンを描画材に、長く大きな紙へ、場所を移動しながら絵を描く題材であった。友だちの描いた絵から想像を広げたり、イメージを受け取ったりし、それぞれの感じ方の違いや表現の変化に気付けるようにした。子ども達はそれらを生かし、絵をつなげたり重ねたりして描いていく。その後、B視点にたち、作品全体を“みる”時間をとり、気付いたことなどを全体で共有し、認め合えるようにした。



<江東Aブロック第2回目の研究授業>  
第四砂町小3年/授業者:柳原 久乃(四砂小)

本題材では、グループで線を描く活動を行い、自分や友だちの表現を、二つの“みる”行為を通して、より豊かな表現と子ども自身の成長をめざしている。

また、形や色、それらの組み合わせや線のよさ、面白さを“みる”視点に鑑賞し、それらを生かして描くことで、多様な表現と関わりながら豊かに感じ、新たな表現の獲得をめざしている。



公開授業5 《連携・つながりのポイント》

鑑賞・美術館との連携

[授業者]

東京都江東区立第二亀戸小学校 小林ちあき

画家 内海 聖史

東京都現代美術館 学芸員 池尻 豪介

▶ 小学校 6年生 B鑑賞(1)

① 研究テーマとのつながり

地域にある東京都現代美術館と連携をし、そこからの学びと可能性に迫って授業を組み立てている。学芸員の方と一緒に授業を行うことで、“みる”視点や新しい価値を知るなどしたことから多くのことを感じ、自分の世界を広げ、つくりだすことにつなげられればと考える。

② 分科会の視点から

江東区には東京都現代美術館がある。Cブロックでは、鑑賞の可能性の一つとして、東京都現代美術館と連携を図った授業について研究をしている。アーティストの作品を“みる”ことや、美術館学芸員のお話をうかがうことで、新しい見方を知ったり、新しい価値を知ったりするなどし、鑑賞を深めていきたいと考えている。連携授業をたてるにあたり、東京都現代美術館に行き、“みる”行為とその学びについて学芸員の方々と考えている。

③ 題材の概要

これまで、学芸員に來校して頂いた学校での授業と、東京都現代美術館での授業の2本を行ってきた。

東京都現代美術館での授業

(1)自分で想像して描いたものと実際の作品を“みる”  
事前に作品の一部だけを児童にみせ、そのみえる部分から、隠れてみえない部分を想像し、絵に表すことで、作品に対し、興味や感心を高める。その絵をもって、実際の作品を“みる”ことで、違いを感じるだけでなく、迫力や存在感なども感じとれるのではないかと考えた。

(2)作品を通して友だちの考え方や表現を“みる”  
実際にみた作品を、ジェスチャーや言葉で表現し、

お互いにみあう。作品を楽しく深く味わうとともに、子どもたちが自らの見方や、考え方の変化に気づき、作品への思いが広がることを期待した。

第1次 くるっとみえる、その下は？

- ①岡本太郎の「太陽の塔」や、フィリップ・スタルクの「炎のオブジェ」の一部をスクリーンに映し、全体を想像する活動を行った。
- ②東京都現代美術館にある、大竹富江の作品「無題」の先端部分の写真をのせたワークシートに、下半分の絵を描いた。

「もくもく・ひよろん」等、作品を言葉で表したヒントワードも提示。



第2次 本物に会いにいこう

現代美術館の作品をみて、見方や考え方、発想の面白さや楽しさに気付く。

- ①大竹富江の「無題」を実際にみて、自分が想像して描いた絵と比べる。
- ②「無題」をジェスチャーを使って体で表現したり、題名を考えたりする。

形を実感するよう、始まりから終わりまで、人差し指を使って空中でなぞる。



<江東Cブロック：東京都現代美術館での研究授業>  
砂町小5年/授業者：江尻 佳奈映(砂町小)

このように、現代美術館と連携して行ってきた実践を踏まえ、本題材は、美術館が作家と学校をつなぐ、という形の授業を提案する。アーティストと一緒に活動し、作品を“みる”ことにより表現と一体となった、より能動的な鑑賞となることを期待したい。



## 分科会2 子どもの“みる”

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 『木町のたから』 ～「撮る」で「みる」をみがく～

▶ 仙台市立木町通小学校 1～6年生 領域 A表現(2) B鑑賞

【発表者】

宮城県仙台市立七北田小学校 山崎 睦子

宮城県仙台市立木町通小学校 熊谷 英之

【助言者】

宮城県せんだいメディアテーク 小川 直人


小学校

#### ① 提案趣旨

ケヤキ並木の美しい定禅寺通りに面して建つ **せんだいメディアテーク** (以下 smt と略す)。図書館やギャラリーのある場として、また美術や映像文化の活動拠点として、多くの市民が利用している。本実践は、施設の特徴を生かし、学区にある smt と連携して行った取組である。写真や動画など、映像という表現方法を用いることで、対象を「よくみる」ことの大切さを子どもたちに改めて気付かせ、さらに、smt のもつ専門性を子どもの表現に生かしたいと考えた。

#### ② 実践の概要 (題材について等)

##### ① 低学年『いろいろコレクション』

デジタルカメラを使って、テーマに決めた「色」の写真を集める活動。対象は身近な文房具や友達  
の服、壁、バケツなどの人工物から、空や植物などの自然物まで様々である。カメラに慣れるために、6年生との交流でスタート。色や形について話し合いながら、次々に写真を撮っていった。

撮った画像は、すぐに鑑賞して楽しみ、壁新聞等にまとめた。普段は気付かないような、色や形のおもしろさを見つけることができた。

##### ② 中学年『コマ撮りアニメーション』


PC ソフトを活用しアニメーションを作る活動。何気ない身の回りの「もの」に命を吹き込み、その動きや変化のおもしろさを楽しみ味わう。4年

生の活動では、グループで協力してストーリーや場面の展開を工夫した作品制作へと発展した。この取組については、仙台市教育研究会図画工作部会が中心となり、smt と連携して教員対象の研修等を行い、さらなる普及が進められている。

##### ③ 高学年『木町のたから』

デジタルカメラの動画機能を使って、自分の伝えたいことを表現する活動。6年生は、自分たちの暮らす地域で、「ずっと残しておきたい、大切にしたい。」と思うものや場所、人などを『木町のたから』という映画にする。その一人1分間のショートムービーをつなぎ合わせて、約100分の作品にまとめた。そこには、木町の今を伝える子ども自身の姿と、地域の様子が次々に映し出された。完成した作品は、木町への思いがいっぱい詰まった卒業制作となった。

#### ③ 成果と課題

機材・技術の提供はもちろんのこと、授業づくりの段階から学芸員と連携し活動した。授業の導入には、学芸員によるワークショップを実施し、専門的な視点からの様々なアドバイスを得ながら協働で活動を進めることができた。今後は、震災でのそれぞれの経験や思いを、映像の中に記憶として残すため、映画「木町の3.11」の制作など、新たなプログラムにも挑戦しながら、映像を活用した表現の可能性を探っていき  
たい。



## 分科会2 子どもの“みる” ～美術館との連携を通して～

### 実践発表《連携・つながりのポイント》

～見て・さわって・たわむれて自分の見方で感じてみよう～

## 美術館って図工みたい! 子どもの能動的鑑賞

▶ 小学校 3年生 B表現(1)

[発表者]

東京都台東区立蔵前小学校

堀江美由紀

[助言者]

東京都現代美術館 学芸員

郷 泰典

### 1 提案趣旨

図工の時間に見られる鑑賞活動は、特定の時間や場を設定し、作品を鑑賞し合うといったものに限らない。何かをつくる過程でも、子どもたちは自由な見方で、自己の思いに沿った鑑賞を自然に行っている。子どもは表現をしながら鑑賞をし、鑑賞を通してまた表現に向かう。図画工作科の領域は、A表現、B鑑賞となっており、その活動はどちらも切り離すことはできないものである。双方の領域は関連し合いながら、造形的な資質や能力を高められる。授業の中で鑑賞の能力が発揮される場面はいくつもあり、今回の鑑賞授業を行うにあたり大事にしたい視点として考えた。



見られる能動的な鑑賞に視点を置いて授業を考えたいという学校の思いが合致し、「子どもが鑑賞する」という視点から題材を設定していった。子どもが主体的によさや面白さを見付け、自分の見方や感じ方で、能動的に鑑賞できる時間を多く取り入れた活動である。



### 3 成果と課題

子どもたちが自分で気になった場所や作品に直接触れながら、自由に鑑賞活動を展開していきける魅力的な展示空間。成果は、子どもが自分の見方や感じ方を存分に深めることができ、美術館と学校の連携として、鑑賞の新たな可能性をさぐることができたこと。目をキラキラさせて、最後まで活動を楽しむ様子が伺えたのは、子どもの気付きや主体的な活動を受け入れていた作品と展示が、図工に見る子どもの姿に意味や価値を見出していく視点とリンクしていたからではないかと感じる。

課題は、鑑賞活動での価値付けについて。最後のまとめとして、「子どもにとってどんな意味があったのかを教師が考え、伝え、子どもに返すこと」これを授業で実践していく。見取りの方法・評価の設定を見定める重要性を改めて考えさせられる授業となった。

### 2 実践の概要(題材について等)

今回鑑賞授業を行った展示会は、美術館でのルールを緩やかに開放し「さわったり、はしゃいだり」を許可している。子どもの自然なふるまいを抑制することなく美術に親しむ契機を創り出すことを目的に、美術館での鑑賞方法を子ども自らが楽しく学べるように企画されたものだ。これまでにない鑑賞の形態から「子どもたちのありのままの姿、ふるまいを伺い知ることができるのではないか」という美術館側の試みと、子どもたちに



# 子どもが“かかわる”分科会

[提案者]  
東京都江戸川区立第三松江小学校

中村 和哉

[講師]  
聖心女子大学教授

水島 尚喜

**キーワード**

「自分」「ひと」「友達」「教師」  
「場所」「もの」「こと」

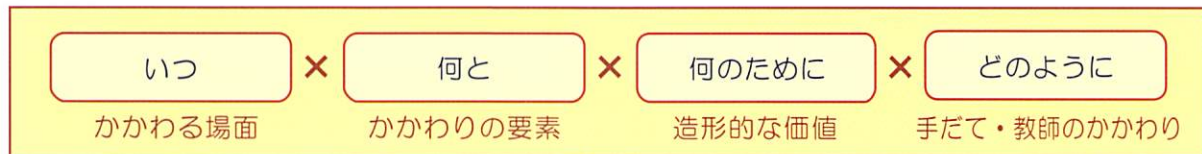
◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

子どもは図工室に足を踏み入れた瞬間から、「友達」とともに活動「場所」にかかわることになる。そして、「材料」「用具」など様々な「もの」とかかわり、さらにそうした「もの」を扱う中で「現象」「体験」「行為」とかかわることになる。つまり、指導者や子どもが意識するまでもなく、様々なかかわりが生まれているからこそ授業が成立し、子どもの育ちがあると言える。本分科会では、「かかわる」ことで促される子どもの成長について検証していくことにした。



◆この分科会の概要◆

そこで、図画工作科の授業の中で必然的かつ継続的に発生する「かかわり」を以下の4つの視点で捉えることによって、子どもの育ちをより一層引き出す授業を構成することができると考えた。



授業の中で複雑に絡み合う「かかわり」の要素の捉え方には様々なものが考えられるが、本分科会では「自分」「ひと」「場所」「もの」「こと」「教師」の6つに区分して整理した上で、中でも日々の授業でもっともかかわりが深い「友達」に焦点化することにした。さらに「友達」とのかかわりを考えるには、まずは自分の表現を大切に、自分の考えをもとに活動に夢中になり、達成感を味わうことが十分に行われてこそ、認め合ったり学び合ったりする心の動きや活動が価値をもち始めるのではないかと考えた。



「自分」の感覚や考え、好奇心や探求心、備えている造形的な資質や能力を発揮し、「ひと・場所・もの・こと」とかかわりながら活動を繰り返していくことによって、最終的には「自分」に返り、その結果、自分が更新され新たな自分の力が自発的に開拓されていく。

感じる(個から出発する)→広がる(かかわる)→つくりだす(個に返る)

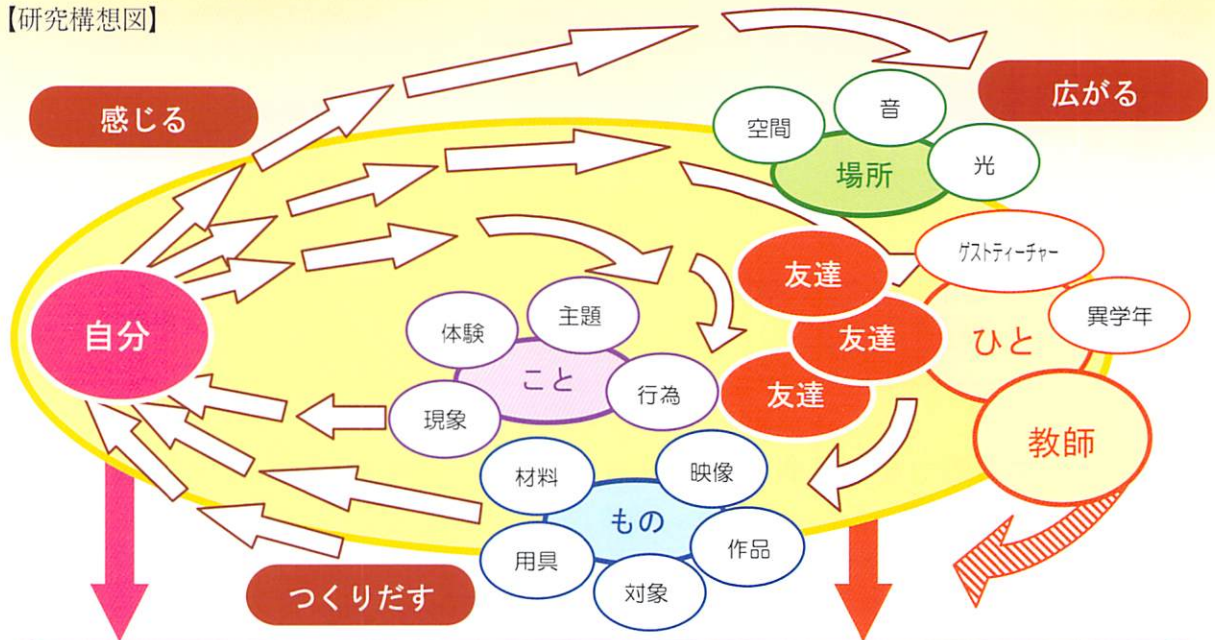
「かかわる」ことによって、選択肢が生まれ、自己決定の場が生まれる。そして、自己決定を重ねることで自分のよさを知り、自分をつくることになる。本分科会では、図画工作科での「かかわり」のプロセスに着目することによって、新たな自分をつくりだす力の育成を目指していく。

【研究仮説】

造形活動におけるかかわりの場面やそこに内在する価値に着目して指導の工夫・改善を図れば、新たな自分をつくりだす力をより一層育成することができるであろう。



【研究構想図】



自分と対話しながら… ●「かかわる」ことの造形的価値 友達と交流しながら…

☆自分の考えをもつことで	☆同じ考え（発想・表現）にふれることで
→ 自分の感覚や経験、技能への気づき 活動への主体性の高まり 考えを交流する期待感の高まり	→ 自分の考えのよさへの気づき 考えを共有する満足感・充実感
☆自分の考えを継続することで	☆異なる考え（発想・表現）にふれることで
→ 自分の考えを実現する喜び	→ 自分や友達の考えのよさへの気づき 自分の考えの広がり、深まり
☆自分の考えを変更する、発展させることで	☆認め合うことで
→ 新たな自分の考えへの気づき	→ 自信や意欲の高まり

● 目指す「子どもの育ち」 ●  
 (低)思いのままに自信をもって表す姿 (中)思いを広げつくり続ける姿 (高)自分を見つめ思いを表す姿

**新たな自分をつくりだす子ども**

◆研究経過・授業研究◆



篠崎小学校 第2学年 (25.7.12)  
 「ハレハレ、ならベンジャミン」 A表現 (1)  
 授業者：志水 洋 (大杉小)



上小岩第二小学校 第4学年 (25.6.12)  
 「いろいろ つないで」 A表現 (1)  
 授業者：鳥海 良太 (上小岩第二小)



篠崎小学校 第6学年 (25.7.12)  
 「はいてみると」 A表現 (2)  
 授業者：谷口 友梨 (篠崎小)



## 友達・冒険・発見

木澤 奈月

▶ 小学校 2年生 A表現(1)

## ① 研究テーマとのつながり

低学年部会では、「思いのままに自信をもって表す子」を目指す子どもの姿と捉え、造形遊びを通して「友達とのかかわり」に着目して研究を進めてきた。低学年の子どもは、感じたことや体験したことで心が自由に動き、行きつ戻りつ冒険しながら表現している。友達とは自然に認め合ったり、互いを受け入れたりするなど、相手の考えや行動に呼応しながらかかわろうとする姿が見られる。子どもたちが何度も試し、発見し、冒険しながら活動するプロセスにおいて、そうした「友達とかかわる」時間と場所が十分確保されることによって、『感じる 広がる つくりだす』のサイクルがより大きく発展できるのではないかと考えた。

## ② 分科会の視点から

材料を並べたりつなげたりする行為は、低学年の子どもにとって興味深い造形活動である。子どもは造形遊びを通して、「試す・気付く」を繰り返しながら自由に思いを具現化していくと考える。

造形遊びにおける「友達とのかかわり」に視点を向けると、子どもは自分と友達の表現の違いやよさに気づき、友達の行動やその場の出来事に応じて次々と活動を変化させていく姿が見られる。このような「友達とのかかわり」の経験を積み重ねることで、「自分はどうしたいか」「どうしたくないか」を自分で考え、自分で判断し、自信をもって自分で行動できる子どもを育成していくことができると思う。

## ③ 題材の概要

低学年部会では、「友達とのかかわり」に着目し、

実践授業を二つ行った。最初に行ったのは、色画用紙の紙短冊をステープラーでつなげて道のように広げて伸ばす活動で、自然と友達とかかわり合う場面が多く見られたが、活動の広がりという点では課題が残った。

次に行った、工作用紙の短冊に色紙シールを貼って並べていく授業では、並べ方のバリエーションを増やし、並べる行為そのものを楽しむ造形活動とした。「友達とのかかわり」の場面では、友達と作品を見合って共感したり、一緒につくり合ったりすることで新たな造形活動の意欲がわき、次々とつくり続ける姿が見られた。しかし、一方では友達に遠慮して表したいことが出されずにいる姿も見られた。「場の広さ」や「教師の声かけ」も、活動に大きく影響することがわかってきた。

子ども一人一人の思いを生かしながら、友達とかかわらせるためには、場の広さに応じた材料の大きさや量を吟味し、子どもが思いつくままに次々と試したくなる声かけが必要である。

今回の授業は、ミラーペーパーを利用した造形遊びを考えている。鏡面に映る像からいつもと異なった見え方に気付くなど、思いついたことを存分に試すプロセスを通して、個々のひらめきが新たな発見へとつながる活動にしていく。自らの資質や能力を存分に発揮でき、思ったことや考えたことが造形活動を通して自由に発表できる場にしていきたい。そして、この活動が、「思いのままに自信をもって表す子」につながるきっかけとなることを願っている。





## 自分・友達・夢中・発展

▶ 小学校 4年生 A表現(1)

## ① 研究テーマとのつながり

中学年の子どもは、授業の中で自分を取り巻く「ひと、場所、もの、こと」とかかわりながら、感じたことをもとに、自分の思いをもち活動を進めていく。表したいことを想像して楽しんだり、経験したことを生かして多様な試みをしたりしながら、活動そのものを意欲的に追求するようになる。また一方では、自分自身の育ちとともに、自分を取り巻く世界とのかかわり方も常に更新されていく。友達と一緒の活動を好み、交流し合うことで学習をより高めていくことができるようになる。友達とかかわることで、一人の活動では得られなかった考えや造形的なよさに気付き、思いを伝えたり共有したりできる満足感や充実感をもつことができる。

そこで、中学年部会では、「思いを広げつくりつづける子」を目指す子どもの姿と捉え、「感じる、広がる、つくりだす」のサイクルの中でかかわることを通して、常に学習する前とは違った自分に出会うことができるのではないかと考えた。

## ② 分科会の視点から

研究を進める上で、特に大切にしたのは次の二点である。第一に、一人一人の子どもの思いを十分に引き出すことである。したがって、活動はグループではなく個から出発させることにした。また、個々が自分らしい表現を追求できるように、扱う材料や用具の幅も十分に考慮し活動内容を設定することにした。

第二に、個の活動が進むにつれて現れてくる「友達とのかかわり」である。活動の自然なプロセスの中で友達とのかかわりが発生し活発になること

で、子どもは互いに刺激し合い、自分が思いもよらなかった新しい形や表現を生み出すことができる。つくり出す喜びをより大きく感じることができると考えた。

## ③ 題材の概要

中学年部会では、まず子どもが自発的にかかわることを想定した授業を行った。ところが、材料の大きさや場所の広さ、発問の仕方に課題があったため、自分の活動に夢中になるあまり、友達の工夫に気付かず、中には友達とかかわる姿がほとんど見られない場面もあった。

次に、友達と一緒につくることを前提とした授業を行った。しかし、今度は個の考えが生かされずに活動が進む場面も見られ、自分の発想を大切にしながら、互いにかかわっていくことができる環境設定をする必要があることがわかった。研究を重ねる中で、友達と一緒につくることで一人一人の発想が高まり、「感じる 広がる つくりだす」力が伸びる授業を行うために重要なことが、子どもの姿を通じて明確になった。

本題材では、これまでの実践から浮かび上がってきた改善点をもとに、子どもの自発的なかかわりが生まれるよう材料を大きくし、友達と一緒に扱う必要性をもたせた。また、共に活動するよさを感じられる環境の工夫や言葉かけを考慮した。今回の授業によって、子どもがかかわり合うことのよさに気付き、一人一人の思いが互いに響き合いながら、新たな自分をつくりだしていく姿が生まれることを期待する。





## 自分・選択・実現

水谷さくら

▶ 小学校 6年生 A表現(2)

### 1 研究テーマとのつながり

「感じる 広がる つくりだす」のサイクルの中で表現活動を行う「自分」の周りには、様々な「ひと、場所、もの、こと」が存在し、互いに作用し合っている。そのような多くの造形要素と自分とがかかわり合う中で、高学年部会では、「自分を見つめ思いを表す子」を目指す子どもの姿と捉えた。材料や場所と深くかかわりながら、自分の思いを発信し、他者に受け止めてもらうことで、子どもは自分自身を確かな存在だと実感できるのではないかと考えた。

### 2 分科会の視点から

高学年部会では、造形活動を通して、「自分」と対話することに着目した。そこで、まずはこれまでの造形体験をもとに、自分の思いを十分に表すことができる材料や場の設定を大切にすることにした。

子どもは自分の表現と向き合うことができた時、他者と「かかわりたい」という思いをもつのではないだろうか。それは、自分や他者を知るはじまりである。子どもの自発的なかかわりを促すような指導の工夫を行うことで、そのかかわりの価値や子どもの変容を検証していく。

自分の表現と向き合い、さらに他者とかがわり、他者の世界や思いを知る。すると、改めて自分と向き合い、自分にとって必要なことを選択し、実現していく場が生まれる。そうした経験の積み重ねによって、今の自分が新しい自分につながっていくと考える。

### 3 題材の概要

本題材は、身体を包み込むような大きさの紙の

曲面や奥行きなどの造形的な特徴をとらえながら自分の表したいことを見つけ、絵の具を使って工夫して表



す活動である。実践授業として、身体が入るほどの巻きダンボールの空間に、絵の具で自分の思いを広げ表していく、という活動を行った。刷毛で大きく描いたり、全身で空間とかかわったりしながら、自分の世界に没頭する姿が見られた。その後も、「絵の具で表す」活動を軸にし、描く対象の材質や形状を変化させながら、様々な造形要素と子どものかかわりを分析し研究を重ねてきた。

子どもにとって絵の具はなじみ深く、色や表し方を選択していく上で、思いを自由に広げることのできる材料だと考えた。前学年までの経験を生かし、自分の思いと形や色を結びつけて表していく。そうして自分の世界に打ち込むことができた時、同時に他者の表現や行為にも関心をもつようになる。絵の具まみれになって身体を存分に使う子、静かに向き合う子など、多様な表現と向き合っている他者の姿から影響を受けることもある。さらに高学年の子どもは、色や表し方から分析的に意図や気持ちを読み取ったりするなど、他者の表現を深くとらえることができるようになる。友達の作品をみることによって、改めて互いのよさを感じ取ったり、思いがけない表現に心を揺さぶられたりすることもあるだろう。

自分と他者の世界を感じ合うことで、自分のよさを確かめながらも新たな選択肢と出会い、新たな自分をつくりだしていく活動にしていきたい。



## 分科会3 子どもが“かかわる”

実践発表《連携・つながりのポイント》

[発表者]

北海道 札幌市立白楊小学校

菊地 惟史

### 宝箱をきっかけに子どもが“かかわる” ～光の宝箱の実践から～

▶ 白楊小学校 2年生 領域 A表現(1)

#### ① 提案趣旨

本題材は子どもたちに、「光ってとってもきれい!」「形や材料を変えると見え方も変わって、光ってとっても楽しい!」ということを感じ取ってほしいと考え、設定しました。

また、活動の中で友達と相談したり、友達のアイデアから新しい表現を思い付いたりしながら活動する姿を目指しました。そこで、教材化として以下の3点を設定し、子どもが“かかわる”姿をねらいました。

##### \*グループで1つの宝箱

～箱の中と外・中と中・外と外。子どもどうしの様々なかかわりが生まれる～

##### \*大きな宝箱

～となりのグループの宝箱が気になる。覗いてみる。訪ねる。試してみたくなる～

##### \*共有の材料コーナー

～友達のアイデアを自分でも試すことができる～

#### ② 実践の概要(題材について等)

大きなダンボール箱。子ども4人がすっぽり入れます。実際に中に入ってみると真っ暗です。そこにボールペンの先を使って1つの穴を開けました。その穴から差し込む光はキラキラと輝い



て、まるで宝物のように見えます。そこで、「穴=光の宝物」として活動をスタートしました。

##### <1. 光の宝物でいっぱいになろう!>

はじめは「もっとたくさん!」という想いで宝

物を集めていきました。その中で、友達のアイデアから「こんな形にしてみたい!」「いろいろな材料を試してみたい!」と、発想が広がっていきました。

##### <2. 光の宝物をもっとすてきにしよう!>

カラーセロハン・卵パック・ビーズ・モールなど様々な材料を集めて、光の宝箱の色や模様を工夫し、すてきに作りかえていきました。

活動中は、グループの内外で友達どうしのかかわりが生まれました。

##### <3. 光の宝箱を外でも見てみよう!>

最後は光の宝箱を外に持って行きました。外の明るさは教室とは比べものになりません。「もっと光の強いところにもっていこう」「雪に映る光がきれい!」輝く光の宝物、雪に映る影。子どもたちは、光の美しさや楽しさを存分に感じていました。



#### ③ 成果と課題

友達のアイデアを見て、「あ!いいこと思いついた!」「これ、どうやったの?」と、一言二言を交わして次の活動へ。子どもが“かかわる”姿がたくさん見られました。

かかわることによって子どもの想いが広がり、自己の表現へと還元されていく様子は、この題材でねらったことの一つでした。

このかかわりをより大きく広げ、より多くの子がかかわるためには、局所的な子ども同士のかかわりに任せるだけでなく、こちらが意図した交流場面の設定も必要だったと考えます。



## 分科会3 子どもが“かかわる”

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 子どもの“ひと・もの・こと”への アプローチと感受

▶ 小学校 第1学年 領域 A表現(1)(2)

[発表者]  
福島県福島大学附属小学校  
森口 律

[助言者]  
福島県福島大学

天形 健

#### 1 提案趣旨

第1学年の子どもの学びの軌跡を追いながら、「ひと・もの・こと」へ自ら働きかけ、感じる心を震わせながら表現力を高めていく姿を述べたい。

子どもは、出合った材料や表し方から「やってみたい」「〇〇をつくりたい」という想いをもつ。材料に働きかけながら、つくってはつくり変えたり、何度も試したりして、イメージを具現化していく。教師からの問いかけや、友だちとの交流を基に、子どもたちは、自分や友だちの表現を見つめると、新たに想いを膨らませてつくり始める。

図画工作科の導入期である第1学年の子どもたちは、「ひと・もの・こと」との出合いに目を輝かせ、初めて出合った表現を自分のものにしようと、何度も試しながら表している。

本発表では、各題材を通して見えてくる姿から子どもの成長を語りたい。

#### 2 題材の概要

##### 4月「すきなものな～に？」

画用紙のカードに、クレパスで自分の好きなものを描き、互いの自己紹介とした。

##### 5月「ふしぎないろみず」

色水の混色を楽しみながら、グループの友だちと大きな画用紙に手の指で思い付いた模様を描いた。



##### 5月「せんたくばさみがだいへんしん」



6色の洗濯ばさみを並べたり、つなげたりして思い付いたものを表した。

##### 6月「ねんどやま だいぼうけん」

大きな土粘土の塊からビー玉を探して、全身で土粘土の柔らかさや感触、重さなどを感じ取った。



##### 6月「おって きって ひらいてみると」

折り紙を折り、切ってできる模様の形や色の重なりを考えながら飾りをつくった。

##### 7月「おもしろ せん ばずる」

グループで画用紙を切り分け、個々で見立てたものを描き足す。一人一人の発想の違いが見えてくるパズルをつくって遊んだ。

#### 3 成果と課題

表現や鑑賞活動の中で話し合わせたり、共同表現の題材を意図的に組んだりしてきた。特に、子どもの想いに合う表現に近づけるための、友だちとの交流を大切にしたい。今後は、交流の経験を重ね、「ひと・もの・こと」により深く働きかけ、友だちと表現を高め合いながら成長していく子どもの姿を目指したい。



# 子どもが“であう”分科会

[提案者]  
東京都葛飾区立白鳥小学校  
朝重久美子

[講師]  
東京学芸大学非常勤講師  
附属学校教諭  
立川 泰史

**キーワード**

試行錯誤のきっかけとしての“であい”  
“であい”の視点で、授業をデザインする

## ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

小学校の図画工作科授業は、絵や工作をつくる学習だけにとどまらず、そのことを通して、子どもの生きる力や感性を育てることを目標としている。その力が人としての成長の基礎となり、中・高・大学や美術館、社会等を含めた大きな次元での造形美術活動へと発展し、広がっていく。今日、美術教育に限らず、教科の教育方法論として、「教授論」から「学び論」への転換がうたわれている。つまり、教師が知識や技術といった情報を「教える」教育から、子どもの主体的な態度や自分らしさといった教えられるものを「育てる」教育へという流れである。大会テーマ「感じる 広がる つくりだす」は、このような「育てる」教育の中で発揮される子どもの力であり、新しい自分に“であう”学びの姿である。また、同時にそれは、1単位授業の中でも日々繰り返されている。本分科会では、授業を“であい”という視点をもってデザインし、実践を通して、こうした「子どもの力」の育成を目指していく。

## ◆この分科会の概要◆

「育てたい力」を発揮しながら試行錯誤する子どもの姿が具体的に現れる機会を“であい”として、教師が意図的に配置したり、設定したりしながら授業をデザインし、実践していくことで、子どもに「自己決定力」「豊かな表現力」「※自己効力感（自分の力で物事をよりよく変えていこうとする力）」を育てる。 ※自己効力感：心理学者 アルバート・バンデュラ（Albert Bandura）による社会的学習理論の概念

### 1. 授業をデザインする

本日、会場内には、たくさんの子どもの作品が展示してある。その作品から見て取れることは、材料、技法、完成イメージである。しかし、それだけで授業をつくることはできない。大切なことは、その作品をつくることを通して、「子どもに何を育てるか」ということである。「育てる」教育のためには、授業の中で子どもが自ら試行錯誤していくような、課題追究型の題材設定が重要となる。授業のねらいを明確にし、意図的・計画的な題材設定をするために、授業構造図（図1）を活用する。これによって、授業に含まれる様々な要素を見落とすことなく、全体を俯瞰して捉え、授業をデザインすることができる。図中に含まれる全ての授業構成要素が相互に関係し合い、ねらいの達成に向かうようにデザインする。また、子どもに試行錯誤させる内容を？で表記し、それに対して子どもに期待する活動を想定する。授業中の子どもは想定を軽々と越えていくが、授業をデザインしておくことで、教師は自信をもって対応を調整していくことができる。

題材名「 <input type="text"/> 」表現( ) 学年 <input type="text"/> 時間計画 <input type="text"/>	
授業のねらい(育てたい力) <input type="text"/>	
観点別のねらい <input type="text"/>	
授業の表現・内容と子どもに期待する活動 各子どもに試行錯誤させる内容は( ? )を表記	
ねらい	表現・内容
ねらい	対象
ねらい	主題
ねらい	材料
ねらい	造形要素
どのように表現するか	技法
どのように表現するか	写真・等
【児童の発想】	【高 橋】 【教師が決めること】
【共通事項】	【子どもが決めること】
【題材や材料などの魅力(よさ)】	【材料・用具】

(図1) 授業構造図



## 2. “であい”

授業の過程に、配置・設定される“であい”を、開始時から順に「感じる“であい”」「広がる“であい”」「つくりだす“であい”」と子どもの学びの姿に沿って捉える。ねらいにせまるためには、「どの時点でどんな“であい”を設定することが有効か」また「その授業における最も重要な“であい”は何か」「その“であい”で子どものどんな力が育つか」という視点で、手立てや展開を工夫する。その際、指導案表（図2）を活用する。左列は通常の指導案、右の3列は、左から順に、「ねらい達成にむけての重要な“であい”」「教師の手立て」「“であい”でどんな力が育つか」となっている。これを活用することで、今までの指導案形式では「研究主題との関連」や「題材観」等の項目の中に分散されて表記されていた教師の具体的な手立てや思い、子どもへの対応等が、子どもの姿や育てたい力に即して、的確に配置・設定できるようになる。

題材名	年	時	★活動の開始 ☆活動の終了	ねらい達成にむけての 重要な“であい”	“であい”に対する 教師の手立て	“であい”で どんな力が育つか

(図2) 指導案表

## 3. “であい”の意味や価値

授業において、子どもは多くのことや人やものと“であう”。当初、その“であい”を「自分の外側で起こること」「内側で起こること」と捉え、双方を授業展開の中に配置するように考えていた。しかし、研究が進むにしたがい、それらを、意味や価値から捉え直し、分類することで、授業展開の各場面において、適切な時点で、有効な“であい”を設定し、授業をデザインすることができるようになった。

		“であい”の具体例	“であい”から期待する 子どもの姿	“であい”の 意味や価値
1	授業デザイン 全体に関わる	<ul style="list-style-type: none"> <li>材料の精選</li> <li>場の設定</li> <li>実態に合った課題設定</li> <li>グループ編成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>達成感を得る</li> <li>成功する</li> <li>うまくいく</li> <li>自己肯定感、自己有用感を得る</li> </ul>	成功体験を促す (最終的に、子どもが満足できる活動となる)
2	感じる“であい”	<ul style="list-style-type: none"> <li>経験したことのない活動の提案</li> <li>経験したことのない材料や用具</li> <li>多量な材料や色数</li> <li>心に響く美しさやおもしろさ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>わくわくする</li> <li>つくってみたくなる</li> <li>さわったり操作したりしたくなる</li> <li>いい気分になる</li> </ul>	生理的情緒の高揚 を味わつ (気持ちが沸き立つ)
3	広がる“であい”	<ul style="list-style-type: none"> <li>視覚に訴える活動の提示</li> <li>参考作品の明示</li> <li>教師の試作や実演</li> <li>対話、談話、話し合い</li> <li>活動についての情報提供</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これから始まる活動の見通しをもつ</li> <li>自分の知識や経験とつなげてイメージを広げる</li> </ul>	想像的体験を得る (自己や他者の成功を想像する)
4	つくりだす“であい”	<ul style="list-style-type: none"> <li>製作途中の相互鑑賞</li> <li>友達との情報交換</li> <li>友達の活動が自然と目に入ってくるような場の設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達の作品や活動をきっかけとして、自分らしい発想を展開する</li> <li>自分の作品を客観的に見て、さらにいいことを思いつく</li> </ul>	代理経験を促す (他者の成功や成果から発想を得る)
5	つくりだす“であい”	<ul style="list-style-type: none"> <li>相互鑑賞</li> <li>対話、談話、話し合い</li> <li>教師からの言葉掛け</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達の意見から新たな発想を得る</li> <li>発想や技能、活動を認められる</li> <li>励まされる</li> <li>自己肯定感を得る</li> </ul>	言語的説得を得る (言葉でよさや価値を伝えてもらう)
6	つくりだす“であい”	<ul style="list-style-type: none"> <li>相互鑑賞</li> <li>発表会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>完成作品を他者に見てもらおう期待や喜びを感じる</li> </ul>	想像的体験を得る (自己や他者の成功を想像する)

(図3) “であい”の意味や価値

## ◆研究経過・授業研究◆

- 24.10.17「ロールペーパーでなにをしよう？」A表現(1) 4年 2時間 北野小学校 浦澤秀樹
- 24.11.14「こねこねん土たんじょう！」A表現(1) 3年 60分 柴又小学校 中山美由紀
- 25.1.23「もこもこくん、なにしているの？」A表現(2)・B鑑賞 3年 3時間 高砂小学校 荒谷明恵
- 25.6.6「かさぶくろの大変身！」A表現(2) 4年 4時間 東金町小学校 丹羽貴美恵
- 25.6.19「ふしぎなのりもの」A表現(2) 3年 8時間 半田小学校 本郷麻菜美
- 25.6.27「図工ジュース」A表現(2) 1年 1時間 堀切小学校 古川理恵



公開授業9《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都葛飾区立青戸小学校

山川 知也

## 「色」と“であう” ～つくって“わくわく”やりたいことを 広げていく子～

▶ 小学校 1年生 A表現(1)

### 1 研究テーマとのつながり

子どもは、自分が面白い・楽しいと感じられるできごとに“であう”と、もっとやってみたい、さらに試してみたいと思いを膨らませる。また、未体験の材料や活動と“であった”ときには、一層わくわく・どきどきした表情で活動的に取り組む。そこで低学年部会では、材料との「感じる“であい”」を重点に研究を進めてきた。この“であい”を契機に、自分なりに「やりたいことを広げていこうとする力」を育てたいと考えている。

### 2 分科会の視点から

絵の具で塗ったり描いたりした活動のあと、使った筆を水の中で洗うと、絵の具がバケツの中で広がって色水ができる。使った筆を水に浸す行為も、子どもにとっては楽しい出来事である。このような「色」を介した“であい”を「感じる“であい”」の場面として設定した。授業では、子どもは自分の感覚や気持ちを大切に色水をつくっていく。また、思いついたことを話したり、友達のつくる様子を見たりして活動する。自分や友達のつくった色を見比べ、好みの色を見つけることで、より自分のイメージを広げていく。そうした活動から、色の広がり、混色による色の変化、色そのもののもつ美しさ、思いがけない色ができる驚きや喜びを味わわせたい。

### 3 題材の概要

1年生が、「色水」を身近に感じられるようなフレーズとして、親しみを込めて「図工ジュース」という題材を設定した。子どもの色彩感覚を養う

ためには「たくさんの色」「様々な色が生まれるおもしろさ」と“であわせ”子どもたち同士が「色を介して」関わるが必要だと考えた。

検証授業1回目は、風染料をペットボトルに入れて色水をつくり、それを小さなカップに注いで混ぜていく活動とした。その際、色の足し算しかできないため、つくれる色味が限られてしまうことがわかった。2回目は自分で小さなカップに水を汲み、水溶性絵の具を入れて色水をつくる方法に変えた。使用



する「ジュースのもと」は3原色とし、「ジュース屋さん」をイメージした活動とした。濃すぎると思ったら水を足すこともでき、似ている色水でも「イチゴ味」「アセロラ味」等、ジュースの名前をつけることで微妙な色に気付かせようとした。ただ、つくった色が必ずしも味に繋がるわけではなかった。「3原色」「ジュース」「色別に並べる」などの活動は限定され、子どもの自由度が



少なく、より多くの色と“であわせる”ことが難しいと感じた。

このような児童の実態と検証授業を踏まえ、「色水」「光」「透明感」に気づいていく造形遊びを通して、子どもたちが色彩感覚を豊かに広げていく力を育む手だてを検討した。絵の具を初めて触った時のような新鮮な驚きや「色水」「光」「透明感」と“であう”素直な気持ちから、教室が色で溢れるような空間をつくり出してもらいたい。



公開授業10《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都葛飾区立葛飾小学校

渡邊 梨恵

## 「材料の可能性」と“であう” ～“であい”を自分の知識や経験と つなげてつくりだす子～

▶ 小学校 4年生 A表現(2)

### ① 研究テーマとのつながり

中学年部会では、いくつかある“であい”の中から、特に「広がる“であい”」の場の設定に重点をおき、研究を進めてきた。

子どもが、材料のもつ魅力と“であう”ために、どのような視点を示すか、また、個の表現力をより引き出すために、獲得した知識や経験をどのように友達と共有させるかを考えた。子どもが多様な「材料の可能性」を知ることは、新しいものの見方を獲得することにつながる。そこから、子ども自身がつくりたいものを自己決定し、自分なりの表し方を追究できる力を育てたい。

### ② 分科会の視点から

中学年部会は「自らつくりたいものやことを決定し、試行錯誤をしながら追究・表現しようとする力」を育てたいと考え、研究を深めてきた。子どもたち自身が造形表現活動を通して「〇〇をつくりたい」「〇〇ができた」「もっとこうしてみたら…」と試行錯誤することで、「新しい自分」を発見・追究・表現してほしいと考えている。

「材料の可能性」との“であい”を充実させるため、始めに、材料と十分にふれあい、様々な操作方法を試す活動を設定し、材料の特徴や表現技法を知識として獲得するための時間とする。その活動の中で子どもたちが見つけたことを、教師が分類・整理して表にまとめ、全体で共有できるような「広がる“であい”」の場を設定する。この手立てにより、表現に取り組む段階で、子どもが、材料の魅力を生かしながらつくりたいものを自己決定し、表し方を追究することを期待した。

### ③ 題材の概要

検証授業では、材料は、傘袋とした。

#### 【1・2時間目】

傘袋でどんなことができるかを試しながら、表現技法を見つけた。傘袋の質感や形や色の違いを意識させるための手立てとして、作業台を黒くしたり、段階を追って傘袋の枚数を変えてみたりした。子どもたちが見つけたことを教師が見取ったり、聞き取ったりして表1のようにまとめた。

表 1	空気を入れて	どちらとも	空気を入れないで
①1枚で	ふくらませる ねじる・おる 指でおす	伸ばす	切る さく ちぎる 丸める 巻く 穴をあける 結ぶ くしゃくしゃにする
②何枚かで	中に入れる かぶせる つなげる	ならべる 積む 束ねる 重ねる	編む 結ぶ ひらひらさせる 穴を開けて通す
③身近なもの の組み合わせ	吊るす 立てる 身に付ける	通す	巻く ひっかけてひらひらさせる はりつける

#### 【3・4時間目】

前時で得た傘袋の可能性と、自分の知識や経験をつなげて、イメージを広げていき、つくりたいものを決定し表現を進めた。活動中に傘袋の可能性を確認できるよう表1を黒板に掲示した。



本授業ではトレーシングペーパーを材料に設定した。紙は馴染みがあり、それに加え視覚・触覚・聴覚に訴える魅力をもっている。傘袋と同様に、材料の可能性に“であわせる”授業を展開する。



## 「友達との違い」と“であう” ～感じて、語って、活動へつなげる子～

▶ 小学校 5年生 B鑑賞(1)

### 1 研究テーマとのつながり

図工の時間に、子どもは一人で活動をしているわけではない。友達の言葉に耳を傾け、自他の活動の変化を肌で感じながら、自身の活動を広げ・変化させている。個々に活動しているように見えても、その子はクラス全体の活動の大きなうねりの中にいる。子ども個々の活動の広がりや意味づくりをクラス全体が知る体験は、他の子どもの中で響き合い、それまでにない見方や感じ方をつくり出す機会になると考えられる。

そこで高学年部会では、クラス全体で互いの思いの違いやよさと“であい”、さらなる思いを広げていく「つくりだす“であい”」の場を重点として研究を進めてきた。

### 2 分科会の視点から

重点とする「つくりだす“であい”」が有効に活用されるには、子どもが自らの思いを話す「語り」の場を設けることや、教師の問いかけの内容が重要だと考えた。そこで、本部会では、いくつかの作品や言葉などを取り上げて、クラス全体でそれについての思いを話すことを「語り」と定義づけ、研究を進めることにした。また、語りの場を設定する際、互いの心に一番響くのは「導入時に題材について全体で共有する時」「本時の終わりにねらいに立ち返る時」と想定した。

教師の問いかけは、「何が描かれている?」「絵や資料を自分のルールで分類してみよう。」「この作品には、どんな名前が似合う?」等のように、子どもが語りやすい内容、且つ授業のねらいや形や色等の造形要素を踏まえたものにする必要がある。

さらに、個々が感じたり考えたりした理由を聞くことで、子どもは自他の違いを感じながら語りの場に参加することができる。

このような工夫で、子どもが「つくりだす“であい”」を広げ、自ら新たな表現に向かおうとする自己効力感を高めていくと考えた。

### 3 題材の概要

検証授業として、3年生の「ふしぎなりのもの」を実践した。ポイントとしたことは『ふしぎなりのものを考える際に、板書を活用し、可視化することで発想を広げやすくする』『まわりの様子を描く際に「ふしぎなりのものだからこそ行ける場所」について語りの場を設けることにより、思いを広げる』の2点である。

成果は、語りの場が有効に働いたことにより、活動の場面でも自分の思いを伝え合う事ができていたこと・ねらいが常に明確であったので、子どもたちが主体的に活動を振り返り、ねらいに立ち返ることができたことである。

課題は、子どもが語ったことを教師が絵で示したため子どもの発想の幅を狭めてしまったこと・子どもの実態や学年によって、語りの時間を臨機応変に調節していく必要があったことである。

本時では「友達との違い」に“であい”、そこから思いや活動を広げていくことができるよう、語りの場を設定し、授業を展開していく。





## 分科会4 子どもが“であう”

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 「トントンから生まれた形」 ～“であい”をつなげる～

▶ 甲府市立貢川小学校 3年生 A表現(2)

[発表者]

山梨県甲府市立貢川小学校

臼井 恭子

[助言者]

山梨県富士川町立増穂西小学校

遠藤 久

#### 1 提案趣旨

分科会のテーマである“であい”をつなげていくことが、子どもたちの豊かな表現活動に結びつくものとする。また、つなげるための道標として、山梨県で考案した4枚のカードの提示を試みたい。このカードは、図画工作で育みたい資質や能力、つまり評価の4観点を子どもたちにも分かりやすい言葉で示したものである。このカードを提示することで、子どもたちに活動のねらいが明確になると共に、教師もねらいに沿った指導と評価をすることができる。子どもたちが、カードを道標にしながら、いくつかの“であい”を通して、その子らしい表現に向かう姿を期待する。

#### 2 実践の概要（題材について等）

##### ①感じるであい

3年生の子どもたちは、好奇心旺盛で、活動的である。この時期の子どもたちにとって、木材や釘、金づちなど、初めての材料や用具とのであいは、それだけで表現の意欲をわきたたせるであろう。子どもたちは、トントンと木材に金づちで釘を打ち込む感触を体全体で味わいながら、生き生きと表現活動に取り組むものとする。

##### ②広がるであい

まず、子どもたちに金づちの扱い方や釘の打ち方など、基本となることを指導した上で、釘打ちが自由に試すことができるようにする。子どもたちは、釘打ちという活動を楽しみながら、新しい表現の方法とであい、イメージを形にする喜びを

味わうことであろう。

##### ③つくりだすであい

さらに、子どもたちが、釘を打つことで、生まれた新たな形とであい、つくりたいもののイメージを広げていくであろう。イメージに合わせて、木切れを選んだり、釘の打ち方や並べ方、木切れのつなぎ方を工夫したりできるようにさせたい。また、釘の大きさや種類、釘を打ち込む深さなども選びながらイメージに近づけるように指導していきたい。

##### ④新たなであい

また、本校は、校区に山梨県立美術館があると共に、10月にアートフェスタ貢川というイベントが開かれるという美術的な環境に恵まれた地域にある。そこで、アートフェスタ貢川を通して美術館に子どもたちの作品を展示することを試みたい。美術館に自分たちの作品を展示することで、自分や友だちの表現のよさや可能性とであい、新たな表現の意欲につながることを願い、本題材を設定した。

#### 3 成果と課題

山梨は、山の都。子どもたちの表現活動を山登りに例えると、山頂に向かうルートは様々である。山登りの途中で、子どもたちにとって価値ある“であい”があり、4枚のカードを道標に、一人一人が山頂を目指せるよう、これからも指導と評価について探っていきたい。



## 分科会4 子どもが“であう”

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 友人の表現・考えとであう

▶ 福岡市立南当仁小学校 6年生 領域 A表現 (2)  
私たちの町南当仁～ドライポイントに表す～

[発表者]

福岡県福岡市立福重小学校

徳永 直大

[助言者]

福岡県福岡市立石丸小学校

今林 功一

#### 1 提案趣旨

南当仁小学校では、思考・判断するとは、思いついた形や色などや作品などのよさについて検討し、見極め、自分の考えを定めることとしている。その際、鑑賞力を発揮している点に着目した。そこには、友人の表現等とのあいがある。子どもたちは、友人の作品や意見と出会う中(点①)で、表現対象や表現方法について自分と違う考えを発見したり、友人のよさを認めたり(点②、線②)さらに発想を深めたり考え方や工夫を採り入れて表現したり(線③)する。また、表現活動を終えた後、お互いの作品にであい(点①、線①)、そのよさを見つけて話し合ったりしている(点②、線②③)。

#### 2 実践の概要(題材について等)

本題材は、校区の風景をあらためて見つめ直し、それをドライポイントに表す学習である。思いを表すために、どのような画面構成や表現の工夫をすればよいか思考・判断する力が必要になる。

導入時には、ドライポイントと木版画の2枚にであわせた。これをグループごとに鑑賞させた。その結果、ドライポイントの特長をとらえることができた発言が多くでた。

自分の線描を自分の主題に合っているか見直し、修正付加する場面では、他の児童の作品とであわせた。気付いたことを発表するときには、参考作品のどの部分に目を付けたのか着目させるため、丸い輪で囲んだ。

表現を進めていく段階では、毎時自分の表現主

題を確認させた。さらに、自然に友人の表現とであえるように座席の配置を班にして活動させた。そのことによって、友人の表現を参考にし、表現主題と照らしあわせ思考しながら表現する姿が見られた。

表現活動を終えた後、お互いの作品とであう場面では、まず、鑑賞の視点を挙げさせ、どんなところに注目して作品をみればいいのかを確認した。いきなり、よさや表現主題に話が進むと話が深まらないので、「鑑賞の進め方カード」を活用した。「タッチが細かくて優しい感じがする」といった、作品の雰囲気を感じ、表現の意図をとらえている発言もあった。



#### 3 成果と課題

- 小集団の活用と座席の配置の工夫で、どの子ども発言の機会を得、多くの考えにであうことが出来た。また、いつでも友人の表現等にであい、自分の表現に取り入れることが出来た。
- 丸い輪の活用などで、個人がであった作品のよさに多くの子がであうことが出来た。
- 鑑賞では、視点を明らかにさせることと進め方カードを使うことによってより深く友人の作品とであうことが出来た。
- 友人の表現とであう際、困っているところなどを発表させるなどして意識させ、であいの必要性を感じさせるための手立てが必要である。



# 子どもは“おもう”分科会

[提案者]  
東京都荒川区立尾久西小学校  
山崎 雅愛

[講師]  
元上越教育大学大学院教授  
西野 範夫

## キーワード

自分の思いを表すための想像力  
“おもう”の広がりや変容

### ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

もともと子どもがもっているエネルギー、意欲、感性を、造形活動を通して子どもたちが、自ら発揮すること。これは、子どもの「思い」を大切にすることであると本分科会では捉えた。大会テーマの骨子では、造形美術活動の体験を通して得られた出会いや発見の積み重ね、経験の蓄積などによって獲得されていく総合的な力を得ることを「成長」とし、ものやこと、空間や環境などとの幅広い「かかわり」を「連携」としている。この分科会では、子どもの「思い」をもとに立ち上がる“おもう”の広がりや深まりを「成長」と考え、「連携」から見えてくる“おもう”の変容を追う。

造形表現に対する子どもの「思い」は、生涯にわたって造形表現活動に主体的にかかわり、生活や社会と豊かにかかわるための重要な要素である。造形美術教育が人間形成に果たす役割の重要性を「思い」と“おもう”をキーワードに検証する。また、授業の中で生まれ、育まれる子どもの“おもう”が社会とのかかわりの中で、さらに大きな成長とともに広がり、造形美術教育のダイナミズムになると期待する。

### ◆この分科会の概要◆

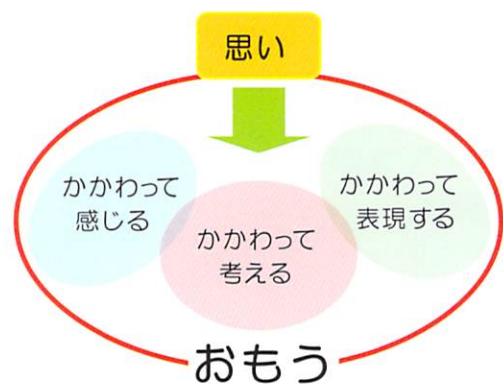
もともと子どもたちもっているエネルギー、意欲、感性を発揮する「もと」になるのが「思い」である。また、自分そのものでもある。そして、材料や主題、対象、方法などにかかわって感じ、かかわって考え、かかわって表現することで、子どもの中で立ち上げる「私の思い」の表れが“おもう”であると、本分科会では定義した。

子どもは“おもう”分科会では、「思い」を広げたり、ふくらませたりするために、どのような創造的な出会いをさせたらよいかを考え、導入の工夫をした。また、材料・用具へのかかわり方、活動する場や子どもを取りまく空間などを設定し、子どもが思いを表現するための工夫を授業の中にちりばめた。

子どもは自分の思いを表現するために想像力を働かせる。この想像力とは自分の思いを表す思考力で、今までになかったものを想像すること（発想）、こうするとできるかなと想像すること（構想）である。本分科会では、子どもが自分の思いを生かして“おもう”をたくさん立ち上げ、新しい意味・世界をつくりだすための授業づくりの研究をした。また、授業の中で“おもう”ことの広がりや変容を追った。

城東大会テーマ「感じる 広がる つくりだす」の中で、特に子どもの“おもう”の発生を「感じる」に当てはめ、“おもう”が立ち上がり想像力を働かせることでより自分らしい表現になっていくことを「広がる」「つくりだす」に当てはめている。

子どもの思いが生きることで学びが成立する。そして、小さな選択、自己決定を積み重ねることでさ





らに自分の思いを確認し、自信をもって主体的に取り組むことができるようになると思った。さらに、子どもが主体的に学んだことは生きる力につながり、子どもの力、子どもの育ちになると考える。

### ◆研究経過・授業研究◆

低学年分科会と高学年分科会に分け、低学年分科会では自分の思いをふくらませるための工夫を中心に、高学年分科会では思いをもって自分らしく表現するために想像力を働かせ、“おもう”を広げ、ふくらませるための工夫を追求した。

#### 2年 「紙ワザけんきゅうじょ」 A表現（1）

〔授業者〕：荒川区立第五峽田小学校 川上 耕

- ・大きな紙筒に全身でかかわり、変化させる活動を楽しむ。
- ・紙の形や特徴を感じ取り、表し方を見付けたり試したりする。

#### \* 「思い」をふくらませる工夫\*



帽子を紙袋で作り、意欲を高め、様々な紙の扱い方を試す。



様々な色、大きさの筒。「さわりたいな」などの感覚を引き出す。



感触や形の変化からイメージを広げる。

#### 5年 「粘土建築家になろう！」 A表現（2）

〔授業者〕 荒川区立尾久小学校 井野早穂里

- ・「建築家」「構造」をキーワードに、多様な表現活動をする。
- ・共同制作を通して自分の「思い」に気づき、友達と伝え合う。

#### \* “おもう”を広げる工夫\*



たくさんの土粘土を触りながら、何をつくるか話し合う。





## 素材・手・感じて “おもう”“ひろがる”

▶ 小学校 2年生 A表現(2)

### 1 研究テーマとのつながり

“おもう”=子どもの思いをもとに表れること

感じる 広がる つくりだす

・・・すべてにおいて“おもう”が発生する

“おもう”は学びの出発点であり、「子どもの‘力’  
と‘育ち’」につながる。“おもう”を大事にする  
ことは、その子の表現を大事にすること。

「感じる」ことから、「やってみたい」「試そう」  
という“おもう”を広げる。そして、想像力を働  
かせ、自分の思いを生かすことが、新しい自分をつ  
くりだす。

低学年から、様々な思いをもち、素材を体験し、  
色々試しながら、自分の思いを生かす表現をする  
ための、基礎的な能力を培っていききたい。

### 2 分科会の視点から

低学年の児童は、思ったことを素直に表現して  
いく。また、何かになりきったり、想像した世界  
に入ったりしながら表現することもできる。この  
ような低学年の児童のよさを生かし“おもう”を  
広げていきたい。

そのために、素材の選択、出会いの工夫を大  
切にしている。また、“おもう”を広げるために、  
試みる場や雰囲気づくりを心がけ、思いが生かせ  
るように柔軟に対応していく。

### 3 題材の概要

低学年分科会では、素材との出会いを工夫し、  
大切にしている。布は、身近な素材ではあるが、  
本題材では新たな扱い方を提案し、“おもう”を  
広げることを試みた。

本時へ向けて…布の色・さわりごこち

#### 布の魅力

布は普段から洋服に  
加工された形で身にま  
とっており、児童にとっ  
ては身近な素材である。

発色や手触りがよく  
扱いやすい布は、出会  
いの場面で思いを抱き  
やすいのではないかと  
考えた。



#### 期待する姿

布という素材と、手・体を使って、“おもう”  
を広げていく。

さらには、普段使っているものが、これまでと  
は違うものに変容するところにも気付かせたい。

“おもう”がひろがるために

- ・発色、肌触り、扱いやすさを考えた布素材  
の提案
- ・もの、色とかかわりながら、変化を楽しむ  
活動の工夫



## 素材・空間・想像力

▶ 小学校 5年生 A表現(2)

### 1 研究テーマとのつながり

“おもう” = 子どもの思いをもとに表れること

感じる 広がる つくりだす

・・・すべてにおいて“おもう”が発生する

子どもは新たな出会いにより感じながら“おもう”。イメージをふくらませ、広げながら“おもう”。そして、そのイメージや思いは、行為として、または形として表現や自分自身そのものをつくりだしていく。

子どもが“おもう”を通して主体的に学ぶ過程や身に付いたものが、生きる力につながり、本大会テーマにおける「子どもの‘力’と‘育ち’」となると考える。

### 2 分科会の視点から

図画工作科は美しい、すてきだな、というような自らの価値観を育む教科でもある。子どもの思いが様々な方法による“おもう”ことによって価値や意味ができあがっていく。

特に本授業では高学年の子どもたちが『～してみたい』という意欲をもち、さまざまな感覚を働かせながら‘自分らしく’表す姿を本大会テーマ‘つくりだす’姿として期待したい。

また、事前の検証授業では可塑性に富んだ造形粘土での活動を提案。共同制作の中で生まれるかかわりあい、自然と生まれる役割のある活動も見られた。高学年ならではの、これまでの経験をもとにした表現の広がりを子どもの“おもう”姿として捉えながら共通理解をすすめた。

### 3 題材の概要

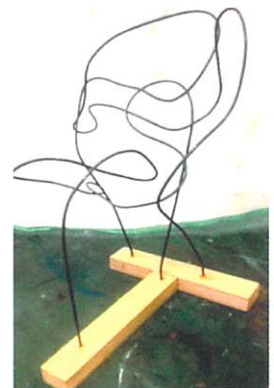
高学年の子どもたちには、これまでの経験を基にイメージを立ち上げ、構成したり、想像したり表現につなげたりする力がある。

本授業では、素材と出会い、自由に変化させるおもしろさから“おもう”経験を積み重ねていきたい。

本時へ向けて …線材から生まれる空間

#### 針金の魅力

針金は扱っていく中で、見える形や塊が変化し“おもう”が広がる素材の一つである。特にアルミ針金は曲げる、巻き付ける、固定する、編むなどの変形をしやすい。



#### 期待する姿

針金から生まれる空間に気づき、それを生かしながら“おもう”活動をひろげ、自分らしく表す姿を期待したい。

“おもう”が広がるために

- ・空間を意識した針金を使った題材の提案
- ・針金を扱いやすくするための活動の工夫



## 分科会5 子どもは“おもう”

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 共 感

▶ 小学校 5年生 領域 B 鑑賞(1)  
「み・か・たをかえて!? おもしろさ発見!!」

[発表者]  
神奈川県川崎市立南生田小学校  
伊藤 龍豪

[助言者]  
神奈川県川崎市立玉川中学校  
川合 克彦

#### 1 提案趣旨

日頃何気なく見ているものを、「おもしろい」をキーワードに見つめなおすことで、対象を自分なりに意味づけや価値づけし、友達と交流することでさらにその見方を広げていく過程を提案したい。

また、自分で意味づけや価値づけしたものを「みんなでストーリーを考える」という活動を通して、自分とは違った見方をされたときに、それをどのように受容したり主張したりしていくのか、それは、子どもにとってどのような意味があるのか。以上2点について、友達とのかかわりという視点のもと提案する。

#### 2 実践の概要（題材について等）

本題材は、身の回りの場所やものを改めて見つめ、おもしろいと感じたことをデジタルカメラで



撮り、その写真をグループで共有しストーリーをつくりながら鑑賞しあう題材である。日頃何気なく目にしているものや過ごしている場所を、近づいたり角度を変えたりしながら改めて見つめなおすことを大切にしたい。そして、自分の感覚を大切にしながら、撮影対象を自分なりに意味づけや価値づけしていく。その後、一人一人が撮影したものを3～4人1組のグループ全員で共有し簡単なストーリーをつくる。この活動のおもしろさは、自分が撮った写真が、同じグループの友達そ

れぞれに解釈され、一人一人のストーリーに取り入れられることにある。同じ写真を見ても、自分とは違った感じ方があることに気づくことで、ものの見方や感じ方がさらに広がるのではないかと考えた。

#### 【活動の流れ】

- ①自分がおもしろいものを見つけて撮影する
- ②お気に入りの1枚を紹介し、互に見つけたおもしろさを伝え合う
- ③作品カードをつくる
- ④3人～4人で、お気に入りの1枚を持ち寄り、その写真をもとにストーリーを考える
- ⑤ストーリーを紹介する



#### 3 成果と課題

**【成果】** 見方を変えることにより、新たなおもしろさやよさを発見できることを知ったり、正解のないものに自分なりに意味づけすることを経験することができた。写真をもとにしたストーリー作りでは、自分の考えを主張したり、友達の見方を受容したりしながら互いの一致点を見つけながら活動することを楽しむことができた。

**【課題】** 自分の見方を大切にしているものの、撮影したものが、造形的に広がりや深まりをもう少し求めてもよかったのではないかとということが挙げられる。

## 分科会5 子どもは“おもう”

実践発表《連携・つながりのポイント》

### つかむ

▶ 伊川谷小学校 3年生 A表現(2)  
ぐにゃぐにゃのびてのぼったよ

[発表者]

兵庫県神戸市立若草小学校

藤井 有子

[助言者]

兵庫県神戸市立北山小学校

鍛田 和見

### 1 提案趣旨

子どもたちは、どんなことに興味や関心をよせ、どんなおもいをもって表現活動をしているのか。その過程で、どんなことにぶつかったり、とまどったりしているのか。どんなときに発見したり、考えが浮かんできたりするのか。子ども同士でどんな影響をし合っているのか。作品はもちろん、活動の中であらわれる表情、つぶやきや言動、体や手の動きなど、子どもはもっている力を発揮しながら、様々なことを発信している。教師はそれをしっかりキャッチして、適切な支援や指導につなげていかなければならない。「子どもをつかむ」日々の努力が大切である。

『子どもをつかむ 子どもがつかむ』・・・このテーマのもとすすめられてきた研修は、「子どもがつかむ」ものをより明確にすることでさらなる授業改善への取り組みを続けている。そして、その中で私たちは造形教育だからできる楽しさや育む力、豊かな心があることを再確認し、授業での教師の役割をあらためて考えていこうとしている。

### 2 実践の概要（題材について等）

中庭で自分がみつけた小さな草花に魔法をかけたら、どんどんぐにゃぐにゃのびて天まで届いたよ。そしてそれを登っていくほくの前に待ち受けていることは…そんなわくわくする冒険の世界を描いていく題材である。



子どもたちを一気に想像の世界へつれていくための教師のなげかけや、その気になって描き始めた子どもたちひとりひとりがさらにイメージを広げ、自分の色や形でおもいを表していくためにどのような支援をすればよいのか、子どもたち同士のかかわりの場面をどう設定するのかなどの授業展開を考えていった。そして、目の前にいる子どもがおもいをもつ瞬間、描き始める時の表情やつぶやきなどを共有することで、作品からだけではわからない子どものおもいに寄り添う具体的な支援やことばがけが話し合われた。



### 3 成果と課題

「絵を描くことで育みたい力とは何だろう」というテーマからスタートした実践だったが、楽しそうにのびのび描く子どもたちの姿にその答えのひとつがあったと思う。さらに絵にこめられたおもいを知ることで、あらためてこどもの絵のよさにもふれることができた。

教師の役割は、子どもが自分自身の感覚で色や形をつかみイメージをもつことができるように、そして、試行錯誤しながらのびのびと表現できるように、授業展開を工夫し、場の設定を考えていくところにある。このような授業の中で子どもたちは達成感や満足感を味わい、造形活動の楽しさを感じるだろう。そして私たちは、日々の授業を通して子どものよさを感じ取り、子どもと喜びを共有できる教師でありたいと思っている。



# 子どもの“うごく”分科会

[提案者]  
東京都墨田区立第一寺島小学校  
東郷 拓巳

## キーワード

子ども 身体性 みる

[講師]  
帝京大学講師  
辻 政博先生

## ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

無心で砂場を掘り返し、お団子をつくったり、山にしたりして、友達や周りの大人達に「みて！」と誇らしげに発する。そんな子どもの姿を見た事はないだろうか。砂の手ざわり、音、におい、現れては変わる形を楽しみ、友人や大人と共感して、諸感覚を働かせ砂そのものを確かめている。それは人間が探究心をもって世界に挑んできたことを物語っているようだ。そこには明らかに働いている力がある。図画工作科の授業の中でも、その力をもって、子どもが素材を感じて自らの表現をひらいていく姿がある。それだけに止まらず、表現活動の中ではこうした力が発揮されて展開している。

今大会テーマは、情報化の進む現代において、どの発達段階においても造形美術教育が重要であることを今一度訴えるものである。すなわち、人間らしい探求を引き出すその力に、今一度、着目することが必要であると捉えて、子どもの“うごく”分科会は、子どものその力と身体性から研究を進めてきた。

## ◆この分科会の概要◆

子どもの“うごく”分科会は、題材やモノやコトとの出会いから、子どもの内面に起きることや外に向けてひらかれていく心や身体のうごきが表現への原動力になるという仮説を立て研究を進めた。心や身体のうごき、気持ちや意識のうごき、さらなる身体のうごきから内面に起きる変化を追って、個々の子どもの姿から捉える試みを行った。

例えば、はじめて粘土を目の前にした子どもたちが、「やってみたい！」という意欲や欲求をもつ。そして粘土の感触を楽しみながら「こんな風になるんだ！」「こうすると、どうなるかな？」と粘土を身体全体を使って作り変えていく。その活動は、粘土の可塑性を試すことと表すことに分けることなく、能動的に展開していくことがわかる。そして、あらわれていく形から「これはいい感じだぞ！」「やった！」「ここは、こうなんだ！」と、自身の表現に肯定感を持ち、そんなことができた自分自身を見出していく姿があった。

このような活動の中で、子どもの中で何が起きているかを読み取り、それを具体的な活動と言葉に整理した。活動中には、必ず、教師の存在がある。言葉がけや環境設定などの教師の立ち位置などである。それを子どもの様子と照らし合わせながら言葉がけや環境設定、授業構成が、子どもの活動にどのように影響していったかを後にその振り返りを整理して、授業情景を撮影した映像と写真を見ながら探り協議することにした。その結果、新しい子どもの様子を発見したり、確かめたりするなど、子どもの実際を目の当たりにした。また、授業全体の環境から構成、教師が発する「問い」の一つ一つが子どもとつながりを見せてきた。その積み重ねによって、墨田区の図工部員は、子どもを実感しながら“うごく”



の中に子どもが働かせている力と獲得している力を読み取っていった。つまり、“うごく”が充実する授業内容であることが大切であり、そのためには、子どもを実感すること、子どもの姿を根拠として授業を組み立てる事で「子どもの力と子どもの育ち」がよりよく保証されるのではないかと考えている。

## ◆研究経過・授業研究◆

まず、授業を**絵の具・絵から考えるグループ**と**素材から考えるグループ**に分かれて、授業の中で、何がうごいているのかを図工部員全体で考えることから始めた。昨年度に行われた2本の授業を通して、子どもたちが絶えず内面を揺さぶり能動的に活動を繰り広げる授業の設定と、実際の子どもたちがやっていることを細かく見ていくことが必要であると考えた。



具体的な方法としては、授業の中で①題材で使う素材などのモノそのものを身体を通して見る・感じることができるような時間や問いや言葉がけを考えること②見る・感じることができる環境設定をすること③自身の表現や活動のよさや面白さ発見や驚きを振り返ることができるような問いや言葉がけをすること。これらを設定していくこととした。また、これらを振り返って、教師の働きかけと子どもへの影響の関係性を見出し、次の授業へと生かしていくことにした。

そして、**素材グループ**は、土粘土を材料とし、題材「さわって、かわって…」A表現(1)では、1年生の子どもたちに1人20kgの灰褐色の土粘土を渡して、全身で挑む授業を設定した。活動環境は、白い防災シートを敷いて、いつもと違う空間、土粘土の形があらわになるような環境を設定し、「どんなことができるか?」という、導入での言葉がけで、試すことと表すことが一体となるように設定した。また、講師に帝京大学講師の辻政博先生をお招きして、子どもたちが主体的に活動に向かうための方略の大切さについてお話をいただき、研究の方向を固めることができた。

一方の**絵の具・絵グループ**では、最初に、透明素材にこだわり、透明な樹脂性シートに特製の透明絵の具で描く授業を実践した。絵の具自体を混ぜる行為、色や形、そして光が子どもたちに与える影響は大きかった。また、授業を行った図工室が、外に簡単に出来る環境であったことも材料と環境の重要性を明らかにした。ここで、**絵の具・絵グループ**から、**色・形・光グループ**に変わった。それに、質感を加えて、題材「<sup>ハート</sup>♥フルフルカラフルフル」A表現(1)は考案された。ゼリー素材(授業時にはフルフルと呼んだ)を用いて、手ざわりを子どもそれぞれで感じ取り、色のあるゼリー素材も併せて手触りと色の要素を味わうことができた。また、ライトボックスを机の上に置きグループで活動させることで、光に透けた量感や美しさを見付けられるようにした。講師に文部科学省教科調査官の岡田京子先生をお招きし、子どもを根拠とした授業の設定についてお話をいただき、さらに研究の方向性を固めることができた。

この分科会の最大の成果は、“うごく”を探るには、子どもの活動の実際の姿を見ることからしか語ることができないという視点に教師が立てたことである。そこから実感した“子ども”の姿一つ一つが日常の授業に移行されていった。各自の眼差しは、子どもの動きに敏感になり、目の前の子どもに共感し、そこで働かせている子どもの力を言葉にしていくことに確信をもつことができた。研究授業後に各自が記録した資料、撮影した子どもの姿や動画を持ち寄り、目標、評価規準、環境設定を再度見直すことを繰り返したことによる成果ではないだろうか。そして、実際の授業の中で“子ども”を感じ取る力は、子どもに呼応した言葉や環境を生みだし“子どものうごく”を支える力になることを提案していきたい。



公開授業14 《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都墨田区立言問小学校

京嶋 一喜

## “土粘土”

～さわって感じて、見て感じて～

▶ 小学校 1年生 A表現(1)

## ① 研究テーマとのつながり

城東大会の研究テーマである「感じる 広がる つくりだす ～子どもの力と子どもの育ち～」に対して墨田区では、“子どもの姿”を根拠として研究を深めてきた。その第一歩となるのが昨年7月に行われた「手づくり凸凹の絵」という授業である。リキッド粘土といくつかの材料をもとに、手で触った感触を楽しみながら自分の表現を見つけていく授業で、ここから素材グループは出発した。子どもが諸感覚を働かせ、素材から感じ、広がり、つくりだす姿を丁寧に見ていくことで、「環境設定や教師の指示の出し方、言葉掛けはよかったのか、素材との出会わせ方はもっと違うやり方があったのではないか」と授業を再検討し、より良くすることに努めてきた。そしてその研究の成果を受けて行われた「さわって、かわって…」という授業がベースとなり、本授業に至っている。この授業の中で子どもたちは大きな土粘土に向き合い、身体で感じ、試行錯誤を重ね、自分のやりたいことを見つけていく。そういった中で生まれる子どもの発見や経験は、大人から見ればほんの些細なことかもしれないが、それを図工の時間で積み重ねていくことこそが、子どもの力になり、育ちにつながっていくことだと考えている。

## ② 分科会の視点から

分科会テーマの「子どもの“うごく”」という視点で、授業で起きた事象や結果ばかりに捉われるのではなく、活動している最中の子どもの姿から、心が動いている瞬間、身体で感じ表現が動いている瞬間に目を向けることの重要性、価値

を見出してきた。子どもの“うごく”を見ていくということは、環境や物、教師の言葉など授業をつくっていく上で大切なことが洗練されていくことに繋がるとともに、子どもの気づきやよさを見られる教師の力にもなるだろう。

## ③ 題材の概要

本題材は、1年生が自分の体重にも匹敵するほどの重さの土粘土と出会うことから始まる。全身を使って土粘土の魅力を感じてほしいという教師の願いから、その大きさは設定している。土粘土は子どもの全身を使った働きかけによって、その表情を変化させていく。一見すると何気なくやっている行為や現象の中にも、子どもたちの中では面白さを見つけたり、価値を見出したり、その物の魅力を感じたりして、絶えずその内面は揺さぶられている。そこに教師が気づき、共感したり感動したりする心で、子どもとその表現に触れていく。教師は活動中の子どもたちの全体の様子を見て気を配りながら、一人一人の表現に対して「どんな感じがした?」「こんなことができたんだね!」と声を掛け、子どもに共感しながら授業を進めていく。また、床に敷いた白いシートの上で活動することで、全身で素材にアプローチできる場や、周りの様子が目に入りやすく、能動的に“みる”“かんじる”鑑賞の能力を発揮できる環境を設定した。



## “光”

～さわる、みる、感じる、色と形～

▶ 小学校 3年生 A表現(1)

## ① 研究テーマとのつながり

素材と子どもの出会いは、いつもドラマがある。この授業の基となる〈色・形・光グループ〉が授業を実践した「いろいろ みえるよ」では、透明絵の具と光から、子どもたちが素材と対峙し、素材の魅力から新たな感覚が沸き立ち、「やってみてみたい」「こうしたらどうなるだろう」と突き動かされる思いが生じる。（“感じる”）そして活動中。透明プラ板に描き出された透明絵の具の作品に、窓からの光が差し込み「きれい！」と声上がる。この気づきをきっかけに、外の光の中に自分の作品を透過させる子どもがいた。すると、外の壁に映し出される自らの作品、絵の具の美しさに思わず「みてみて！」と声上がる。友達作品のよさや面白さから、また「いいこと思いついた！」と弾むような子どもの声があちらこちらで聞こえ、（“広がる”）再び図工室に戻り、新たに表現をする子どもの姿があった。（“つくりだす”）このような子どもの“うごく”場面を切り口に、墨田区では研究をしている。

## ② 分科会の視点から

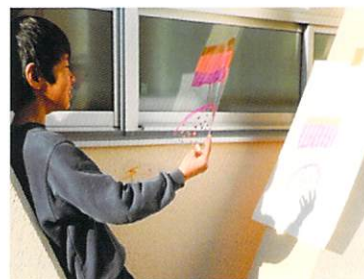
素材との出会い、または、素材の魅力から「やってみてみたい！」ことを試せる“うごく”場面。光というエッセンスから、透けることの面白さ、素材が映し出す新たな世界から感じる“うごく”場面。友達の様子からよさや面白さを感じ取り、「そうだ！いいこと考えた！」という、突き動かされるような“うごく”…このような子どもの姿を根拠に、場の設定や準備した素材などが、子どもの活

動にどう影響していったのか、実際の授業の様子から考察し、子どもの様々な“うごく”場面を研究してきた。

## ③ 題材の概要

本題材で使用する素材は、感触や光に透過させた時の、色の変化などにとっても特徴があり、魅力的な素材である。そこから子どもたちは視覚的に刺激を受け、「さわってみたい！」と思うであろう。

ツルンとした感触やひんやりした冷感からも刺激を受け、子どもの内面は揺れ動くだろう。また、ライトテーブルは、素材の持つ色の特性や重なり・透過する様子を更に際立たせ、子どもの内に、更なる「やってみてみたい」を生み出す重要な道具になるに違いない。題材を組み立てる上で、子どもが素材と向き合い、「やってみてみたい」ことを何度でも試すことができる時間をゆったりと設け、子どもの内と外でうごく場面を十分感じ取っていきたい。また子どもが友達のよさや関わりから、共感したり、新しいことを発見したり、感じたりできる鑑賞（見る・感じる）の環境（空間・問いなど）を設定する。「素材と、もっと関わりたい！」という子どもの心に拍車をかけ、更に新しい表現につながっていくことを期待している。





## 分科会6 子どもの“うごく”

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 「ひとものこと」とひびきあいながら 追求する自分の表現

▶ 茅野市立湖東学校 6年生 A表現(2)

[発表者]

長野県茅野市立湖東小学校

下平 怜那

[助言者]

長野県東御市立田中小学校

吉池 光則

小学校

#### 1 提案趣旨

- ①造形的な資質・能力・感性を伸ばし、自分の表現を追求し続けていくための、友や教師・美術館・素材・場所とのかかわり
- ②学習を通して身につけた造形的な力を次の題材で生かしていくことができる題材配列
- ③多様な表現にふれる中で、造形的なよさや美しさ、面白さ、工夫に気付き、それらを伝え合うことができる場の設定

#### 2 実践の概要（題材について等）

単元名：『心の中の美術館』

目標：美術館の作品に関心を持ち、鑑賞を通して感じたことを基に、自分の表したい感情や雰囲気にあった描画材や表現方法を工夫して表すことができる。

##### 授業の概要

**第1時** 康耀堂美術館で3つの作品を鑑賞して、作品から自由に感情や雰囲気を感じとる。

**第2～4時** 美術館で感じ取った感情や雰囲気に合った描画材や表現方法を考えて、表す。

**第5時** 作品を鑑賞し合い、表現のよさや美しさ、面白さを味わう。

\*その後、作品を康耀堂美術館に展示した。

##### 授業で見られた児童の様子

・M児はこれまでの題材でつけた力を生かして自分の表したい感情や雰囲気を具体的な言葉や形、色で表した。またクレヨンを使ったばかり、絵の具の水の量を調節して



ムラをつけた塗り方など、既習の技法を組み合わせることで表現していた。

- ・H児は友だちとかがわりながら製作する場の設定により、絶えずつぶやいたり友だちと話したりしながら自分の表現を確かめていた。友だちの表現のよさを感じ、取り入れることで、自分の表したい「にぎやかさ」「華やかさ」の表現を深めていった。



#### 3 成果と課題

- 美術館との連携によって、形や色に対する感性が育つ。また表現と鑑賞の一体化がなされた。
- 年度当初から題材配列を意図的に行うことで、既習の表現方法や素材を生かして表現を広げていく姿が見られた。
- 発想は個人、製作はグループといったように、場の設定を段階に合わせて変えることで、個々の表現を明確にしたり広げたりできた。
- 教師の声がけで、児童同士の表現をつなげたり、表現に自信を持ち、表し方などを自己決定したりしていくことができた。
- 教材研究を十分に行い、素材の持つ特徴を捉え、児童の実態に合った素材の選定や、年間を通しての題材配列を考えることが必要である。
- 美術館や博物館とのかかわりは鑑賞学習にとどまらず、様々なやり方が考えられる。



## 分科会6 子どもの“うごく”

実践発表《連携・つながりのポイント》

### かかわりあい つくりだす

▶ 松山市立道後小学校 2年生 領域 A表現(1)  
そめて、そめて、そめ色ワールド

[発表者]

愛媛県松山市立道後小学校

野村 晃靖

[助言者]

愛媛県西条市立三芳小学校

上迫 博幸

#### 1 提案趣旨

本校では、H24年度から四国造形教育研究大会発表校の指定を受け、図画工作科において「かかわりあい つくりだす」をテーマに研究を進めてきた。研究では、子どもたちが対象や材料をみつめ、イメージを広げながら主体的につくり、自分の表現や価値に意味を見いだす活動を大切にしたい。そして、「ひと・もの・こと」と豊かにかかわり合うことにより、表現の共有を図るとともに、自分の表現のよさだけでなく、友達の表現のよさや友達と自分の違いに気づき、自分の世界を広げながら表現し続ける子どもを育てることをねらいとした。昨年度の大会では低・中・高学年で授業公開を行ったが、そのうち低学年の授業実践例を紹介したい。

#### 2 実践の概要（題材について等）

本題材は、いろいろな色水で紙などを染める活動から、染めた紙で空間を飾るといった活動へと広がっていく造形遊びである。

染める活動では、子どもたちは色水で、紙がジワッと染まっていく感覚に驚きと喜びを感じながら活動を行った。また、イメージに合う色を見つけて浸したり、紙の折り方や染める位置を変えて浸したりするなかで、何通りもの色や模様があ



きることを発見し、夢中になってたくさんの紙を染めることができた。

空間を飾る活動では、「わくわく広場をカラフルわくわく広場にへんしんさせよう」というめあてをもって、子どもたちは活動に取り組んだ。教師は、子どもたちから希望のあったネットや透明のビニールを張ったトンネル、つるしたり巻き付けたりすることができる支柱等を活動場所に準備しておいた。「虹にしたい」という前時からの自分の考えを試す子や、お気に入りの染め紙を持ってトンネルの中に入る子、リボンをつかってつるす子やハートの形を折って窓に貼る子もいた。大きな染め布を支柱に巻いて、数人の友達と思いついたことを話しながら飾りを付ける様子も見られた。そこから、子どもたちが色や形、もの、空間などと積極的にかかわり合い、そして、友達とかかわり合いながら、活動を楽しむ様子を見取ることができた。



#### 3 成果と課題

子どもたちが自分の思いを十分に表現することができるような環境づくりが有効であった。

教師がねらいや見取りの視点を明確にしたり、一人一人に響く言葉掛けや支援の在り方を研究したりするなど、子どもの思いにしなやかに対応できる力を身に付ける必要性を感じた。



# 都図研研究局分科会

“子どもの遊びが生きる図工”

キーワード

子どもの遊び

[提案者]

東京都あきる野市立東秋留小学校

雨宮 玄

[講師]

アーティスト 山本 高之

## ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

今年度、都図研研究局はテーマを「子どもの遊びが生きる図工」とした。このテーマにある子どもの遊びとは、小学校の図画工作科で子どもの行為や活動の根幹にある大切なものを指している。これは、今大会のテーマが示す造形美術の在り方、すなわち、活力に満ちた力強さをもち、いかなる状況にあっても柔軟に働きかけていくしなやかさをもったもの、と重なり、図画工作科での子どもの在り方とも言い換えることができる。私たちは小学校の図工の時間で子どもたちの主体的な学びを、遊びという方法で学ぶ子どもの姿として捉え、美術館等の横の連携や、中学校との縦の連携等も視野に入れながら、子どもたちが一人の人間としてより豊かに成長していけるよう、造形教育がもつダイナミズムを生かした授業を展開していきたい。



## ◆この分科会の概要◆

図工の中の遊び：図工では、表したり・見たりする活動を通して、子どもが本来もっている感覚・感性を引き出し、形や色、イメージを使いながら自分なりに価値があるものをつくりあげることで、子どもたちがより豊かに生きていく力を育むことを目標としている。そしてこの目標は、子どもたちがつくり出す喜びを味わいながら、主体的に活動することで実現されるものである。

つくりだす喜びには、自分が思うように試したり、何度もくり返すことのできる自由さや、想像を広げ、考え、夢中になれる楽しさが含まれている。そして、その自由さや楽しさは、子どもが自分で選択し、決めることができるからこそ生まれてくるものである。また、「遊び」は本来誰かにさせられるものではなく、自ら動き出すことで、楽しさを感じることでできる行為である。だからこそ「生きる力」を育むために主体的な学びが求められる学校では、図工の時間の『つくりだす喜びが実感できる遊び』は充分子どもたちの「主体的な学び」に成り得るのではないだろうか。言い方を変えれば、子どもたちは図工の時間の中で「遊び」という方法で学んでいるとすることができる。

「遊び」が生まれ、生きるということ：図工の時間、同じ「もの」を目の前にしても、その「もの」への感じ方、関わり方は一人一人違う。それは「もの」の特徴には様々な側面があり、その子にとって魅力を感じる部分が違うからである。

例えば、「えのぐ」を目の前に、その鮮やかな色彩に魅力を感じる子、違う色同士を混ぜ、新しい色に

変化する瞬間に驚く子、とろとろした質感が気になる子、水の中でふわっと広がる不思議な動きに目を奪われる子等、その「もの」への感じ方は様々である。そして、子どもは自分の実感を基に、線を引き、塗り広げ、絵の具を混ぜ合わせ、手につけたり、ポタポタ垂らしたりと、次の行為へとつなげていく。このように、子どもが自分の身体を通して生まれた行為の連続が、創造的な活動をかたちづくっていくのである。

子どもがものに触れ、その魅力や手ごたえを感じ、ついやってしまいたくなるような行為に移るまでの**心の動き**。自分の行為によって変化する形や色の不思議さや魅力に引きつけられ、その行為を繰り返す時の心地よさ。まだ見たことのない世界や、触れたことのないもの、日常では気がつかなかったようなことに出会ったと時の**心の揺れ**。これらは図工の時間常に子どもたちに起こる出来事であり、造形遊びはもちろん、絵や立体で表すといった授業の中でも、子どもの活動の根幹にあるべきものである。そして、この子どもの心の有り様にこそ、子どもの「遊び」が生まれる秘密が隠されているのではないだろうか。

創造的な造形活動の中で、現れては消え、消えては現れてくる色彩やフォルムが、なんともいえずダイナミックで魅力的なのは、子どもが自分なりの方法で世界と関わり、子どもの中にある「遊び」が十分発揮され、何かを生み出す瞬間につながっているからである。私たちは、普段の図工の授業で子どもの「遊び」が十分発揮されること、すなわち子どもの中に**心の動き**、**心地よさ**、**心の揺れ**が生まれるような題材設定を考えていくことが「**子どもの遊びが生きる図工**」につながっていくのだと考えている。

### ◆研究経過・授業研究◆

今年度は6月から7月にかけて計三回、世田谷区立上北沢小学校と東京国立近代美術館との連携鑑賞研究研修会を実施した。この授業は、美術館で見つけた気になる一枚の絵と自分との間に、自分なりの感じ方や見方を反映させたレイヤーをつくり、鑑賞することで新しい価値観に出会ったり、自分なりの見方を深めたりする授業であった。この三回の授業（鑑賞→つくる→鑑賞）のサイクルの中で子どもたちは、本物の美術作品と自分の中に立ちあがるイ



メージとの間を行き来し、自分が選んだ色や形を重ねることで、変化する見え方を楽しむ姿があった。その姿からは、高学年なりの心の揺れ、心の動きから生まれる「遊び」が連続して起こる様子がわかった。

都図研研究局では「**子どもの遊びが生きる図工**」というテーマのもと、図工の中の子どもの姿から遊びをどう捉え、その遊びがどのように創造的な活動につながっていくのか、ということに迫りながら、日々実践を通し、常に子どもの姿に立ち戻り、研究している。そして、子どもの成長に図工という教科がどのように関わっていけるのかを2つの大会授業を通して提案していきたいと思っている。



## 「遊び」「イノセント」「ピュア」

河原 賢一

▶ 小学校 1年生 A表現(2)

### 1 研究テーマとのつながり

今年度の研究局の研究テーマは、「子どもにアートが生まれるとき」-子どもの遊びが生きる図工-である。「遊び」というつつい何かやっしてしまうようになるようなものに子どもたちは引き寄せられる。つついやっしてしまう行為には、何かを感じ取る「間」が存在する。たまたま天気がよくてワクワクしたり、たまたまそこにある材料にドキドキしたりと様々な偶然の積み重なりの上でできた「間」が、自分の中に切り込んでくる。そして、子どもたちを世界の変容へと誘う。

また、変容していこうとする中で子どもは様々な方法で世界と関わっている。子どもたちは自分で選択し、自分で掴み取り、少しずつ未来の世界を紡いでいく。図工の中にある遊びに迫っていくことで、自分の存在を感じるような授業でありたい。

### 2 分科会の視点から

我々の日常の中にはいろいろなおもしろさが潜んでいる。机の上の落書きから、青い空に浮かぶ白い雲の形までそのおもしろさの尺度は人によってそれぞれである。図工の授業ではそのおもしろさを子どもたちは題材によってそれぞれが敏感に感じ取り、つくったり、つくりかえたりする。そのつくったり、つくりかえたりする子どもの行為こそが主体的な学びであり、生きている証である。

合理的な授業展開を考えるのではなく、子どもが立ち止まり、寄り道しながら授業を進めていけるように、子どもの様々な行為を肯定的に認めながらみていく。その意識が子どもから出発する授業を生成することに繋がるであろう。

### 3 題材の概要

子どもの遊びが生きる授業を考えたときに、一つの視点として、どこかで誰かによって予め用意された確定の未来へ向かうのではなく、まだ姿がよく見えない曖昧な未来への時間を生成することが重要である。曖昧な未来へ向かうためには一人一人の子どもがつくり、つくりかえるという様々な行為こそが大切だと考えられる。その行為の結果として色や形が現れてくる。そこには遊びの軌跡があり、主体的な学びがある。我々教師はもっと子どもを信じてその行為に寄り添う必要がある。

曖昧な未来が、その子の自分で掴みとる色や形によって導かれ、揺らぎながら構築されていくために、何度もつくったり、つくりかえたりできる材料の選定を行う必要がある。また1年生という学年を考えて、材料としっかりと関わる時間を確保していく。

そして、授業の中で、自分には掴み取れないもの、他人とは共有できないもの、不確かなもの未解決のものを受容する感覚ももってもらいたい。そのようなたくさんの学びの経験から普段の生活をより豊かなものに感じて欲しい。



## 「遊び」「言葉」「物語」「行為」

杉山 聡

▶ 小学校 3年生 A表現(2)

### ① 研究テーマとのつながり

今年度の研究局の研究テーマは、「子どもにアートが生まれるとき」-子どもの遊びが生きる図工-である。サブテーマにある「遊び」とは、子どもが描く・つくるという行為の中で、子ども自らが選択し、表す姿である。

先日液体粘土を大きな紙に伸ばしながら絵を描く活動を行った。その際、子どもが材料や場所と関わり、色々と試した後、ふと活動が止まる瞬間があった。しばらく止まった後、その子の指先は空を描きながら少しずつまた動き出した。その後も一見遊びのように見える活動を繰り返しながら、指で描いては消し、新しい動きや表現を試し、自分だけのリズムを刻みながら、新鮮に活動を始めたのである。そのような姿に自主的、主体的な学びがあると考えている。今回はそれを踏まえ授業を組み立てていこうと考えている。

### ② 分科会の視点から

3年生の日常の様子を見ていると、つくりたいものをつくるために真っ直ぐに進むわけではなく、回り道をしながら表す場面によく出会う。何色も絵の具を混ぜ合わせ色をつかったり、何度も描き直したりする中にも、子どもが材料と関わりながら、色や形を味わうなど、教科における学びの本質に迫る場面が見られる。

今回は、その中でも、子どもの日常にありつつも、つい描いてみたくなるテーマ、そのテーマに自然と結びつくような材料を、新鮮に手渡すことをきっかけに、自分の中で思いを広げ、ストーリーを組み立てながら表現していきたい。

本題材は、子どもの遊びが生きる図工の題材として検討するが、決して遊びをすることが目的ではない。あくまで子どもが材料や場所と関わったり、言葉や行為からイメージを広げたりする中で、自ら選び自らみつけ動き出す過程で、「つくり、つくり変え、つくる」姿を大切にすすめていくのである。

### ③ 題材の概要

そのためには、幅広い子どもの発想や思いを引き出し、それに答えられるようなテーマ、言葉、行為を探していくことが重要である。また、子どもの活動を狭めすぎず、かと言って子どもに委ねる部分が多く、活動が広がりすぎてしまわないような投げかけを探ることが大事だと考える。例えば、子どもたちが見えない部分を連想し、考えてみたくなるような言葉に着目すると、「夜」「穴」「地下」などの言葉にも子どもの遊びが生まれるきっかけがあるかもしれない。また、場所や材料とかかわる中で、五感を働かせ描きたくするような設定ができるかもしれない。そのようにして題材と子どもをつなぎ、子どもの思いが立ち上がる瞬間を見ていきたい。ここでは描いていくうちに、次に描きたいものが見つかったり、物語が生まれたり、また考えることに戻ったりしながら、子どもの行為とイメージがどんどんループしていくような子どもの活動が展開されるものと考えている。





## 分科会7 子どもの遊びが生きる図工

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 材料の特徴を感じるイメージを膨らませる・学び合い

▶ 小学校 2年生 A表現(2)

[発表者]  
沖縄県浦添市立内間学校

佐渡山園子

[助言者]  
沖縄県うるま市立高江州小学校

大城 悦子

小学校

#### 1 提案趣旨

学習指導要領における図画工作科の目標に、「感性を働かせながら」の文言が新たに加えられ、「児童の感覚や感じ方、表現の思いなど、自分の感性を十分に働かせること」が重視されている。

本校の児童の実態から、自分の思いやイメージを絵に表現することを苦手としている児童が多い。漫画を描いたり、キャラクターを写したりするなど、自由に絵を描くことは好んで取り組むが、テーマを与えて描かせると苦手意識がある。イメージしたことをうまく表現できないからだと推測される。

また、低学年からいろいろな材料に触れたり、表現方法を使った活動を多く体験したりすることを積み上げることで、自分なりの表現の仕方がわかり、絵に生かせるようになると、絵に表現する楽しさを感じられるようになると思う。

そこで、材料に触れる活動や学び合い活動を取り入れ、材料の特徴からイメージを膨らませ、自分なりの表現ができるような取り組みを実践した。

#### 2 実践の概要（題材について等）

##### (1) 材料に触れる活動

いろいろな材料に、体全体を使って触れる活動では、材料を丸めたり、破ったりしながら、イメージを膨らませていた。



##### (2) カードの活用

いろいろな材料に触れて、自分でイメージしたことや、友達と一緒に考えた事もカードに書き入れながら、イメージを膨らませた。また、カードを材料ごとに分けて作成することで、同じ材料でもいろいろな感じ方があることに気づかせた。



##### (3) 学び合い

絵の得意な児童、苦手な児童、発想が豊かな児童を同じテーブルで活動させ、苦手な児童でも、周りを見ながら活動が進められるようにした。

また、学習の半ばに友達の作品を見たり、発表の場を設けたりすることで、友達の考えを聞きながら、さらにイメージを膨らませられるようにした。

#### 3 成果と課題

##### <成果>

いろいろな材料に五感を使ってたくさん触れることで、いろいろなイメージを膨らませながら、表現したいことを絵に表すことができた。



##### <課題>

材料に触れる時間の確保を工夫する必要がある。







# 中 学 校



# 中学校 時程・会場図・発表者一覧

## 2日目：11月29日(金)の日程

- 9時40分～10時30分 公開授業
- 10時40分～12時10分 研究協議  
……【5階1年生各教室】
- 12時10分～13時30分 昼食
- 13時30分～14時35分  
各道府県による実践事例発表…【5階1年生各教室】
- 14時45分～16時45分 研究協議全体会

### 東京都による公開授業・授業会場

- ・「多様な経験から育む表現活動」(11-23)  
…【6階 ランチルーム】
- ・「色、色彩、イメージの視点をいかして」(10-22)  
……【4階 2-4】
- ・「他者への眼差し」(9-20) ……【4階 2-5】
- ・「思いをかたちに」(8-18) ……【4階 2-6】
- ・「思いをかたちに」(8-19) ……【3階 3-1】
- ・「他者への眼差し」(9-21) ……【3階 3-2】

### 各道府県による実践事例発表・発表会場

#### ■「思いをかたちに」

協議会会場……【5階 1-1】【5階 1-2】

##### ○発表者

- ・田仲 浩美(沖縄県金武町立金武中学校)
- ・高橋伊智郎(長野県茅野市立東部中学校)
- ・松永美紀子(岡山県倉敷市立水島中学校)
- ・高橋 清子(宮城県仙台市立館中学校)
- ・五味 一男(県助言/茅野市立茅野北部中学校)

##### ○指導・助言

- ・三品 良春(宮城県仙台市立南中山中学校)
- ・稲庭彩和子(東京都美術館)

#### ■「他者への眼差し」 協議会会場……【5階 1-3】【5階 1-4】

##### ○発表者

- ・鷹野 敦貴(山梨県甲府市立南中学校)
- ・高橋 知志(岩手県岩手大学教育学部附属中学校)
- ・小泉 繁雄(京都市総合教育センター)
- ・則反 冴子(北海道札幌市立札幌北中学校)
- ・湯口みゆき(京都府京都市立蜂ヶ岡中学校)

##### ○指導・助言

- ・小俣 博昭(山梨県 富士・東部教育事務所)
- ・小池 研二(横浜国立大学)

#### ■「形、色彩、イメージの視点を活かして」 協議会会場……【5階 1-5】

##### ○発表者

- ・新野 貴則(山梨大学)
- ・吉田 千春(福井大学教育地域学部附属中学校)

##### ○指導・助言

- ・松永かおり(東京都教育庁指導部)

#### ■「多様な経験から育む豊かな表現活動」 協議会会場……【5階 1-6】

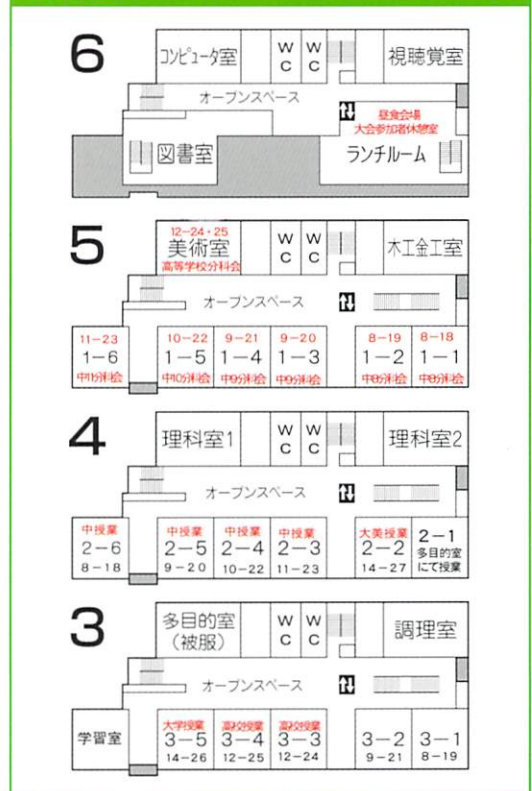
##### ○発表者

- ・佐々木和哉(岐阜県多治見市立多治見中学校)
- ・宮尾 有(熊本県熊本市立城北小学校)
- ・林 徳和(岐阜県岐阜市立境川中学校)

##### ○指導・助言

- ・石賀 直之(東京造形大学)

## 会場図





# 「造形美術教育の ダイナミズム」

(会場: © 墨田区立両国中学校)



## ▶ 中学校・発表者一覧

分科会8 思いをかたちに			
授業	公開授業	関連授業発表・分科会 提案	指導講師
18	田邊 真由美 (渋谷区立松濤中学校)	鹿倉 美帆 (渋谷区立広尾中学校)	小澤 基弘 (埼玉大学)
19	花里 裕子(中野区立第五中学校) 三浦 悦子(足立区立青井中学校)	桶川 希三子 (世田谷区立千歳中学校)	大成 哲雄 (聖徳大学)
分科会9 他者への眼差し			
20	檜原 純子(目黒区立目黒中央中学校) 奥山 たみ恵(目黒区立第八中学校)	河本 珠実 (目黒区立東山中学校)	渡辺 邦夫 (横浜国立大学)
21	志手 伸圭(足立区立湊江中学校)	高澤 健太郎 (世田谷区立弦巻中学校)	井坂 健一郎 (山梨大学)
分科会10 形、色彩、イメージの視点を活かして			
22	深見 響子 (世田谷区立上祖師谷中学校)	中村 奈穂子 (世田谷区立世田谷中学校)	大泉 義一 (横浜国立大学)
分科会11 多様な経験から育む豊かな表現活動			
23	神野 智彦 (新宿区立西早稲田中学校)	立川 英司 (新宿区立新宿中学校)	石賀 直之 (東京造形大学)

# 思いをかたちに分科会

[提案者]  
渋谷区立代々木中学校

近藤 幸司

## キーワード

技法を手立てに・鑑賞を手立てに

### ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

中学生の日常に慣れ親しんだ粘土はない。夢中になった絵の具箱はない。みんな中学校入学とともにおもちゃ箱の中にしまい込んでしまったかのようだ。中学生の美術への一番の期待は「絵が描ける事」。発想、構想作業は大の苦手。「1つで結構」や「面倒くさい」に逃げていく。ひょっとしたら「造形活動」の戦士たちは燃え尽きて中学生になるのだろうか。しかしそう見えるのは生徒が美術のみならず中学校での学習を自分の見方や考え方を発揮できる場としてなかなか捉えられないからかもしれない。そのような生徒に対して私たち美術教師は小学校高学年から中学校段階において次のような点に留意することが大切であると考えます。

- 身近な事物等の造形的な特徴や効果について、集団や社会との関係も含めて考えるようにする。
- 自分なりの見通しを立てて活動できるようにする。
- 表現の意図に合わせて材料や用具の特徴を生かす。
- 用具・材料の扱いに習熟する場面を設ける。
- 鑑賞は、造形美術作品の社会的な意味なども含めて指導する。
- 知識や技能を一律に身に付けさせることを主なねらいとしないように留意する。

(2009年 渋谷区教育委員会指導室 まとめより)

私たちはこのような美術科の課題を踏まえ、日々の授業実践を通して創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する態度を養わなければならない。

### ◆この分科会の概要◆

発想・構想は、すべての生徒が、自分なりの見方や感じ方、考え方を発揮して、自分で表現の主題を設定し、表現意図に沿って色や形、材料、表現方法などを工夫して自己実現をしていく活動である。そのような活動を保証し、支援し、すべての生徒が自分の思いを形にすることができたと実感できるような題材、実践を目指す研究が必要と言える。今までよく実践されてきた材料や活動も、見方や働きかけを工夫することで進められる研究もある。また、新たな発想で新しい材料や技法を与えることも面白いと考える。発想のきっかけ（言葉から、色から、音から、技法から、手触りから、物語から、などなど）をどこに設定するかも大切なことと考える。以上を踏まえ本分科会は研究を重ねて来た。





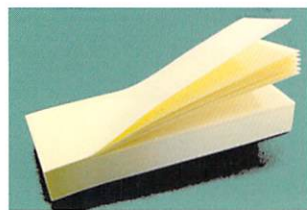
## ◆研究経過・授業研究◆

### 授業番号 18

中学生の生活実態や見方考え方の特性を踏まえ、彼らの心を動かし、「何をどのように表したいのか」といった発想構想を楽しく、明確に、深く掘り下げることができるようなきっかけづくりや手立てを中心に研究をすすめた。

#### ◇授業研究「自分もアニメーター」

発想したものが平面にとどまらず立体になったり、製品になったりする事は、生徒にとって楽しい作業である。静止しているはずの絵が動くアニメーションもそんな楽しさや驚きを伝える題材と言える。しかし、アニメーションがあたりまえの現代、より高度なアニメーションに目を奪われがちである。今回は生徒の身近にあるこの題材を取り上げた。デジタルなアニメーションをよりアナログなものから発想、構想することが今回の研究であった。アニメーションの簡単な仕組みをパラパラ漫画やゾートロープ等で理解させ、連続した動きをあらわす表現に関心を持たせ、自分で簡単なアニメーションを制作することで感動を味わうことができると考えた。形や色彩の変化により生まれる動きの面白さや表現効果を意識させながら自分のアイデアを形にまとめ、動きを工夫して構想を練る「絵コンテ」の制作や台紙(今回は付箋を使用)に作品を描いていく活動、デジタルカメラで1枚ずつ撮影をアニメーションにまとめる活動など何度でも構想を練り直す事が出来る工夫も盛り込んだ。そして完成した作品を全員で鑑賞し、動きの面白さや工夫した点に注目してもらえたらと考えている。



### 授業番号 19

表現活動と鑑賞活動を連動させることが提唱されている。そのことを踏まえ、鑑賞活動を発想構想に活かす研究をすすめる。また、発想構想のどの段階に活かすかという点も柔軟に考えており、感じる自分、表現に向けて発想・構想を練る自分、なぜ自分はそう考えたのだろう、と自己理解が深まるような働きかけを目指している。

#### ◇授業研究「見かたが変わる。見えかたが変わる。」新しい美術館との連携



ループル美術館のタブレット型端末を有効に活用できないかと考え題材を設定した。美術館が地域になく、引率することができなくても、「本物のループル美術館の作品(データ)が学校にやってくる」という新しい美術館の取り組みを利用し、生徒全員に美術作品とふれあう喜びを感じさせている。タブレット端末の中には、ループル美術館が選定した東西の「空間を意識した作品」が8枚入っている。風景画は、作者が五感を通して、その場の空気や雰囲気を感じ取り、自分の心情(想い)や意図と光や色彩、構図などの表現の工夫によって表される。

今回は、作者の目線や表現の工夫や心情を中心に鑑賞するとともに、東西の空間表現と遠近法の手法などにも気づかせ、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、表現活動に活かせるようにしている。美術鑑賞の知識だけでなく、表現との関連を考慮し、「風景画」などの制作のための発想や構想などに結び付けたい。

## 発達段階を意識した、つくり出す喜び 「自分もアニメーター」

[授業者]  
東京都渋谷区立松濤中学校  
田邊真由美

[助言者]  
埼玉大学教授 小澤 基弘

▶ 中学校 2年生 A表現(1)

### ① 研究テーマとのつながり

造形美術が人の成長や生き方にかかわる重要なものであると考える。

有史以来絵を描いてきた人類にとって、その目的を別として、生きていくうえで絵を描き表現することは、本能的に渴望されてきたものであることは明らかである。現在多くの漫画をもとにしたアニメーションが日本・世界で親しまれている。中学生も日常的にそれらを好んで観る環境の中で、それが「美術」に関わるものであるという意識は希薄ではないかを感じる。そこで今回の授業を通し、アニメーションを観て楽しむだけでなく、作り手としての楽しみを味わうことで、生涯に渡り美術を愛好する心を高めることができると考える。

### ② 分科会の視点から

「思いをかたちに」をテーマに、第8分科会では、アニメーションという技法を用いて平面的で、静止しているものに「命を吹き込む」という表現を理解させることを大切にしたいと考えた。各自が選んだ主題などを基に、想像力を働かせ、単純化や省略、強調、材料の組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練ることを目標とする。アニメーションの基本的技術を生かして、豊かに表現していく。

### ③ 題材の概要

高度なアニメーションに目を奪われがちであるが、自分で簡単なアニメーションを制作し、その原理を理解・体験することで感動を味わうことができる。形や色彩の変化により生まれる動きの面白さに気付かせ、表現効果を意識させながらアニメーションなどに表現させる。アニメーションの簡単な仕組み(パラパラ漫画、ゾートロープ等)の紹介をし、連続した動きをあらわす表現に関心を持たせる。自分のアイデアを形にまとめ、動きを工夫して構想を練る(絵コンテの制作)。付箋を使用し、絵コンテに基づき作品を描いたら1枚ずつデジタルカメラで撮影をする。完成した作品の動きの面白さや工夫した点に注目して全員で鑑賞する。なお、絵コンテの制作時や台紙としての付箋への作品描写、デジタルカメラへの撮影等において、発想、構想の変更が可能であることを常に意識させる。





## 分科会 8 思いをかたちに

実践発表《受け継ぐ・広げる・創造する》

### ～美術文化の継承と創造を学習しよう～ かりゆしプロジェクト 「ていーだパワーを感じて」

▶ 沖縄県金武町立金武中学校 2年生 A表現(2)・B鑑賞

[発表者]

沖縄県金武町立金武中学校

田仲 浩美

[助言者]

宮城県仙台市立南中山中学校

三品 良治

### 1 提案趣旨

沖縄では、美術文化に関する学習が新鮮で身近に感じる。さらに郷土の自然環境や風土、背景に琉球という歴史が生活の中に活かされている。中学生という多感な時期に生活の中で身近にあるものを視野に入れ、授業で展開するとき「鑑賞」と「表現」を繋げることで、より身近で更に郷土に対する愛着を意識させたい。授業実践では、美術文化について理解を深め、美術の始まり、広がりや身近にあることを気づかせたいと考えた。

生徒たちは、「沖縄」というより「琉球」の工芸に興味、関心、魅力を感じ、特色に「機能美」があることにも関心をよせている。現代の「私たちの沖縄」に視点を置き、素材の中から生まれるデザイン性や個性豊かな発想で制作活動し『かりゆしプロジェクト』をテーマに、この島のパワーを色や形で自分なりにデザインすることで身近に感じ、(受け継ぐ)心の豊かさを表現させたい。

### 2 実践の概要 (題材について等)

#### 1 題材について

- ・受け継ぐ: 「用と美」の視点をおく。
- ・広げる: 素材・題材の発掘と活用。
- ・創造する: 開発する(興味関心)制作活動

#### 2 プロジェクト

- ① 「鑑賞」琉球探索 (h 2)
- ② 島ぞうりのデザインと制作 (h 4)
- ③ かりゆしウエアのデザイン (h 4)
- ④ 沖縄工芸体験レポート (夏課題)
- ⑤ 信仰から発展した美術 (h 2)

### 3 授業研究

①琉球をキーワードに歴史背景や諸外国との関係、技法をDVD鑑賞し、作家の卵(先輩)たちを招き講話をしていただいた。生きた工芸に関心を寄せる。(継承の手口)

②沖縄=海を連想。身近で中学生にも関心が高く、単色版画的な表現が楽しめる。沖縄らしいがテーマのため構成の工夫でオリジナルを表現させる。



③クールビズ「かりゆしウエア」定番。テーマへの思いを主体的に魅力ある作品が生まれた。「〇〇の為に」等、生徒たちが感じたTPOでデザインする姿は愛着へ繋がると確信した。

### 3 成果と課題

生徒たちは、制作活動のなかで「琉球」の文化を理解し、自然と人間の関わりから「郷土の良さ」を知り、親しみを持つことができた。また、生活の中に「素材」を発見し、「文化」を知ることで、さらに自分自身の文化として「思いを形に」することができた。



課題として、祖先崇拜が中心となる沖縄では、仏教から発展した美術(仏像など)の意識が薄い。京都・奈良への修学旅行の取り組みの中で、日本美術の一つとして身近なものとして認識させたい。

## 分科会 8 思いをかたちに

実践発表《つながり》

### イメージの力 ～空想の世界を表すために～

▶ 中学校 3年生 絵画 A表現(1)

[発表者]

宮城県仙台市立館中学校

高橋 清子

[助言者]

宮城県仙台市立南中山中学校

三品 良春

#### 1 提案趣旨

生徒たちが、内面からわきあがる思いを存分に表現している美術室は、常にエネルギーに溢れている。とくに発達段階に応じた好奇心を刺激する題材は、「もっとこうしよう」と、生き生きと工夫する向上心を伴って、作品の完成に至る過程を生み出す。このような自己実現を果たす態度を形成することは美術の役割でもある。

今回の改訂では、発想や想像の力を伸ばすことがさらに重要視されていた。確かに以前、仙台市美術研究会で中学生に行ったアンケートでも、「中学校の美術の授業でいちばん伸ばしたい力とは」という問いに、全学年で多かった答えは「豊かに想像を広げアイデアを出す力」であった。想像力が豊かになる、多感なこの時期の生徒たちにとって、夢や幻想を表現する力を伸ばす授業への大きな期待感がうかがえた。

このような美術の役割やアンケート結果から、主体的に自分の世界観を表現する授業の重要性を感じ、題材の研究を行ってきた。今回は、生徒のイメージを広げようと取り組んできた中から、「点描による空想の世界」を提案したい。

#### 2 実践の概要(制作の流れ)

##### ① 発想(導入)

「概念くずし」「発想ミニテスト」「鑑賞」～ひらめきを大切にしながら、様々な発想の手だてを経験させ、空想の楽しさやおもしろさを感じさせる。作家や先輩・友達作品を鑑賞して学び合う。イメー



ジを広げるこの過程で自信をつけると、ほとんどの生徒が自分らしさに自信を持ち、主体的に自分の主題を見つけることができている。

##### ② 表現

「主題決定」「イメージスケッチ」～美術室に資料を豊富に準備し、制作カードや机間指導で一人一人に合った支援を行い、表現力を伸ばす。「鉛筆でスケッチ」「描く“かたち”の工夫」～構図での効果を考えながら下絵を描く。用紙の形もイメージに合わせて考える。

「表現の基本は点描」～点の密度を変化させると、立体感などの表現が容易にできるので、描く表現への不安を軽減できる。また、点の打ち方によっていろいろな質感の表現ができる驚きと発見からも、制作意欲が増していく。もしも色表現など生徒から希望があれば対応する。

##### ③ 鑑賞

全員の作品を校内に展示し、互いの表現の世界を味わう。在校生、小学生の鑑賞機会も設けている。



#### 3 成果と課題

心豊かな発想による作品は、同学年だけでなく在校生や小学生の心もつかみ、あこがれをもって鑑賞の感想を発言する様子や、入学後の意欲を見せていた。今後も課題を追求しながら、生徒たちが、主体的に自分の思いを表現する喜びを味わうことができる授業の実践を目指していきたい。



公開授業 19 《連携・つながりのポイント》

「見かたが変わる。見えかたが変わる。」  
新しい美術館との連携  
感じる風景 「想いの空」

▶ 中学校 3年生 A表現(1) B鑑賞(1)

[授業者]

東京都中野区立第五中学校

花里 裕子

東京都足立区立青井中学校

三浦 悦子

[助言者]

聖徳大学准教授

大成 哲雄

1 研究テーマとのつながり

実際の作品が無い場所でも、「本物のルーヴル美術館の作品(データ)が学校にやってくる」という新しい美術館の取り組みを利用し、多様に作品を鑑賞する。「自分の指先で、ルーヴル美術館とダイナミックにつながるような体験」のなかで、主体的に作品とふれあう喜びと、鑑賞の面白さ、「見方がかわる」体験をすべての生徒に感じさせ、生徒一人一人の見方を共有することで、自らの美意識価値観を認識させ、生涯を通じて美術を愛好する心情を養いたい。

2 分科会の視点から

「ルーヴルDNPミュージアムラボ」のタブレット端末は、美術館側が選定した収蔵作品の精細な画像と、誰もが操作できるタッチパネルツールにより、「じっくり見て、触れる、能動的な鑑賞」と「パネル上での表現」が可能であるそして、「比較機能」を用いた作品の対比から、さまざまな考えを導き、言語化、視覚化することで、「自分の表したい感じ」の発想や構想を豊かに広げさせた。タブレット端末の特徴をいかした鑑賞活動と表現活動を弾力的に連動させることによって、その主題を表す場面や構図、色彩、実際の描画材料の使い方などについて、より深めることができるように導きたい。

3 題材の概要

自分の好きな作品を集めた美術館。そんな夢のような体験がデジタルなら可能である。美術館の

本物の作品データを使った贅沢な鑑賞から、それぞれの作品の良さを深く味わい、自ら作品を選び、感じ取ったことから、自分の美術館のテーマを生み出す。自分の作品の展示を発想構想する楽しさまで感じさせたい。作品名などの予備知識の無い中で、同じ作品をみる経験を仲間と共有し、その考察に耳を傾けることは、今後の鑑賞体験をより豊かにし、表現活動への心構えやヒントを得ることになるだろう。個人と他者、鑑賞と表現、デジタルとアナログ、リアルとバーチャル……。それぞれ対比しながらも連動し、生徒がこれからの自身の表現を深めてゆくような、充実した活動にしたい。

【2013年2月 目白研心高校美術部の様子】

二月の美術部の活動では、対比による差異のほか、共通点も見出され、パネル上にそのプレゼン画面が作られた。



## 分科会 8 思いをかたちに

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 地域素材を基に発想や構想を広げる

[発表者]

長野県茅野市立東部中学校

高橋伊智郎

[助言者]

長野県茅野市立北部中学校

五味 一男

▶ 中学校 1年生 A表現(2)・(3), B鑑賞(1)のA

#### 1 提案趣旨

- ①豊かな自然に恵まれ、縄文時代に最も栄えたといわれる広大な八ヶ岳山麓が眼前に広がる茅野市。国宝に指定されている土偶「縄文のビーナス」で名高い茅野市尖石縄文考古館と連携。
- ②世界でも例がないといわれる独創的な幾何学的模様の縄文土器を基にした題材の巡り合わせ。
- ③題材を創り上げるために吟味した素材。

#### 2 実践の概要 (題材について等)

題材 『平成 DOK I 土器』

##### ①縄文土器の鑑賞

尖石縄文考古館で普段展示していない縄文土器十数個を用意して鑑賞が行われました。その学芸員が講師として土器に刻まれた文様の秘密等をお話して下さいました。土器の形や文様を間近で観察したり触れたりすることで、どんな模様にするか土器文様を選択したり文様をもとに幾何学的模様を考え出したりと発想や構想ができるきっかけになります。



ベースになる器の形や表面の模様や形をクロッキーブックに描き込んで発想や構想をしていきます。

##### ②古紙パルプが入った粘土で成形

古紙パルプ、ホワイトクレーと液体粘土、着色のためにポスターカラー(バーントシェンナー)を混合したものを型になるもの(紙コップ等)に押しつけて成形します。速乾性の木工ボンドで土

器の上部に波の形をつけたり、水で表面を滑らかにすることもできました。

##### ③たこ糸の染色

縄文土器に表現した撚り紐のイメージでたこ糸で模様を表現します。たこ糸は白一色しかないため染色する場面を設けました。花びら、野菜、コーヒー等を持ち込んだ生徒が多くいましたが、特に葡萄と人参を組み合わせたものから美しいバイオレット色を得ることができました。これらの色の他のものは染料で染め15種類程度ができました。また金や銀の糸を生徒自ら専門店で購入しました。

##### ④糸の貼り付け

発想や構想で決めたスケッチを基に糸を貼り付けていきます。土器の文様を参考にしただけでなく全く独創的な模様等と発想や構想に広がりが出て、内部にも底部にも糸を貼り付けたりと生徒個々の土器の模様に多種多様な仕上がりが出てきました。あの鑑賞で縄文土器に触れたりして独創的な幾何学的模様を通じて縄文人の感性を感じ取れたのではないのでしょうか。

#### 3 成果と課題

- ①制作活動の流れに向けた周到な準備と計画によって、発想や構想ができる生徒が多く見られた。
- ②素材の感覚を大切にすることで、見通しが持て主体的に取り組める題材であった。
- ③尖石縄文考古館と連携の中で鑑賞などの学習の方針と一致や齟齬。
- ④題材がオリジナルのため複数の素材の準備には相当な手間と時間が必要である。



## 分科会 8 思いをかたちに

実践発表《連携・つながりのポイント》

### はじめまして、遙邨さん ～美術館と授業とをつなぐ試み～

▶ 中学校 1～3年生 B鑑賞

[発表者]

岡山県倉敷市立水島学校

松永美紀子

[助言者]

東京都美術館

稲庭彩和子

#### 1 提案趣旨

倉敷には、郷土ゆかりの作家の作品を中心に蒐集している倉敷市立美術館がある。この美術館では毎年2月に、市内の小・中学生の作品を集めた『倉敷っ子美術展』が開催され、生徒にとっては馴染みのある美術館だと言える。

中教研倉敷支部では、市立美術館の協力を得て、研修やワークショップをしばしば行ってきたが、今年度、館蔵品を取り上げた鑑賞授業を展開し、美術館との連携を更に一歩進めたものにしたと考えた。

取り上げたのは、倉敷を代表する著名な日本画家・池田遙邨の作品である。遙邨作品は、ファンタジック、メルヘンチックで親しみやすく、生徒にとって、興味・関心が持ちやすい作品であると言える。

この実践の結果、市立美術館へ足を運ぶ生徒が少しでも増え、『本物』と対峙して、作品のよさや美しさを感じ、鑑賞する楽しさを味わうことができたと思う。また、池田遙邨に対する理解が深まれば、郷土に対する愛着も増すのではないかと考えるのである。

#### 2 実践の概要（題材について等）

『はじめまして、遙邨さん』と題して、以下の取り組みを行っている。

○遙邨作品のレプリカを作成し、対話型鑑賞を行う。



○美術館学芸員による“出前授業”を行い、池田遙邨のとなりや画業について知る。



○遙邨の作品を20点選び、アートゲーム用のカードセット（20点のカード10セットを1組とする）とゲームの手引き書を作成  
ゲームの内容は、言語活動の充実ということを意識し、イメージや感情を表現するための言葉を集めたシートをセットの中に入れていく。

#### 3 成果と課題

今回の実践について提案したところ、美術館には「教育普及のチャンス」と捉えてもらえ、出前授業の実施はもとより、作品選定の際のアドバイスや、作品の解説書作成など、多くの場面で協力を得ることができた。

美術館にとっては、学校現場のニーズや生徒の実態を知る機会となり、私たちにとっては、池田遙邨について学び、そしてまた鑑賞授業のあり方を再考できる機会となった。

これからの課題としては、遙邨作品ばかりで構成したアートゲーム用カードセットの内容を見直し、他の郷土作家の作品を取り入れ、平面・立体、具象・抽象を問わず、多種多様な美術作品を鑑賞できるものにしていくことであろう。

“地元志向”の鑑賞教育の充実を、美術館とともに模索していきたい。

# 他者の眼差し、 外とのつながり分科会

[提案者]

中野区立中野中学校

松尾 美恵

キーワード

外とのつながり、色や形のコミュニケーション

## ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

他者へのまなざしという観点から小学校で身につけてきた力は「造形遊びで様々な道具を選択しながらものをつくる力」・「生活の中に美術のよさを活かす力」があがるだろう。そこからさらに連携をはかりながら中学校で「美術的な視点でより心地よく環境作りを考える」「他者の立場や願いに思いを馳せる力」を身につけさせ、成長させていきたい。そして卒業後の高校、大学での造形美術は、さらなる多くの出会いや経験の積み重ねによって、心の豊かさ、人生の豊かさへと広がり深まっていくことだろう。人の成長を振り返ると、幼少期は、個（自分）の世界の中で満足し、完結することが多かった造形美術活動であったが、中高と学年が上がるに従い、他者の眼差しを気にするようになってきた。中学に上がったからは、学校内だけでなく、地域や社会へと広範囲に目を向けられ、外とのつながりにも意識が向くようになってきている。そこには、自分の生活とのつながりだけでなく、地域と社会に目を向け、自然も含めた環境に、色や形、光、材質、空間など造形要素の観点という美術を通して社会とのつながりが見えてくるからだ。自分を取り巻く住環境、地域社会、ひいてはグローバルな世界の中で多くの人とのかわり、結びつきを考え、他者の立場や相手の視点に立った造形美術活動へと展開させていきたい。美術の授業にとどまらない広大な次元での発展という意味のダイナミックなかかわりを持つとともに、時代の流れに柔軟でしなやかな対応しながら現実を受け入れ、人の気持ちや生き方のあり様にも影響を与える活動、造形美術活動の中の「外とのつながり」というキーワードを基に研究実践を行った。

## ◆この分科会の概要◆

「他者への眼差し、外とのつながり」ということで、意識を自分の外に向け、身の回りのものや空間などのあり様を色や形、材料や光など造形的な要素に照らしあわせて味わい考え、新たに働きかけを行うことを促す実践に向けての研究である。具体的には、美術的な視点で、より心地よい機能的なよいもの作り・環境作りから「よりよい環境づくり」という実践と、デザインや工芸の題材からは「遊びのデザイン」の実践を取り上げた。つまりこの分科会は、相手の立場や目的などを考える造形活動である。生徒が自分の身の回りに眼差しを向ける場所や他者の立場や願いに思いを馳せることが中心となる活動とも言え、発想構想段階が重要なカギを握る。特に中学校美術の授業では、あまり扱われることが少なかった空間や環境の良さ、美しさ、快適さ等を意識し、働きかける活動も含まれる。他者が介在してくることが基本となり、色や形、材料、空間、光などを介したコミュニケーションの力に働きかけるような活動であることから取り組んでいきたい。





## ◆研究経過・授業研究◆

これまでに、連携の研究実践を行ってきた。8/1.2の都中美夏の研修で2人が「外とのつながり」を発表し、これをうけて今回の授業研究へと展開発展させていった。

### ○「地球環境について～私たちが地域のためにできること～」をテーマとした環境ポスター

大田区立雪谷中学校 堀内 有子

これまでポスター制作は、オーソドックスな題材のため、ほとんどの学校で扱っているだろう。ただ今回注目すべきは、企業とタッグを組んでいかに生徒に豊かな発想やアイデアを生み出していくか、視点の変え方、企業側からのとらえ方を授業に持ち込んだことだ。しかも教師の視点とは違ったおもしろさがあった。

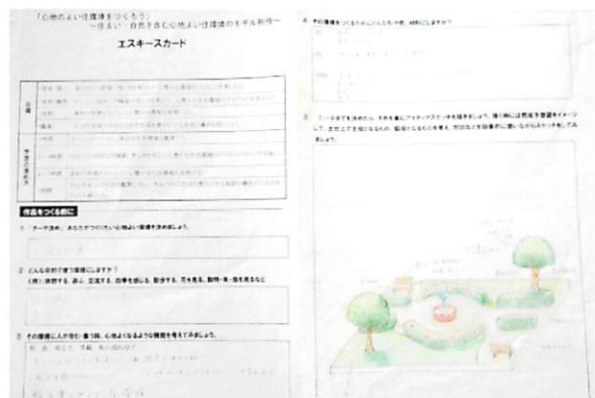
さて、生徒たちは、小学校時代から環境問題学習を繰り返し行ってきた経緯があり、環境問題について熱心に学習する姿勢があった。そこで、他者の立場に立ち、しかも自分たちの問題として深く考え主張する環境問題のポスターに取り組むことで、もっと外に目を向けさせ、様々なつながりができると考えた。特に、メッセージを印象的に伝えるために、2011年から公益社団法人日本広告制作協会の協力を得て、外部講師を招き、発想やアイデアを広げる特別授業を行った。実際にクリエイターとして活躍されている講師の話には、説得力があり、制作するにあたって、「発想力」が重要なキーワードになることを気付かせてもらいながら、見る人に強く伝えるというこれまでとは違った作品へと広がっていった。同時に多くの人とのかかわりの授業から、社会との結びつき、自分にできること、他者とのかかわりにも目を向けながら深められた。これからも社会の力を取り入れながら柔軟思考のできる人、そして問題点を発見し、問題を解決できる人を育てていきたい。



### ○「人にとって心地よい環境をつくろう」～住まい、自然を含む心地よい住環境のモデル制作

八王子市立柵田中学校 畠山 真理

昨年度の東京都教育研究員としてこれまで深めてきた内容をさらに形を変え発表した。本題材は、住まいや公共・自然などの人にとっての心地よい環境を住む人の気持ちや機能、美しさなどの観点から考えて構想を練り、発泡スチロールの土台の上に様々な素材の特徴をいかして、心豊かな生活環境のミニチュアを表現する。生徒には、新たな表現方法を見つけ、想像する喜びを味わうことや生活を美しく豊かにする美術の働きについて理解することで、中学校を卒業しても美術の楽しみ方の視野を広げ、生涯美術を愛好する心情を育むことができると考えた。生徒が主題設定から表現形態の選択まで自己決定しながら、心地よい住環境を考え、同時にみんなの生活を豊かにする美術の働きまで広げ、見た目や過ごしやすさなど、多くの人々の居心地良さを考えながら、生活の中で美術が環境を美しく過ごしやすくデザインしていることにも気付かせたい。



公開授業 20 《他者への眼差し、外とのつながり》

## 遊びのデザイン

▶ 中学校 2年生 A表現(2)・(3)ウ

[授業者]

東京都目黒区立目黒中央中学校

榎原 純子

東京都目黒区立第八中学校

奥山たみ恵

[助言者]

横浜国立大学教授 渡辺 邦夫

## ① 研究テーマとのつながり

私たちは達成感や創造の喜びで終わることなく、作品を通じて他との新たな関わり方になるような授業提案をしたいと考えた。まず、はじめに使い手のことを考えた立体造形を頭に浮かべ、授業案を考え始めたが、既存との授業との変化があまりないことに気づき、この機会に美術がコミュニケーションのツールになるような作品作りを目指すことにした。

## ② 分科会の視点から

表現や鑑賞の活動の中に他者との関わりを見出すことは、自己の心情を成長させるだけでなく、周囲との調和や、さらには社会との関わりについて考えさせ、社会の中で生きていく人間として成長する一過程とすることができるのではないだろうか。また、そのような学習を重ねることで、生涯にわたって生活や社会の中で美術の知識や技能を生かしていこうとする姿勢をはぐくむことができるのではないかと考える。身近にある素材やもともとある道具から他と関わる中学生としての遊びを発案することで、造形が単なる形づくりにとどまらず、新たな価値が見いだせるよう導いていくことが大切だと考えている。

ここで考える「遊び」の定義とは、数名の仲間遊ぶ、ひとりよがりにならず、参加しているみんなが楽しいと思える時間を過ごす、ことを考えている。



## ③ 題材の概要

生徒の実態について、日々の授業を通し感じることは、美術科での学習は、絵の描き方・物のつくり方などの技術や知識を学ぶものであるという理解にとどまっており、実生活に結びつくものだという意識が低いことである。実生活に結びつく題材として、今回は「遊び」をテーマとして取り上げることとした。

人と人がつながる方法として「遊び」は、一つの有効な手段である。身近な道具を使ってシンプルに「遊ぶ」行為、その行為を促す遊具の作成を通して、他者を思いやる心や他者とのつながり、広げ、深める題材に取り組みたいと考え本題材を設定した。

本来、子供は遊びの天才である。身近にあるちょっとしたものでも、遊びの要素を見だし、楽しむことができる。また、日頃あまり会話のない生徒でも「遊び」という共通の取り組みを通して、新たなつながりが生まれるのではないかと考えている。自ら遊び道具のデザインをし、実用化の可能性を持たせることで、美術が生活により身近なものであると実感させたいと考えた。

中学生という成長の段階にある彼らがどんな活動を見せてくれるか、不安でもあり楽しみでもある。もちろん「遊び」を考えるだけで終わらせることなく、造形的な要素まで考えさせるよう生徒に様々な刺激を与えていきたい。



## 分科会9 他者への眼差し、外とのつながり

実践発表《連携・つながりのポイント》

### こんな場所にしてみよう！ ～楽しい標識のデザイン～

▶ 甲府市立南学校 2年生 領域 A表現(2)

[発表者]

山梨県甲府市立南中学校

鷹野 敦貴

[助言者]

山梨県北杜市立須玉中学校

鷹野 晃

### 1 提案趣旨

現在、学校における諸活動では、言語活動の充実やコミュニケーション能力の向上させるような活動を取り入れることが求められている。美術科の授業においても、言語活動等のグループ活動を取り入れることによって、子どもの資質や能力をより伸ばしていくことができると考えられる。ここでは、他者への眼差しや他者からの眼差しを取り入れた美術科の一実践について提案していく。

### 2 実践の概要（題材について等）

本校の生徒は、ものをつくる活動には関心をもっており、積極的に授業に参加することができる。一方で、自分の想いを込めてつくる活動に粘り強く取り組むことが苦手な生徒も少なくない。他者からの助言も受けながら、自分の考えた作品をよりよいものへしていこうとする姿勢を育てたい。

今回は、「こんな場所にしてみよう！～楽しい標識のデザイン～」という題材を設定した。本題材では、「学校生活を楽しくさせる」ための標識デザインをする。まず、校内の中で新しいルールを作りたい場所を決める。例えば、「この階段では、たとえけんかをしていても仲良くしてみましょう」や「廊下のこの場所では、誰とも話をしないようにしましょう」等のメッセージが考えられる。これらを基にして、その思いを発信したいと思う場所に飾ることを想定しながら、そのメッセージを伝える標識をデザインする。完成した作品は、生徒や教師等の人々に見てもらえるよう、

校内に一定期間掲示しておく。

本題材の中で、自分のメッセージや標識のデザイン案を考える時間と制作の時間との間に、デザインの検討会を行う時間を設ける。そこでは4人程度のグループになり、お互いの作品について意見や質問を出し合って、アドバイスをし合う。この活動をこの段階で取り入れることによって、まだ下書きの段階なので改善が可能な点、自分の作品が他者から見て、どのように見られるのかということ意識しながら制作に取り組むことができる点において有益であると考えられる。

本校では美術科における評価の4つの観点を、生徒にもわかるような言葉にして掲示する活動に取り組んでいる。生徒がその美術科の授業の中で、どのような力を発揮して授業に取り組めばよいのかを意識させるためのものである。本題材においても、授業の導入部分で生徒と共に確認するようにしている。

### 3 成果と課題

今本題材の授業を終え、生徒達は自分のアイデアと向き合い、他者のアドバイスを受けながらよりよい作品を目指し、何度も試行錯誤を繰り返しながら制作に取り組むことができていた。

美術科における4つの評価の観点を貼り出す活動は、生徒がそれぞれの活動に取り組むにあたって、どのような点を意識すればよいのが明確になり、行動や発言から意識していることを感じる事ができた。さらに、指導する教師にとっても、生徒に身に付けさせたい力を意識しながら声かけができていたのではないかと考える。

## 分科会9 他者への眼差し、外とのつながり

実践発表《連携・つながりのポイント》

### アートで自己紹介

▶ 岩手大学教育学部附属中学校3年生 A 表現

[発表者]

岩手県岩手大学教育学部附属中学校

高橋 知志

[助言者]

山梨県富士・東部教育事務所

小俣 博昭

#### 1 提案趣旨

「自分自身の内面を見つめる」

こういった主題で作品を制作するとき、これまでは「自画像（絵画）」や「ボックスアート」などを題材として設定することがほとんどであった。

子どもたちがそれぞれの美的感性をはたらかせながら、心の交流をすることができたら楽しいのではないか。そう考え、「自分という入れ物の中に入っているもの」をテーマとして箱の中身とパッケージを表現する複合題材を実践してみた。

#### 2 実践の概要

この題材では商品イメージではなく「自分という入れ物とその中に入っているもの」という主題設定で内面表現をさせたいと考えた。

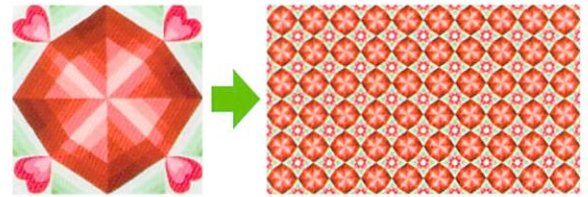


作例：「ココロのオブジェ」

左の作例は、軽量粘土などを中心にして、金属部品や小物、自然物等を自由に組み合わせて作品化したものである。

次に、「ココロのオブジェ」をパッケージするデザインの活動である。

今回は10cm程度の正方形に原画を制作し、それを単位形にして、パソコンソフトで連続模様編集して扱うことにした。出力した連続模様を厚紙に糊付けし、展開図を書いてパッケージとして組み立てるといったものである。



作例：単位形をPCソフトで連続模様にしたもの

ソフトの使用方法がわかれば、単位形のコピー&ペーストで簡単に処理できる。

箱の形は多種多様に考えることができる。子どもたちは自分で工夫して、箱の内側にも色彩を施して完成させたりしていた。



#### 3 成果と課題

- ・同じ制作過程でブックカバーや包装紙など広く題材の応用ができると感じた。
- ・今回は画像処理のソフトを用いたが、後でやってみたら office のワードでも簡単に画像のリピテーションを作ることができた。
- ・完成した作品を相互鑑賞するにあたって、“共通事項”についての学習を積み上げてこないとなかなか生徒の感想を引き出すのが難しい。色や形からの感受を高めていくような3年間の学習計画を立てていくことが、やはり必要である。



公開授業21《身近な生活環境とつながる》

## 心地よい生活環境をつくろう

[授業者]  
東京都足立区立洲江中学校  
志手 伸圭  
[助言者]  
山梨大学 井坂健一郎

▶ 中学校 2年生 A表現(2)(3)、B鑑賞(1)

### ① 研究テーマとのつながり

本題材では、教室の外にある公共の生活環境を教材として扱うことを提案したい。生活環境には、色彩や形、光、材料といった造形要素があふれており、それらは、人の気持ちや生き方に日常的に影響を与えている。造形要素が、人の気持ちや生き方にどのような影響をもたらすのか考えることは、生涯にわたって生活環境の中の造形要素に主体的に関わっていく基礎的な力となるはずである。この題材によって中学生にとっての美術の授業にとどまらない、彼らの生き方に変化をもたらすような、ダイナミックな教育活動を展開したい。

本題材での「連携」とは異校種間との連携とともに、生活環境という公共の場へ繋がっていくという意味での連携を意識し、「成長」とは、単に新しい知識や技能を身に付けるような成長ではなく、生活環境と造形要素の関わりを学ぶことによって、生き方が変容することを「成長」と捉える。

### ② 分科会の視点から

本題材における「他者への眼差し」とは、協働して心地よい生活環境をデザインする過程での、他者の立場や、他者の意見への配慮などを指す。また、「外とのつながり」とは、異校種間とのつながりとともに、教室の外にある公共の場とのつながりでもある。

生活環境とは、個人のものではなく、そこで生活する全ての人のものであり、個人のイメージだけで環境をデザインするものではない。「他者へ

の眼差し」や「外とのつながり」は客観的な視点を基に表すA表現(2)(3)の活動にとって、重要な視点である。この視点を重視するために、本題材では他者の立場に立って考えたり、協働でアイデアを練ったりする場面を設定し、他者への眼差しを意識させることが重要となる。

### ③ 題材の概要

本題材では、生活環境を豊かにしている色彩や形、光、材料が、他者にどのように心地よさを与えるのかを気づかせることに重点をおく。

まず、生徒にデザインの目的と課題を明確に理解させる必要がある。「心地よいと思う環境とはどんなものなのか?」「心地よいと思わない場所には、どのような問題点があるのか?」といったことを考えさせ、彼らにとって身近な環境によって、デザインの目的と課題を具体的にイメージさせたい。

そうして、その環境を教材とし、その中にある課題を目的に沿って解決するためのアイデアを話し合わせる。この話し合いの中で、他者への眼差しや美的な感覚が含まれていくように展開を工夫する必要があるだろう。

そして、本活動を通して、生活環境の中にある造形要素を、他者への気持ちに配慮し、美しくデザインすることで、より心地よい環境を作り出せることに気づかせたい。



## 分科会9 他者への眼差し、外とのつながり

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 他者理解

～そばにいる仲間を知り、共に学ぶこと～

▶ 中学校 3年生 領域 A表現 (2)

[発表者]

北海道札幌市立札幌北中学校

則友 冴子

[助言者]

横浜国立大学

小池 研二

### 1 提案趣旨

ここでしか出来ないこと、私にしか出来ないこと、そして私たちにしか出来ないことがある。大人も子供も日々かけがえのない今を過ごしている。

私は新採用で本校に着任して4年目になる。一筋縄ではいかない生徒はたくさんだ。なかなか作品完成まで辿り着かない生徒たち…なぜ投げ出すのか、壊してしまうのか、否定をするのか…教師として頭を悩ませることはまだまだ多いが、それでもただ「荒れている」という言葉では済まされない生徒の心の在処を模索し、一人一人の心に響かせる授業をしていきたいと思っている。

そのために、生徒が日頃から学級や学年といった集団の中で異なる価値観に歩み寄り、お互いを理解する姿勢を育めるような実践を心がけている。今回発表させていただくのは、決してご覧の皆さんにとって目新しい題材でも無ければ、大きな企画でも無い素朴なものばかりであると思うが、私が自分なりに目の前の生徒の心に寄り添うべく行っている工夫のいくつかである。

### 2 今回発表させていただく実践の一例 木彫小箱

箱の表面に、線を用いた装飾模様をデザインして彫り上げるという題材。ここに、デザインを考える前の発想トレーニングとして、「相手に伝える」「相手を理解する」「相手と共有する」といった他



者との交流の場面を設定した。

まず、生徒に5枚ずつカードサイズの紙を配る。それぞれに「シュッとした線」「ぐるんとした線」「喜んでいる感じの線」など5種類のテーマを順に提示し、生徒自身の直感とイメージでそれぞれのカードに1本ずつ線を描かせる。これを生徒同士ゲーム感覚でトレードし、それぞれ表現もバラバラな5人の5種類の線が手元に揃ったところで、一つの画面に構成してみよう、というお題でワークシートに取り組む。

他者の表現（線）を使って自分の表現（構成）に落とし込むという作業は、他者を尊重しながらも自分で新たな価値を生み出していき、個の良さを見つけていく、という生徒の心の動きが感じられた実践だった。



### 3 成果と課題

「みんなでできた」「自分もできた」「他の人もすごい」といった生徒の実感を大切にしている。大人からすると本当に些細な表現方法や工夫でも、生徒は仲間と共に見つけ、学び、感動することが出来る。そんな環境が当たり前になった時、生徒に人を尊重する心や慈しむ心が育っているのだと思う。集団としての高まりの中でかけがえの無い自分を見出していく。そんな思春期の心の成長の貴重な一瞬を美術で輝かせられていればと思う。



## 分科会9 他者への眼差し、外とのつながり

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 身の回りを見つめ直してみる ～連携で進める美術の時間～

「B 鑑賞 ウ」に主眼を置き、産業界・大学・NPO・地域などの外部教育力を活用する授業を通して、自己肯定感を育む。

▶ 京都市立蜂ヶ岡中学校 2年生 B 鑑賞・A 表現 (3)

[発表者]

京都市京都市立蜂ヶ岡中学校

湯口みゆき

[助言者]

横浜国立大学

小池 研二

### 1 提案趣旨



かけがえのないわたし  
わたしって何だろう  
他者との関わりの中で  
自分をわかり  
自分を伸ばす  
人間として生きるために

身近にあって知らないもの、身近にあって気付かないものの中でも、取り分け「美しいもの」「素晴らしいもの」について多くのことを体感したり、理解することは、その土地に住み、今を生きる人にとって、生きる力の蓄積になると考えている。

その後、同じ土地で生活するにしろ、違う土地で生活するにしろ、多感な中学時代に体験した記憶は、ふとしたきっかけで蘇り、アイデンティティーを実感させるに違いない。

生徒へのアプローチ方法は、身近な「こと・もの」から世界へとつながる流れと、世界の「こと・もの」から自身へとフィードバックしていく流れの2つである。この2つの動線を意識しながら、発達段階に応じた3年間の学習計画を立てている。

授業の中で大切にしているのは「とき」である。目の前の生徒に有効な題材や方法であるかを判断し、改良を加えたり、指導要領に沿いながら、柔軟に計画の順序を入れ替えたりもする。

上記に述べた内容を実践する有効な手段として、外部教育力を活用した授業を行っている。

### 2 実践の概要（題材について等）

『日本の伝統文様（和文様）の鑑賞から、銅板の花器 学年共同制作へ』鑑賞1H 表現3H

- 目標・日本の伝統的な文様の美しさを感じ取りその意味を理解する
- ・母校で末永く使う銅板の花器を、2年生全員でつくる
  - ・匠の技に触れ、京のものづくりについて知る

対象と形態 全2年生232名による共同制作

講師 京都府魁の会（京都府優秀技能者表彰受賞者の会・京都府職業能力開発協会）  
国・京都府の現代の名工 建築板金  
桶本 忠弘さん他、府の名工3名

コーディネーター 京都府魁の会事務局  
小谷 健一さん

鑑賞資料提供

京都府魁の会

鑑賞資料協力

京都精華大学

(有) 京都 掛札

### 3 成果と課題

成果

- ①言語活動の充実
- ②育成学級を含む学年全生徒で制作
- ③伝統と文化の理解

課題

- ①特設時間割や魁の会との調整等の時間
- ②発想や構想の能力
- ③振り返り



# 形、色彩、イメージの 視点を活かして分科会

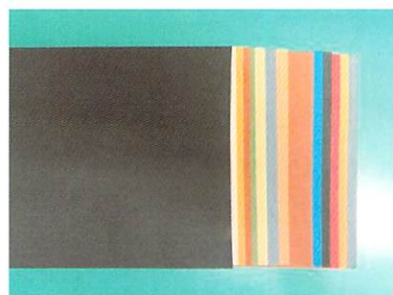
[提案者]  
東京都世田谷区立  
上祖師谷中学校

深見 響子

共通事項を通じて

## ◆大会テーマとのつながり◆

漠然としたイメージを目に見える形におこす、この際に使われるエネルギーは相当なものがある。これは大人であっても子どもであっても変わりはない。本分科会では、この膨大なエネルギーを必要とする発想という作業を、大会テーマである“ダイナミズム＝力強さ、迫力”として捉えることとした。発想は造形美術教育において根幹をなす部分である。それがあってこそ制作であり、鑑賞である。授業においてこの段階で苦勞をされている指導者は少なくないと思う。子どもの頭の中は見えない。しかし彼らはこれまで体験し身につけてきたいくつもの引き出しの中から、一体どれを使おうかと試行錯誤しているはずである。その混乱を整理し集約できるのは、文字であり、色であり、形である。本分科会ではこれらのうち、形、色彩、イメージの視点を活かして題材提案するものである。子どもの発達段階に応じて色も形も扱われ方が異なる。各園・各校種における彼らの経験の積み重ねが、今の子ども作品に如実に表現されていることだろう。彼ら自身がその繋がりに気づける授業を目指す。また、イメージを形成する色・形を通じて、社会と関わりあえることも実感させたい。



## ◆この分科会の概要◆

デザインの基礎として従来から扱われてきた学習を、共通事項の視点で見直すことによる題材提案を目的とする。共通事項を通して考える小中で育む美術の基礎的な造形の力、また、共通事項の視点を生かして効果的に表現や鑑賞の力を育てる工夫を再確認していく。共通事項とは下記の通りである。

学年	共通事項		
	ア	イ	
高等学校	なし	なし	
中学校(全学年)	形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。	形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。	
小学校	第5・6学年	自分の感覚や活動を通じて、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえること。	形や色など造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。
	第3・4学年	自分の感覚や活動を通じて、形や色、組み合わせなどの感じをとらえること。	形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。
	第1・2学年	自分の感覚や活動を通じて、形や色などをとらえること。	形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。



## ◆研究経過・授業研究◆

【共通事項】「ア、形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。」については、1年生で色彩について学習する際、“色の感情効果”を生徒に紹介している。そして、それを用いてこれまでポスターや物語絵、絵本の制作を行ってきた。また、「イ、形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。」では、モダンテクニックのドリッピングをみて何をイメージするか考えさせている。モダンテクニックは単なる描画方法ではなく、それを使うことによって見る人が何らかのイメージを連想できるものとして紹介し、紙袋をデザインさせたりしてきた。鑑賞では共通事項ア・イの両方を行いながら対象となる作品を深くとらえる授業を展開している。

本大会の公開授業で行う題材は、東京大空襲の詩を基に制作をするというものである。前任校では作者の方を学校に招いて発表会に参加していただいた。それ以外にも平和教育として総合的な学習などと様々にリンクできる題材である。詩を読んだ生徒は、色画用紙を用いて、その可塑性を助けに紙だけで詩の内容を表現する。この題材は紙に絵具で描いて絵本にしていたものを前身としている。具象表現から、今回は紙のみを用いる抽象表現に変化させるという試みである。これまでだと、画面の色合いや描く具象形態が似通ってしまうということがあった。しかし今回は、授業時間数を2時間に設定したこともあるが、分科会テーマである「形、色彩、イメージの視点を活かして」を受け、形・色をシンプルに捉えながら自分なりの詩のイメージをクリアに表出してもらうことに重きをおいた。

作品の素となる詩は、実際にあったことが内容になっている。生徒が感情移入しやすいものを選んでいる。詩を読んだ後、何色の紙で、どのように加工して表現するかという発想段階では、イメージを言葉に置き換えてから制作に取り組みせる予定である。いきなり加工に入れる生徒はまず少ない。表現する部分の詩をまずは短い単語に置き換えさせる。その後で実際に紙を加工しながら試行錯誤を重ね、複数の中で最も自分のイメージに近づいたを作品を発表してもらう。それ以外のものについては発想構想および創造的な技能の評価材料として回収する。

紙については、できるだけたくさん色合いを準備し、彼らのイメージにあったものを選べるようにする予定である。紙という素材は様々に加工可能である。折る、切る、破く、畳む、重ねる、穴を開ける、絞る、編む、丸める、こよる、繋ぐ、包む、燃やす、エンボスなど可塑性は非常に高い。小学校の造形遊びにおいて、子どもたちはこれらを経験してきた経験の筈である。この経験を見越した上での教材開発を行っている。この点からみても、他校種の指導内容を理解した上で授業内容を設定していくことは重要であることに気付かされる。



## 公開授業22《連携・つながりのポイント》

## つながる想い

[授業者]

東京都世田谷区立上祖師谷中学校

深見 響子

[助言者]

横浜国立大学

大泉 義一

▶ 中学校 2年生 A表現(2)「想いを色と形に」

## 1 研究テーマとのつながり

子ども(人)というのは不思議である。いつのまにか、色や形に意味を見いだせるようになる。もちろんそこには生活環境を基にした様々な経験と学びがあるわけだが、それがその子という人間を形成していく。美術の授業では、そんな一人ひとりが異なる「自分」を表現できる題材を常に設定していかなければならない。本題材では指導者が共通事項を踏まえ、生徒はこれまで体験し蓄積してきた色と形についての学びを、中学校2年生としての感性と共に活かす活動である。詩の作者の想いやその制作背景を考えること、また生徒の作品を通じて社会に発信できることから、美術のもつ力を実感してもらいたい。そして彼らの情操が深まることを目標とする。

## 2 分科会の視点から

昨今、自己表現を苦手する生徒が多い。もちろん、発達段階においてこれからという状態ではあるが、思ったことを相手に伝えられないというもどかしさから学級や部活動の中でトラブルに発展しているケースが少なくない。国語科の作文指導のように、美術科でも思春期の葛藤を抱える彼らの自己を解放する一助として、色や形の視点から制作や鑑賞に自らを投影させるようにしている。

立体的に写真のように描ける・造れることで満足する生徒も多いが、技法が主役となる制作では彼らの内面をさらけ出すことに直結しない。自分は何ぞそう感じたのか、そしてそれにふさわしい色や形を試行錯誤しながら発見させたい。そこに

は苦勞が存在するが、発表を通じて達成感も感じさせたい。

## 3 題材の概要

授業は2学年の生徒を対象に行う。中学1年生の時に既に色彩の学習を終えている。また、小学校では図工における造形遊びを通じて紙の可塑性を経験してきたはずである。彼らの成長と、これまでの学びの繋がりをいかした授業を行いたいと考える。

地域に関連した題材として、東京大空襲の詩(「独りぼっちの人生」浅見洋子:作)を紙の抽象形態によって表現する。文章として描かれた主人公の心情を読み取り、それを紙の色と、紙の形態に表していく。既習内容を詩に結び付け指導するものである。かつて空襲をうけた墨田区に存在する学校で授業することにより、制作を通じて彼らがそのことを知り、そして彼らの作品を社会に発信することで作者のみならず中学生の想いをプラスして発信できることの素晴らしさを感じてもらいたい。彼らのイメージが目に見える形に変わる瞬間に今からわくわくしている。





## 分科会 10 形、色彩、イメージの視点を活かして

実践発表《連携・つながりのポイント》

中学校美術新任教師へのフォローアップ

### 題材開発、授業評価

▶ 山梨大学と県内中学校の連携の事例

[発表者]

山梨県山梨大学 新野 貴則

[助言者]

東京都教育庁指導部

松永かおり

中学校

#### ① 提案趣旨

県内のほとんどの中学校では、美術科担当の教員は1名しか配属されない。この状況では、新任教師は授業の具体的な相談を誰にもすることができない。また、新任であるため、地域の他の教員との十分な連携も取りにくい状況がある。そこで、すでにつながりのある前年度まで通学し、研究していた大学側との連携を図る。このことによって、初年度の授業実践の充実と教師の題材開発能力の向上等を目指す。

一方、今日の教員養成系の大学には、より実践的な学びが求められている。いわば即戦力になる教員の育成が課題になっている。そこで、新任教師へのインタビュー調査と上記の支援活動に基づいて、大学の授業評価を行う。つまり、大学で学んだことの何が役に立ち、何が役立たないのか、改善点は何かを確認・検討する。

以上の中学校の授業についてのアドバイスと大学の授業評価と改善の双方向的な活動を通して、大学から教育実践の場へのスムーズな移行、転換の実現を中長期的に目指す。

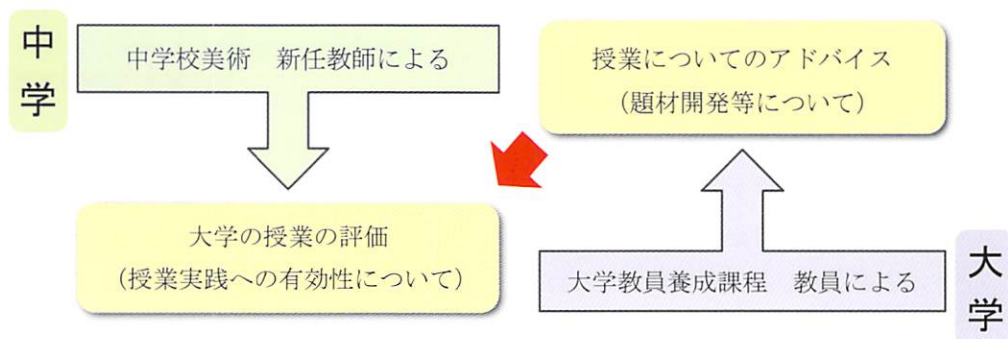
#### ② 実践の概要、課題と成果

##### (1) 中学校の状況と成果・課題

- ・授業は前年度までは非常勤講師による
  - ・美術科担当教員は新任者のみ
  - ・引き継いだ年間指導計画は問題の多いもの（大学で学んだことに基づけば）
  - ・美術準備室が乱雑、必要な材料・用具の不備
  - ・美術の授業に対する生徒の興味・関心は非常に低く、活動は作業的なものになりがち
- これらの状況を踏まえ、題材設定について具体的なアドバイスを行った。ポイントは以下の二つ。
- ・生徒の興味関心を高める仕組みづくり
  - ・現在の準備状況からの可能な題材開発

##### (2) 大学の授業の状況と課題等

大学での必修授業では、主に美術教育に関する理論的な授業と学習指導案の作成を行っている。特に学習指導案の作成では主に細案の作成を行っているが、むしろ、状況に応じた多様な題材開発のアイデアを創造する活動（略案の作成）が求められることが明らかになった。



——連携のイメージ図——

## 分科会 10 形、色彩、イメージの視点を活かして

実践発表《伝える形、伝える色の活動とつなげる

### 文字の形にメッセージを

[発表者]

福井県福井大学教育地域科学部附属中学校

吉田 千春

[助言者]

東京都教育庁指導部

松永かおり

▶ 中学校 1年生 領域 A表現(2)・(3) B鑑賞

#### 1 提案趣旨

書体のデザインは、時代や情報媒体の変化とともに形を変えてきたが、文字を通して誰かに伝えるという目的や、そこに「送り手」「受け手」がいることには変わりがない。伝えたい相手に、より確実に自分の思っているイメージを届けるための文字のデザインについて考える授業を計画した。多くの人に読まれる印刷物の文字に対しては、「読みやすさ」や「美しさ」が求められる。メッセージの内容や伝える相手を考え、書体や文字の配置を変えるなど、レタリングを工夫することで文字によるコミュニケーションが豊かさを増すことを生徒に気づかせたい。

本題材では、代表的な書体の比較鑑賞やその後の創作活動を通して「送り手」としての思いをどのように文字に託していくか、文字の形とイメージとのつながりから追究しようとした。

#### 2 実践の概要（題材について等）

前題材の「鉛筆で描こう」で、生徒は野菜や果物を見ながら自分が感じた特長を表現することに挑んだ。本題材で取り組んだレタリングは、その作品をアピールすることを目的としており、鉛筆スケッチ作品と組み合わせて平面構成した。

生徒は、身の回りの印刷物に用いられている書体について学ぶことから始めた。新聞の活字から代表的な書体（明朝体・ゴシック体）の特徴や使われ方について理解した後、自分が表現したい文案にはどんな書体を用いるとよいかを考えるために、「受け手」「送り手」の立場で書体と向き合った。まず異なる四つの書体（明朝体・ゴシック体・行

書体・ポップ体）でかかれた『幼稚園』という言葉を示し、各書体の印象から、どのような『幼稚園』が想像できるか班ごとに意見を出し合った。

次に送り手として書体の使い方を考えるために、学年全体で話し合って決定した学年目標「僕らの翼」の文字を表現するのにふさわしい書体はどれかを話し合った。書体が変わると受ける印象が違ふこと、伝えたい思いによって選ぶ書体も違ってくることを生徒は感じ取った。

仲間との活動から理解したことを元に自分の鉛筆スケッチ作品の文案と書体を決め、画面構成を考えて作品を完成していった。



#### 3 成果と課題

書体の鑑賞活動は2段階で構成し、一度目の鑑賞は、受け手としてどう感じるかを味わう活動として、二度目は、送り手として思いを伝えるためにどの書体を選ぶかという視点での活動としたが、視点を変えて鑑賞活動を繰り返すことで、生徒の書体に対する関心や理解が深まり、その後の創作活動で表現の幅が広がった。

色彩についての学習をする前の題材であったので、学習内容を形と構成に絞ったことで、色彩からのイメージに左右されることなく、文字の形の重要性を意識することができた。





# 多様な経験から育む 豊かな表現活動

[提案者]

東京都新宿区立新宿西戸山中学校

福地 誠子

キーワード

造形遊びの学びを生かして

中学校

## ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

本分科会では「小学校での造形遊びの多様な素材体験や身体感覚に働きかける活動などを生かした中学校の題材提案」を主な研究内容とした。具体的には「①小中連携の視点を意識した題材の工夫、②多様な材料を生かした題材の工夫」の2つの角度から表現活動を考えた。新宿区美術部会では、小学校での造形遊びの現状を把握するため、区内小学校の横内克之教諭の学校を訪問し、実践事例を中心にその理念や造形遊びの面白さについて話を聞き参考とした。小学校低学年の造形遊びでは「材料」を中心に、中学年では「材料」や「場所」が具体的に示され、高学年はさらに幅が広がり「鑑賞や知識的内容も含めた取り組み」となっていた。こうした段階を踏んだ指導を進め、材料と環境を整えると、児童に説明をしなくても自主的に遊びが始まり、児童には「環境の与え方」が重要とのことである。また、大会テーマとの関係性を考えると小学校でもテクスチャー体験ができる教科は図工以外では少なく貴重な体験活動となっている。「造形遊び」の体験を通して得られた喜びや発見の蓄積によって総合的な「育ち」の力が形成されることが考えられる。そして、それによって形成されたものを引き継ぎ、中学校の共通事項の視点から体験を重ねていくことで、「遊び」から「創造」という成長につながると考えた。本大会のテーマにあるダイナミズムは、まさに素材体験や身体感覚から生まれる造形活動そのものととらえることができる。



## ◆この分科会の概要◆

「小学校での造形遊びの多様な素材体験や身体感覚に働きかける活動などを生かした中学校の題材提案」が本分科会テーマの主な内容であり、小学校の造形遊びとの関連を示すと以下のとおりである。

小学校			
	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
A 表 現	ア 身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に思いついてつくること。	ア 身近な材料や場所を基に発想してつくること。	ア 材料や場所などの特徴を基に発想し想像力を働かせてつくること。
	自然物として、土、粘土、砂、小石、木の葉、小枝、木の实、貝殻、雪、氷、水など、学校や地域の実態に応じた様々な材料。人口の材料としては、新聞紙、段ボール、布、ビニル袋、梱包紙、紙袋、縄や日も空き缶などが考えられる。	木切れ、空き容器、何かの部品などの、切ったり、分解したり、組み合わせたりできるような材料が考えられる。場所とは児童が造形活動を発想する場所のことで、机の下の隙間、植え込みの陰、水溜りのある場所、傾斜地などが考えられる。	特徴とは色や形、質感などだけでなく、切ることや組み立てることができる材料の性質、光や風などの自然の環境人の動きなど場所の様子などを含むものである。

## ◆研究経過・授業研究◆

### 1 小学校を訪問し図工指導について知る・・・6月21日（木）訪問

本区美術部員で新宿区立落合第六小学校を訪問し、横内克之教諭から小学校の造形遊びに関する説明を受けた。その際、図工指導の全体像や実際の作品を見ることができ、研究の参考となった。また、訪問からヒントを得て、「①小中連携の視点を意識した題材の工夫②多様な素材を生かした題材の工夫」の2つの角度から中学校で取り扱う題材を検討した。

### 2 題材および授業内容の検討

小学校訪問をもとに、題材および授業内容の検討に入った。メールでの題材の提案、それに対する意見交換を随時行う。「多様な材料体験、空間や場所・光や風などとの相互作用」に着目し、それを発展させた中学校の題材を工夫することとした。こうした考え方に立ち、導き出したものが「空間を面白く変えよう！スパイダー作戦」という題材である。



### 3 題材の検証のための模擬授業の実施・・・7月22日（月）実施

今回提案する題材について、美術部員の生徒の協力を得て模擬授業を実施し、授業の導入や展開、評価の方法等について検討を加えた。昇降口吹き抜けの空間を生徒の発想のもと、ビニールひもを創造的にからませ、魅力的な空間をつくる活動を行った。完成後には、見慣れた広い空間が、クモの巣のように面白く変化のある空間へと転換した。吹き抜け空間の上と下でテープを投げあったり、偶然引っかかったり、ピーンと張り詰めたり、たわんだり、結んだり、素材の面白さを十分引き出すことができた。見慣れた空間の変化は予想以上の変化を生み、参加した生徒に楽しさと満足感を与える活動となった。その空間を偶然目にした生徒や教員からも「何これ」「びっくりした」などの反応があり、足を止めその空間を鑑賞する姿が見られ、周りの人々を取り込み、刺激を与えることができた。



### 4 授業研究に向けて

中学美術では、美術室での座学が多く、広い空間を使つての表現活動を行う場合は環境の設定が重要になる。あえて「教室」ではなく「吹き抜けがある空間」を選択し、広い空間を変化させることを通しての表現活動を題材に設定した。「空間の変化」にねらいを集中させるため、材料にはビニールひも、スズランテープ、養生テープなどのテープ類に絞った。これらの材料は、加工しやすく、点、線、面の他、事前で見られた様々な表情をつくるのが容易にできる。また、生徒の想像力を刺激し、イメージしやすいようにするため、小学校高学年学習指導要領に習い、いくつかの空間作品を提示するなどの鑑賞を導入とした。また、こうした題材を扱う場合、評価が課題となった。そこで今回は、個々の生徒が面白い、美しいと感じた場所、角度から写真を撮り、それについての意見や感想を記述するワークシートを作成し評価材料とした。このような発展が期待できる背景には、「面白い、楽しい、ワクワクする造形遊び」から「きれい、美しい、過ごしやすい、使いやすいなどを感じる造形活動」を通して、生徒に蓄積された喜びや発見、多様な体験は生涯にわたって生きる豊かさを生み出す要素となると信じている。

### 5 研究活動を通して

新宿区中学校美術部会では、研究の機会をいただき、美術部員全体の課題として研究テーマに迫った。研究の過程では小学校図工の様子を知る貴重な機会を得ることができ、今後の中学校美術の指導に大いに役立つ情報が得られた。また、区立中学校11校中、6校のみが正規美術教員の配置があるという状況下で、美術部員相互の連携が深められたことも大きな成果の一つとなった。



## 公開授業 23 《小学校造形遊びの要素をうけた授業提案》

## 空間を意識した造形活動

[授業者]

東京都新宿区立西早稲田中学校

神野 智彦

[助言者]

東京造形大学

石賀 直之

▶ 中学校 2年生 A表現(1)

## ① 研究テーマとのつながり

中学校美術では、図画工作と異なり、造形遊びという項目は無い。様々な材料体験や、場のかかわりなどの原初的な要素が重要な時期から、作品を構築することができるようになっていくという発達の面や、個別の作品で無いことや、即興性などの要素が、中学校の教科となじみにくいことからであろう。美術教育は教育である以上、当然、造形の原理性や体系性に基づいた指導を行うべきであるが、一方で他者や場、ひいては社会と関わっていくことができる点もまた美術における重要な要素である。今回は、授業のねらいを「空間と関わっていくこと」としながらも、クラスメートとの協働や、日常空間が変化することによって他生徒もその視点に気づくなど、横の関係を触発する要素を取り入れたい。

## ② 分科会の視点から

まず、分科会では小学校における造形遊びの取り組みについて取材を行った。結果、小学校における造形遊びには「多様な材料体験」「空間や場所、風、光などとの相互作用」「他者との共同作業」など、児童の創造性に大きくかかわる要素を多く持っていることが分かった。それらの要素を中学校で展開する場合、単に「友人と取り組んで楽しい」といったことに終わるのではなく、友人の取り組みから触発されるような状況を作る必要がある。



そのためには、授業者が学習のねらいや評価の視点を明確にし、その点を意識した指導を行う必要がある。そこで題材として、造形遊びの「空間や場所、風、光などとの相互作用」「他者との協働作業」といった要素を取り入れたものとして、「生徒が空間に対して意識を持ち、主体的に判断しながら造形活動を行うこと」を重視した題材とした。

また、生徒自身がデジタルカメラによって作品を撮影することによって、生徒一人一人の空間への視点を明確化し、ワークシートと組み合わせた評価を行う。これにより、生徒がねらいをより自覚できるようにし、評価材料としての妥当性を担保した。

## ③ 題材の概要

**ねらい**：生徒が空間に対して意識を持ち、主体的に判断しながら造形活動を行う。

**場 所**：空間の上下を使用できる場所としてランチルームを設定した。

**材 料**：ビニールひも、すずらんテープ、養生テープ、デジタルカメラ

**展 開**：インスタレーションなど空間造形の例を示し、空間を意識して造形活動を行うことを提示。ビニールひもやすずらんテープを空間に張り巡らせていく。様々な視点で見ることや、協働を促進するよう注意する。デジタルカメラを使用して、活動を振り返りワークシートにまとめる。

## 分科会 11 多様な経験から育む豊かな表現活動

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 幼稚園・保育園・小学校からの粘土造形の学習経験を生かした題材の工夫

▶ 中学校 3年生 A表現 (2) (3)

「私の器～世界に一つだけの私の形をデザインする～」

[発表者]

岐阜県多治見市立多治見中学校

佐々木和哉

岐阜市立境川中学校

林 徳和

[助言者]

東京造形大学

石賀 直之

#### 1 提案趣旨

岐阜県の中学校美術科では「心をえがく色・形」を研究主題に掲げている。子どもの「心」をとらえ、「心」の変容を生み出す題材の開発、指導の在り方を研究し、実践している。

美術の学習を通して多様な経験を重ねることで、子どもたちの「心」は深化するものと考え。そのためにも、全ての子どもたちの経験値を高めるための表現活動や鑑賞活動をすることが、私たち美術教師の使命だととらえている。

「心」が深化した時、子どもたちは、これまでとは違った表現ができるようになる。自身の経験をもとに新しい発想をしたり、高い表現力を発揮したり、自分の価値観で感じ取ったことを語ったりできるようになるのである。

#### 2 実践の概要

本題材は、義務教育最後の粘土造形として位置付けている。

本校の所在する多治見市は、古くから焼き物の町として知られており、焼き物は、地域の伝統文化、地場産業として根付いている。こうした点からも、多治見の子どもたちが粘土を素材とした造形学習をすることは、地域の文化に対する理解を深め、地域を愛する心情を育む上で、大切な経験となる。

こうした背景もあ



り、本校の生徒は、幼稚園・保育園・小学校での遊びや学習を通して、毎年、焼き物の粘土に触れる体験をしてきた。本題材は、これまでの学習経験と知識・技能を活用して表現するものである。そこで、表現技能の定着よりも、豊かで、美しい形を発想し表現することに、重点を置いて指導した。

これまで生徒は、美術の学習を通して「みる力」を豊かにするための経験を数多く積み重ねてきた。それぞれの経験を通して発想や表現の材料となる素材を集め、取捨選択してアイデアを発想する。そうすることで個々の生徒の中に育まれた美意識が生かされた、独特な形が表現された。また、一人あたり5kg程度の粘土が使えるように準備することで、生徒の発想を十分に表現させられるようにした。



#### 3 題材の概要

幼・保、小学校からの、学習経験を系統立てて整理することで、指導内容を焦点化した題材設定ができた。しかし、焼き物の文化は非常に深い。さらに中学校でも造形遊び的な時間を設定し、素材のもつ可能性について感じたり、知ったりする取り組みを積極的に行いたい。



## 分科会 11 多様な経験から育む豊かな表現活動

### 実践発表《連携・つながりのポイント》

#### 小中学生の交流、共同作業を通して、コミュニケーション能力、思いやりのことを高めたい。

- ▶ 熊本市立城北小学校 特別支援学級小学5年生  
熊本市立清水中学校 特別支援学級中学校1年生  
A表現(1) (共通事項)(1)

[発表者]

熊本県 熊本市立城北小学校

宮尾 有

[助言者]

東京造形大学

石賀 直之

### 1 提案趣旨

他の人々とのコミュニケーションをとれるようになること、自分に自信を持つことは重要な課題だ。自分で生活したり、学習したりできるようになるために必要な能力だからだ。小学校の児童と中学校の生徒と一緒に学ぶことで、なにか成果が得られるのではなかろうかという期待を持ちつつ、今回の取り組みにチャレンジした。

異年齢集団と一緒に制作に取り組む中で、お互いに手本を示したり、手助けしたりして、自己有用感を味わってほしいと願った。また、制作活動の中で友達との関わり方、色の組み合わせ方や色の美しさに気づくこと、協力してものを創り出す楽しさや達成感を味わうことを陶冶するためにこの題材を設定した。

### 2 実践の概要 (題材について等)

(1) 自分たちの地域にある自然あふれる八景水谷について考えた。慣れ親しんだ緑、水、生き物の様子から色や形を感じ取り、意見を出し合った。  
(2) 考える段階で出た色や形のアイデアを念頭に段ボールにローラーを使っていろいろな色を描



いた。グラデーションを楽しんだり、手で描いたり、足でスタンプしたりした。思い切り全身を使って色

を楽しんだ。おもしろそうだなと思ったら、まねしてみたり、一緒に色をつけたり等、熱中して楽しく活動に取り組むことができた。

(3) みんなで協力して、水や生き物を主題にした壁画を制作した。前時に着色した段ボールを利用した。いろいろな色



に着色された紙をコラージュして、長い壁画を作り上げた。切り取って形を作り出し

たり、貼り付けたりした。のりをつけたり、はさみを貸し合ったりと協力する姿が見られた。できあがっていく過程で、「きれいだね。」とか「見て、見て。」と声を掛け合う様子もしばしば見られた。

(4) 小学校、中学校、公民館等に掲示した。作品が美しく仕上が

り、地域に喜ばれたことは。子どもたちの自己肯定感を高める取り組みに結びついた。



### 3 成果と課題

みんないきいきと楽しむことができた。基本的な交流の形を他の取り組みにも応用できれば、更に可能性が広がると思う。

児童生徒一人一人について、授業の流れについて事前にしっかり共通理解を図ることでスムーズに取り組めた。行事や児童生徒の健康状態は小中、そして個人で異なり、恒久的に取り組むには難しいところもあるが、子どもたちの成長のために機会を見ながら、できることをできる時に楽しんで取り組んでいきたいと思う。





# 高等学校

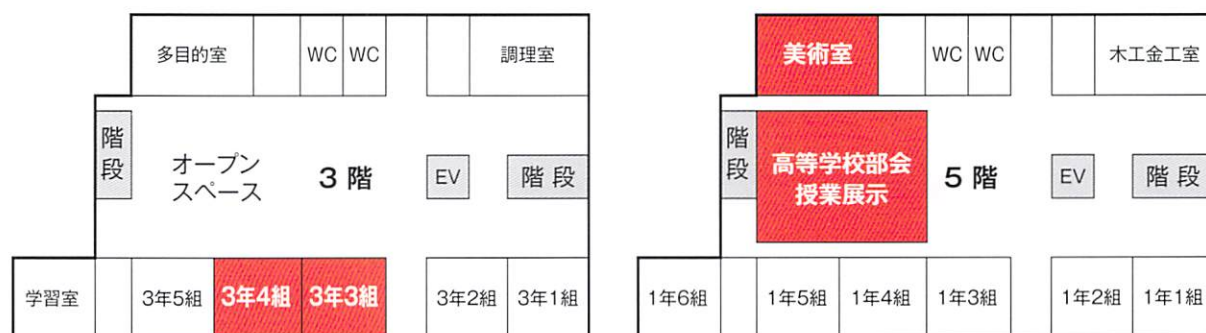


# 高等学校 時程・会場図・発表者一覧

## 時程

9:00	9:40	10:30	10:40	12:10	13:30	14:45	15:00	16:50
受付	公開授業	研究協議	昼食	実践事例発表 (秋田県)	休憩	パネルディスカッション	閉会	

## 会場図



## 発表者

9:40～10:30 公開授業

「美意識を探る」…………… 3階 3年3組教室 奥田 陽子 (東京都立世田谷泉高等学校)

「文字の表情を読み解く」…………… 3階 3年4組教室 甲斐 健太 (東京都立浅草高等学校)

10:40～12:10 研究協議 …………… 5階 美術室 東京都高等学校美術工芸教育研究会 研究部

13:30～14:45 実践授業発表 …… 5階 美術室

「62のオリジナル題材開発」…………… 黒木 健 (秋田県立西目高等学校)

## パネルディスカッション

15:00～16:50 …………… 5階 美術室

このパネルディスカッションは、高等学校部会のテーマ「社会へつなげる」によってつながる午前中の2つの研究授業、午後の実践発表を受けて、「創造的な生活者を育てる造形美術教育」のあり方をパネリスト、参加者の皆さまとご一緒に考えていこうとするものです。

## 授業展示

9:00～16:50 …………… 5階 オープンスペース

東京都高等学校美術教育研究会では、この大会に臨み、研究会全員で授業へのこだわりを持ち寄り、テーマを絞り込み、それを研究授業者の問題意識に落とし込み、実験を繰り返しながら、みんなで授業を練り上げてきました。その出発点となった、部員それぞれがこだわる授業について展示します。



# 高等学校部会 講師・助言者・パネリスト紹介

## 分科会講師・パネルディスカッションモデレーター

**大坪 圭輔** (おおつぼ けいすけ) 武蔵野美術大学教職課程研究室教授

武蔵野美術大学大学院（修士課程）造形研究科美術専攻油絵コース終了。

美術科教員として、昭島市立清泉中学校、東京都立田柄高等学校、東京大学教育学部付属中等教育学校に勤務の後、武蔵野美術大学教職課程研究室教授として在職中。現在、同大学理事、学長補佐。（公社）日本美術教育連合理事・（公財）教育美術振興会評議委員（財）画像情報教育振興協会委員・美術科教育学会員・国際美術教育学会（InSEA）会員・中学美術科教科書編集委員会著作代表・受賞歴（財）日本教育研究連合会教育研究賞〔2005年8月〕・研究領域 造形美術教育実践研究

## 分科会助言者

**鈴木 斉** (すずき ひとし) 帝京科学大学こども学科・非常勤講師

西多摩地域の公立中学校美術科教師を33年間勤め、2010年退職。中学校では様々なキャリア教育に携わり、出会いや体験の場をコーディネートしてきた。現在、各地で図工・美術の実技研修や講座、研究会・研究授業の講師として活動中。外部から図工・美術の教育現場の支援活動をしている。「しろひげ Nature Art Work Shop」を主宰。

**西尾 隆一** (にしお りゅういち) 熊本県熊本市立藤園中学校教諭

熊本市立中学校に勤務。ITを使用した鑑賞教育に力を注いでいる。他に先駆け、全国的な美術研究関係者のネットワーク Zenzo-Art を立ち上げ管理人を務めている。また児童・生徒作品約一万点の作品データベースや授業実践集を集めた Web こども美術館は、全国の図工・美術の教育情報を共有する貴重な場となっている。

## パネリスト

**黒木 健** (くろき けん) 秋田県立西目高等学校教諭

平成3年に秋田の県立高等学校に採用（現在秋田大学大学院に内地留学中）。「普通の生徒への 普通の物を使った 普通ではない授業」をモットーに60を超えるオリジナル題材を開発し、数多くの大会、学会で発表している。高等学校学習指導要領の展開芸術科〔美術、工芸編〕（明治図書200年）執筆。高等学校美術教科書ならびに教師用指導書著者。第62回読売教育賞 美術教育部門 優秀賞受賞。

**小野征一郎** (おの せいいちろう) 東京都千代田区立九段中等教育学校教諭

2年間の非常勤講師も含め、美術科教員として17年目。現在、中学校2年生の担任。九段中等教育学校の落合良美教諭と共に模写や鑑賞等の実践を様々な場で発表してきた。NHK高校講座美術や美術出版社の鑑賞カード、光村図書出版「美術準備室」等に掲載されている。平成23年度から東京都高等学校美術工芸教育研究会の事務局長在任中。

**西尾 隆一** (にしお りゅういち) 熊本県熊本市立藤園中学校教諭 <前掲>

# 社会へつなげる分科会

[提案者]  
東京都美術・工芸研究会研究部

## キーワード

自然に表出する自分

[講師]  
武蔵野美術大学教授

大坪 圭輔

## ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

生徒の未来の「成長」を考える上で、生徒の過去を無視することはできない。生徒がどのように学び今があるのかを理解することはとても大切である。その上で生徒一人一人が抱く未来へのイメージを捉え、生徒の学びに美術・工芸教育が積極的に関わる必要性を感じている。

生徒の「成長」の先には「社会」という存在がある。我々は、美術・工芸教育を通して、本来的に生徒を「社会へつなげていく」役割があるだろうという思いに達し、「美術・工芸教育と社会を結ぶ」を研究テーマと設定した。そして、美術・工芸教育だからこそできることは何かということ「題材開発」を試みることで研究を行った。

本大会では、中学生に対して授業をする機会を得た。今回はこの研究で開発した新しい「題材」を改めて中学校の授業として考え直した授業を行いたい。高校の授業として構築した内容を中学校の授業として再構築する際に高校生と中学生の成長の違いや学びの質の違いについて高校の教師が考えることにより、他校種との連携に本当に必要なものは何かが見えてくるのではないかと考える。

また、そこで改めて出た課題について、中学校の先生方と共に中学から高校への連携について話し合いたい。

## ◆この分科会の概要◆

「社会へつなげる」ということを考えたとき、生徒が「自分の感じ方や考え方、存在を認めたくて、他者とつながっていくことができる」ように学びを構築したいと考え、題材の開発を試みた。「自分」を認め「他者」とつながるためのアプローチとして、授業内の表現活動や鑑賞活動の中で「自然に表出する自分に気付く」ということを軸とした。私たちは、「自然に表出する自分」を、既成概念と結びつきやすい言語化されたイメージではなく、言語化以前の無意識から表出する自分の感覚と捉え、この感覚を洗練し、研ぎ澄ませることで、見えてきた自分や他者を発見する活動にしたいと考える。

また、本分科会の午後の部には、「生徒の創造性」と「(教師)自身の授業創造性」を軸に多くの意欲的な授業を開発されてきた秋田大学大学院(秋田県立西目高等学校教諭)黒木 健先生のお話を聞き、パネルディスカッションをする機会を得た。

黒木先生と我々の授業開発へのアプローチにおける視点について考えながら、生徒の成長にとって欠かせない授業の在り方について共に考えていくことができるような場にしたい。



## ◆研究経過・授業研究◆

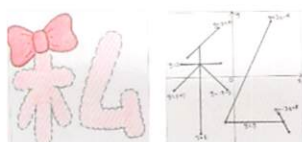
これまで以下のように②～⑦を含む9パターンの授業を3校の高校と2校の中学校で実施した。  
本大会では、⑤～⑦を取り上げ、研究授業を行う。

### ① 題材提案「文字」

私は文字のデザインにとっても魅力を感じます。意味を伝えるシンプルな記号である文字ですが、そのカタチによって同じ文字にも様々なイメージをもたせることが可能です。そのデザインの中には宇宙さえ感じることができるように思います。(研究部教諭)

この提案から始まり、我々は、「文字」を使った授業で、「自分」に気付く活動ができないか考え始めた。

### ② 「私」という漢字一字で「私」を表現する。(高校1年生対象)



自分のイメージを文字に表現することは楽しんでいた。しかし、



自分のイメージを作品に表現するのではなく表現しやすい形に自分を当てはめてしまうのではないかと

### ③ アルファベットに形容詞をつけて、表情のある文字をデザインする。(高校2年生対象)

同じ文字でもデザインによっていろんな表情をもたせることができるということを学んで欲しい。大人っぽいA、スポーティーなAなどを線の太さや長さ角度や傾きの違いで表現する。

もっと微妙な変化で表現が変わることや自分や他者の形容詞に対するイメージに気付かせたい。

### ④ 模擬授業(東京都美術・工芸研究会メンバー及び他校種交流会参加者対象に模擬授業を実施)

～なA(善と悪)対照的な二つの言葉でAをデザインする。それらを集めて形状上の特徴を示す2本の軸の座標上で分類配置してみる。

善と悪のイメージが固定化しすぎているため自分らしいイメージを引き出すのに適さない。

### ⑤ 「アルファベットに表情をつけてみよう」(高校1年生対象)

導入: 「A」の活字10体を形の特徴(比率、太さ、カーブ、太さ)などで表を使って分類する。

制作: 女性的な、現代的な、陽気な、大人っぽいの4つのイメージから抽選で決まった言葉のイメージの「A」を制作する。

鑑賞: 言葉ごとに集まり、導入で使った表に分類する。

自分や友達のイメージは、一般的に共通に抱くイメージの中にある。もしくは、まったく違うイメージの抱き方だ。自他の差異に気付く。

### ⑥ オリジナルなAラインにこだわろう(中学1年生対象)

条件に従って様々な「A」を練習



### ⑦ 「友達のオリジナルAから続きのBを作ろう」(中学1年生対象)

こだわりを探れ → 自分の造形的なこだわりに気付く

公開授業《連携・つながりのポイント》

## 美意識を探る

[授業者]

東京都立世田谷泉高等学校

奥田 陽子

[助言者]

帝京科学大学

鈴木 斉

▶ 中学校 3年生 A表現(1) B鑑賞

## ① 研究テーマとのつながり

自分がどんなこだわりをもって制作したか、どんな形を美しいと感じていたか、それは少し大きな言葉で言えば、個々の「美意識」と言えるだろう。そのように作品から表れる無意識の「自己」を探ることが今回の研究のテーマである。

これまでも自己を探る様々な授業を実践してきたが、その中で得た課題は、心身の発達段階として、他者を意識し、自意識を強くもつ中高生では、「自分は〇〇が好きだ」「このような人間だ」と生徒が自らを設定して制作を行ってしまい、表現が表層的になってしまう傾向にあるということだ。そこで今回は、自己を「表現すること」ではなく、表現の中から「発見すること」に主眼を置いた授業を提案する。

社会へ出るときに他者とのかかわりは欠かせない。簡単に言葉にすることはできない、美術だからこそ探ることのできる繊細な固有の感性について、授業を通し、他者との違いを感じ、または共感しながら、考える機会としたい。

## ② 分科会の視点から

「文字」はシンプルな形態である分、その太さやカーブなどほんの少しの違いで全く違う印象になる。そのような繊細な「形」に宿るイメージの違いに感性をはたらかせ、そこに表れた自分自身というものについて考えるため、「文字」は適した題材であると判断した。今回は基本的な「A」の形態を自分なりに美しいと思う形へと変形させ、そこに表れた自らの発想の視点や形へのこだわりについて分析、再発見する事を目標とする。

その方法として私たちが考えたのは、はじめに生徒が制作した「A」の続きの「B」を別の生徒が制作することである。「B」の文字を制作する際、「A」の文字はどのような点にこだわって制作されたのか、制作者の表現の意図を読み取り、その要素を活かすことを大切にする。



↑オリジナルの「A」の制作。



↑右の2つが、左の「A」の続きの「B」。

「B」制作時には、他者の制作した「A」の文字を分析しながらみることで、より深い他者作品の鑑賞ができる。また最後には、自分の制作した「A」の続きの「B」を鑑賞することで、自分の表現の意図や工夫が他者にどのように伝わったのか、そこに表れた自己を改めて確認することにつながる。

今回の授業は、作品を通してお互いの感性を交流させ、その違いに気づき合うことで、「自己」と「他者」について発見し、理解する新しいきっかけになるのではないかと考えている。



公開授業《連携・つながりのポイント》

## 文字の表情を読み解く

▶ 中学校 3年生 A表現(1) B鑑賞(1)

[授業者]

東京都立浅草高等学校

甲斐 健太

[助言者]

熊本県熊本市立藤園中学校

西尾 隆一

## ① 研究テーマとのつながり

成長段階において自己と向き合い理解すること、また同時に他者と向き合い他者を理解することは、社会とつながるステップとして欠かせない。生徒一人ひとりが段階を追い、社会で生きるのに必要な力をつけるためには、美術ではどのような授業が可能だろうか。

社会には文字が溢れ、文字は双方の意思を図るコミュニケーションツールとして大きな役割を果たす。文字のかたちや大きさ、色彩、様々な言語の字体からは、非常に微妙なイメージを感じ取っているはずである。

今回、互いに創意工夫した繊細な文字の表現の違いを分析し、読み解くことで、自己と他者理解を図り、社会とのつながりを見出す心を育てたい。

また、題材に文字を使うことは「私たちが普段使用している『文字』でも自己表現が可能である」と発見でき、絵画や立体などの表現を苦手としている生徒でも表現に取り組みやすくなる。題材に用いるアルファベットは「文字」の中でも、シンプルでかたちとしても扱いやすいため、ほんの少し形態を変化させることで、表情を変えることができるという理由で選定した。

## ② 題材の概要

表現活動の前に10種類の「A」を用意し、かたちの違いや特徴に気付かせる。個人の表現活動では「A」に「イメージするある言葉」《女性的な》《現代的な》《陽気な》《大人っぽい》を組み合わせ文字に表情を持たせる。同じテーマ

で描いたもの同士が集まり鑑賞する。グループ活動では様々な「A」のかたちを、比率・太さ・先端やカーブなどの違いで分類し、文字の持つ印象や共通点の客観的な分析を試みる。制作時におけるテーマから広がったイメージや、かたちに対するこだわりなどを話し合う中で、自他の相違に気づき認め合い、他者理解が深まる。

言葉にならない(言葉にできない)ことを表す造形活動においては、表現された結果だけに目を奪われがちである。しかし、どのように発想し、意識したか、また無意識に他者に伝えたかったことは何かを考察し、そしてその表現に至った工夫や心情の変化、制作過程を話し合い、共有することで、他者とのつながり表現を豊かにしていくことだと考える。



【左図】個人制作した「イメージするある言葉」の「A」を、同じテーマのグループで分類した図。

【右図】グループで話し合い、他者の意見を聞いて気付いたことや考えたこと、また分類して気付いたことや考えたことをまとめ、グループごとに発表する場面。

## 分科会12 社会へつなげる

実践発表《連携・つながりのポイント》

### 62のオリジナル題材開発

▶ 学校 1～3年生 領域 全領域

[発表者]  
秋田県立西目高等学校

黒木 健

[助言者]  
帝京科学大学

鈴木 斉

#### 1 提案趣旨

高校美術では「生徒の心の美術離れ」という深刻な問題を抱えています。(2001年、2006年ベネッセ教育研究開発センター調査より)

その改善策として考えているのは社会とつながるような「題材開発能力向上」、または美術教師の「授業の創造力向上」です。

これまで私たちが是として捉えてきた授業題材や美術教師像について謙虚に問い直し、2%の美術の専門の道に進む生徒からも、98%の普通の生徒からも必要だと言ってもらえるような、そんな授業づくりをみんなで本気に考えていきたいのです。

#### 2 実践の概要

教員に採用されてから22年間、「オリジナル題材の開発」を常に考え実行してきました。自分自身が過去に経験した授業や、他人が行った授業コピーするのではなく、その時々時代の背景(文化)や環境、生徒の気質やつぶやきから題材を開発してきたのです。近年は年度当初の生徒アンケートから題材を考案しています。その数は60を超え、現在も増え続けています。

もちろん新しく作ればいいというものではなく、そこには以下のコンセプトを設定しています。

「普通の生徒への 普通の物を使った  
普通ではない授業」

そしてそのコンセプトを実現させるための7つのキーワードを、1. ユーモアや驚き 2. オリジナル 3. コンセプト 4. 生活密着 5. 現代美術 6. 映像視聴能力 7. 批判的解釈能力 と設

定しています。

特に「4. 生活密着」は社会とのつながりを意味しています。生徒にとって自分と美術と社会とのつながりを実感できる題材だからこそ「やってみよう」という気持ちが起こると考えるからです。

60を超える授業実践の結果と共に、授業を受けた生徒の言葉を一冊の実践集としてまとめ、インターネット上に誰でも自由にダウンロードできるようアップしています。これは造形作家に例えるならば社会にむけての「展示」にあたる公開・交流行為とも言えます。もちろん学校祭や地域の場においても授業紹介展を行っています。題材内容が社会とつながると共に、授業報告も社会とつながるようにしています。

<http://www.kurokuro.com/HUB/kk.html>

【実践集がアップされたサイトのURL】

#### 3 成果と課題

授業内容を社会に公開していくためには自信がないといけません。そのためには授業研究を十分に行う必要があります。そして公開することで感想や意見と共に様々な授業実践の情報も入ってくるようになりました。これらによって人とのつながりは広まり、引いては生徒が満足するような授業ができるようになってきたと感じています。

美術教師が変わることが「生徒の心の美術離れ」を食い止める唯一の方法だと思うのですが、なかなか現場の美術教員の意識改革が図られないことを課題として挙げたいと思います。



# 特別支援学校



# 特別支援教育分科会

[提案者]

東京都立府中けやきの森学園

石丸 良成

## キーワード

感覚を拓き感性をみがく、ダイナミックな活動が人間の成長の基になる

### ◆大会テーマとのつながり◆ ※「造形美術教育のダイナミズム ～成長と連携～」

障害のあるなしに関わらず、一人一人が特別な感性を持っている。障害のハンディーがあっても、全身の感覚器を総動員して人や物や自然や環境を感知している。それぞれの心や記憶の貯蔵庫に貯えられている。人間は本質的に創造的な欲求を持っているので機会を与えられれば、「自分の世界を表現する」ことができる。視覚の障害では、色を認識するのは困難なことだが、色彩を肌で感じたり、花の香りや植物の味、音楽や自然の諸現象など、色は感性の発露である。聴覚の障害では、瞬間的な残像の描写や形態の分析などは得意だが、ことばの微妙なニュアンスが伝わりにくいので、情報が観念的になりやすい傾向がある。河原の自然石や木に自由に描く課題では、自然に触れた喜びで目を輝かせた。知的障害があると発達の遅れがあり、言葉の表出が狭く同じ言葉の繰り返しがある。脳の機能は局在しているので、イメージとことば記憶が結びつくには大変な苦勞がある。描画の稚拙さから劣等感を抱き、能力があっても人物画を描けない児童生徒がいた。色混ぜ遊びや音遊びを試み、熱中することで心が解放されストレスが解消した。特定の情報の断片を押しつけるのではなく、自由に創り出せる自己統合的な遊び感覚を通して、心と身体が連結するような課題選択が必要である。言われたことだけをただ受け取るような習慣ではなく、自分で意味のパターンを創造する経験によって、情報をまとめることができる。

新しい自分の世界にチャレンジすることで、技術的な能力も高められる。楽しいことは、時間を忘れ永く続けられる。感覚を拓き感性をみがく、ダイナミックな活動が人間の成長の基になる。

### ◆この分科会の概要◆

特別支援学校造形美術研究会は、東京都特別支援学校文化連盟に加盟している。年間11回の研究会を開催している。池袋の芸術劇場で総合文化祭の造形美術部門展を行い、今年で21回になる。東京都公立学校美術展には、出品希望により参加している。特別支援美術教育研究会は、先の研究会の研究会担当が、全国造形美術教育連盟と東京都教育協議会の窓口になり、東京大会の企画窓口になっている。全造連大会には、平成5年度より参加し校種を超えて交流してきた。

### ◆研究経過◆

特別支援学校造形美術研究会では、夏季実技研修会を5回開催した。様々な素材で、版画や描画、コラージュ、工作などで教材教具の開発をした。ワークショップでは、カリンバやぶんぶんゴマ、セミ笛、アヒル笛など音遊びの教材も製作し、その音遊びの教材で、教師自身が遊びを体験した。東京都総合文化祭造形美術展では、木琴やカリンバ、レインドロップ、ハーブ、マラカスなど、作品が展示されたことがある。音が出る作品は、視覚障害の学校の児童生徒の作品が多いが、音への興味は、聴覚障害も含め皆が持っている。授業で音の感覚にも視点を与えることで、より刺激的な授業が展開するのではないかと考えている。図工・美術で、音遊びアートが拡がり、アートのひとつとして気楽にイメージできることで、音楽や劇やダンスの活動で取り入れられ組み合わせられ展開することを願っている。



## 音遊びアート

[発表者]

東京都府中けやきの森学園

石丸 良成

### ▶ 表現 (1)

#### ① 提案趣旨

音遊びアートによって、人と人がつながり、時と空間に出会います。音色、ハーモニー、アクセント、リズム、軽快なタッチなど、音楽と美術の表現は、共通した言葉があります。楽譜は、図面であり絵でもあります。絵は、図式であり色と形の空間配置で表現されます。言葉の表出が苦手な児童生徒にとって、自分から働きかけるコミュニケーションとして気楽な活動の入り口になります。

自由にやってみて熱中できるものは、聴覚過敏があっても、自分が創り出す音には平気で熱中できます。音を創り出す活動は、共同で注意を共有できるので、人と関わり、つながりが広がります。

#### ② 実践の概要 (題材について等)

運動感覚で描く自由な落書きは、壁や画板に紙を貼ってセッティングします。画面を立てると、



意識が集中し軌跡を追いやすくなり開放的な雰囲気になります。木や竹の棒にスポンジをつけたスポンジ筆をマレットにして、画面を叩いたり擦ったり音を発して描きます。スタンプングしたり、うねる線を引いたり、全身を使った運動で身体のリズム感覚を引き出します。擬音や好きな言葉の刺激を加えてイメージを喚起します。写真は、聴覚が弱いダウン症の女の子が、全身の運動で音を感じて描きました。

音の響きで描くでは、アルミや鉄の金属板にスーパーボールの半丸を下に敷いて位置を調節し響きのよい音具にします。金属板に紙を敷いて、



木の棒にゴムをつけ軍手の先を巻いたマレットを作り、絵の具を付けて叩きます。音の響きに感応して、点と線

で表現します。友達と共鳴して、やり合うと、お互いに影響しあって共演ができます。直に音の振動を感じて、自分の感性でイメージをまとめます。アヒル笛は、友達と音をかけ合いコミュニケーションできます。ブーという音は、可笑しくて笑いを誘います。段ボールに刺しこんで、アコーデオンのように押して身体で音を鳴らしました。太鼓を作り、順番に叩く音おくり、仲間が創ったりリズムを繰り返す、自分のリズムをアピールして打ち合いました。「みかん」「オレンジ」など、言葉をリズムに置き換えて叩き合い、ドラや鐘をいれ、お囃子で大騒ぎしました。昼休みには、アヒル笛を吹いてアピールしたり、太鼓とドラで行進して自分達の存在を主張しました。

#### ③ 成果と課題

人を惹きつける行動は、表現として肯定的に受け取ると気持ちの転換になり、心の色と形がまとまってきます。遊びアートで人と関わることは、共同で行う共有感覚を得ることになります。様々な素材に触れ素材の変化を体験することで感覚が拓かれます。視覚だけではなく聴覚や触覚の体験から得られた刺激や情報は、感覚から自分の感性センスとして研かれます。自分の能力を完全に引き出したときは、「自分もここまでできた」という達成感や充実感が得られます。自由をつくり感性をみがくことで、人とつながることができ





# 大学 · 美術館



# 大学・美術館分科会

## シンポジウム「連携でつくり出す美術の授業」

### ◆大会テーマとのつながり◆

今回、大学部会、美術館部会では、大会テーマを受けて「連携でつくり出す美術の授業」というテーマでシンポジウムを行います。大学にとっては、教員養成課程で重要な子ども理解、教師という職業への理解を深めるためにも現場との連携が必要になります。美術館においても同様に教育現場への理解が無くてはなりません。このような大学、美術館から学校側にアプローチする連携と同時に、現場からのアプローチも求められます。それは、教員の題材開発や授業支援でのアプローチ、また子どものニーズに応じた、美術館の鑑賞キットなどによるアウトリーチ活動などの学習支援。すなわち連携という言葉には、双方向の関わりが存在し、それらを理解した上で初めて連携が両者にとって有意義な創造的な連携になるのではないのでしょうか。

この様な連携の実践は、取り組む学校とそうでない学校とでは大きな差があり、経験のない学校では「知らない」ことが新たな連携に対し足踏みをさせている実態があります。また、物理的な時間確保や、交通手段などの経費の面も大きいでしょう。しかしながら、これらの課題は障害としてあきらめるのではなく、解決すべき課題として捉えていくことが教育に携わる我々の使命だと考えます。子どもの成長において美術が与える影響を鑑み、また、人の一生にどの様に美術が関わっていくかを考えた時、私たちは新たな連携のあり方を創造していく必要があります。

今回6名の大学教員と美術館職員とが、現在取り組んでいる連携事例などを紹介しながら、会場の皆さんからの意見などもいただき、新たな連携をつくり出すアイデアを出していきたいと思えます。この全造連東京大会で連携の種を播いていきましょう。

### ◆パネリスト紹介（音順）◆



#### 伊藤 達矢（いとう たつや）

1975年生まれ。2006年 東京藝術大学大学院芸術学美術教育専攻 修了（博士号取得）。現在同大学美術学部 特任助教。「福島芸術計画× Art support Tohoku-tokyo」（福島県、東京都共催事業 / 2012年～）企画・運営など多くのアートプロジェクトを手掛ける。現在、上野公園に集まる9つの文化施設が連携する「Museum Start あいうえの」の企画・運営及び、東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」マネージャを勤める。





### 亀井 愛 (かめい あい)

1979年生まれ。女子美術大学卒業、成城大学大学院文学研究科博士課程前期修了。公益財団法人横浜市芸術文化振興財団、横浜市民ギャラリーあざみ野を経て、現在、三井記念美術館 教育普及員 (Museum Educator)。学芸員と美術を身近に感じることでできるプログラムの企画・運営・実施。また、教育機関や地域と連携した美術館を拠点とする学びと実践の場づくりに取り組んでいる。



### 原瀬 裕孝 (はらせ ひろたか)

1959年福島県生まれ。千葉大学工学部画像工学科卒業。大日本印刷 (DNP) 入社後各種マルチメディア開発を経て、大型展博やミュージアムの展示映像の企画・制作に従事。2006年に開始したルーヴル美術館とDNPの共同プロジェクト「ルーヴル - DNP ミュージアムラボ」において、美術館のアウトリーチ活動としてのICTを用いた鑑賞ワークショップを展開。近年では、タブレット端末を使った出張授業を、中学校を中心に行っている。



### 平谷 美華子 (ひらや みかこ)

東京富士美術館学芸員。教育普及、写真・近現代美術担当。「ケーナンとことばの森」展 (2010)「ふくしま文化復興元年 愛、命、絆…洋画の巨匠たち～東京富士美術館名作100選～」展 (2012)、「100年前の現代アート“アーモリー・ショー1913”の作家たち」展 (2013) 他企画。2012年度より八王子市内の小中学校を対象に団体鑑賞のためのバスを運行。



### 三澤 一実 (みさわ かずみ)

1963年長野県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。埼玉県の公立中学校教員、埼玉県立近代美術館、文教大学教育学部准教授を経て、現在、武蔵野美術大学教授。研究テーマは美術教育。鑑賞教育。学校、社会との連携活動の研究。現在は「旅するムサビ」で、全国各地の学校や教育委員会、大学、美術館などで鑑賞ワークショップなどを展開。



### 米徳 信一 (よねとく しんいち)

1964年愛知県生まれ。武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。研究テーマは映像メディアを中心としたイメージの生成とリテラシー。戯曲や文学をベースとしたアニメーション作品の制作をとおして、言語表現におけるナラティブを映像化する的方法論を模索。また、現在はピクシレーションや1カット映画などの原初的な映像表現を中心にした授業を、小・中学校と連携して行っている。

公開授業《連携・つながりのポイント》

[授業者]

武蔵野美術大学芸術文化学科

## 時間を操る

米徳 信一

▶ 中学校 3年生 A表現(1)

### 1 講師紹介



1964年愛知県生まれ 武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。研究テーマは映像メディアを中心としたイメージの生成とリテラシー。戯曲や文

学をベースとしたアニメーション作品の制作をとおして、言語表現におけるナラティブを映像化する方法論を模索。現在はピクシレーションや1カット映画などの原初的な映像表現を中心とした授業も小・中学校で行なっている。

### 2 授業概要

映像はその誕生以来、他のメディアに比べ短期間で多様な表現の幅を獲得し、生活の中に様々な形でとけこんでいます。そして映像はその表現特性ゆえに、見方を習わずとも楽しむことができます。その主たる特性に、視覚的に伝達される「動き」と「時間」があります。

今回はピクシレーション(人間アニメ)という表現技法を使い、私たちが普段の生活では体験できない時間のコントロールをします。動きのみのシンプルな表現の中に映像の本質を見つけ、映像を読む力をつくるのがねらいです。このピクシレーションは、経験の有無に関わらず直感的にしかも楽しく出来ることが特徴です。表現をより高度にしていくには、コマ数と時間の関係を知る

必要があり、イメージを時間に換算する能力が必要となるのです。その意味では作品をコントロール(演出)することが期待できます。

また、映像は複数人によって制作することが可能です。一つのイメージを作り上げる際、制作のプロセスにおけるイメージの共有(他者との対話や意見交換)は、自己と他者を比較し、より良い物を選び決定する力を養うことにつながります。

### 授業の流れ(50分)

- ・サンプル作品(サイレント&ループ)上映によるイメージの触発
  - ↓グループづくり
- ・トライ1/15枚撮影ループ再生による制作
  - ↓グループ内で作品鑑賞と意見交換
- ・トライ2/枚数制限なしループ再生による制作
  - ↓全体で作品鑑賞と意見交換



### ポイント

- ・ループ映像でサイレントという普段見慣れない映像イメージについて、制作と鑑賞をとおして体験する。
- ・鑑賞を行うことによって、プロセス時の意見交換とは異なる言葉の使い方(批評)を体験する。



公開授業《連携・つながりのポイント》

## 学校をルーヴル美術館にしてみよう

[授業者]

ルーヴル - DNP ミュージアムラボ  
(DNP アートコミュニケーションズ)

原瀬 裕孝

▶ 中学校 3年生

### 1 講師紹介

1959年福島県生まれ。千葉大学工学部画像工学科卒業。大日本印刷(DNP)入社後各種マルチメディア開発を経て、大型展博やミュージアムの展示映像の企画・制作に従事。2006年に開始したルーヴル美術館とDNPの共同プロジェクト「ルーヴル - DNP ミュージアムラボ」において、美術館のアウトリーチ活動としてのICTを用いた鑑賞ワークショップを展開。近年では、タブレット端末を使った出張授業を、中学校を中心にしている。



### 2 授業概要

ルーヴル - DNP ミュージアムラボは、多様な技術や手法を活用しながら、より一層豊かな視点を持って美術鑑賞を楽しんでもらうためのプロジェクトです。作品の「見え方が変わる」楽しさを、できるだけ多くの人たちに体験してもらい、見る、知る、感じる、考えるといったプロセスを通して、人と作品との間に新しいコミュニケーションを立ち上げることを目的としています。

今回の授業では、AR（オーグメンテッド・リアリティ = Augmented Reality : 拡張現実）の技術を用いて、学校という日常に見慣れた空間に、ルーヴル美術館の作品を実際のスケールで展示し

てみることを実現します。生徒たちは、タブレットとして記録することができます。この体験を通して、なぜこの作品はこの場所にふさわしいかを考え、普段目にするのが少ない美術作品に興味と関心を抱かせ、作品に対する新たな「気付き」を引き出していきます。作品と「場」、そして「人」との関係をさまざまにシミュレートしてみることで、美術作品を展示するという体験と、それを見る人の立場にも考えをめぐらせていきます。また、他の生徒たちと結果や考え方を共有することで、それぞれの作品に対する見方の共通点や相違点を発見することにもつなげていきます。

### 授業の流れ (50分)

- ・10グループに分ける。ルーヴルの紹介と、今回の流れの説明。タブレットを配布し、その使い方のガイダンス。(10分)
- ・教室を出て、グループで話し合いながら、校内の様々な場所に作品を設置してみる。ユニークかつ効果的な展示3枚をタブレットに保存し持ち帰る。(25分)
- ・その中からベストの1点を選び出し、大型ディスプレイに伝送しプレゼンテーションを実施。他のグループとのディスカッションをおこなう。(15分)



実践発表《連携・つながりのポイント》

## 日本の美 - 金色の光と空間デザイン

[発表者]  
東京都三井記念美術館  
東京都美術館

亀井 愛  
熊谷香寿美

▶ 中学校 2年生 B鑑賞

### 1 講師紹介

**亀井 愛** (三井記念美術館 教育普及員)  
成城大学大学院文学研究科博士課程前期修了。横浜市民ギャラリーあざみ野を経て、現職。学芸員と美術を身近に感じることのできるプログラムの企画・運営・実施。また、教育機関や地域と連携した美術館を拠点とする学びと実践の場づくりに取り組んでいる。

**熊谷香寿美** (東京都美術館 学芸員)  
一橋大学卒業。昨年度リニューアルした東京都美術館にてアート・コミュニケーション事業を担当。ジュニアガイドの制作や子どもたちのミュージアム・デビューを応援する新規プログラム「あいうえの学校」で、学校と連携した鑑賞授業のコーディネートに従事。

### 2 授業概要

日本の美術館は、広く世界の文化を視野に入れながらも、今や非日常化してしまった日本の美術文化や独自の感性について、文化財を活用しながらを伝えていく大切な役割を担っています。

今回の授業では、身近にある「光」に着目し、日本で古くから用いられてきた光を放つ素材・箔(はく)を体験していきます。箔は金属を薄く延ばしたもので、明るい輝きという素材の特性を活かし、日本では泥、でい すなこ砂子、箔地など、それぞれがもつ視覚効果の違いを意識して活かした様々な作品が制作され、また、その立体的な光の効果

から屏風にもよく使われました。素材の箔を実際に体験した後、箔から生まれる光の空間への効果を体感できる屏風を鑑賞します。素材の体験をしたうえで、作品を鑑賞し、鑑賞体験を言語化しながら意見交換をしてみることで、そこにこめられた意味や、光と空間デザインについて、理解を深めていきます。



尾形光琳作《群鶴図屏風》 \*高精細複製画

### 授業の流れ (50分)

[全2時間。本時は展開1~まとめ]

導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近にある「光」について考える。</li> <li>・日本で用いられてきた光をあらわす言葉を知る。</li> <li>・言葉を箔で表現する→鑑賞する。</li> </ul>
展開1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・屏風ってなんだろう？</li> <li>・屏風の形を身近な紙で体験し構造を知る</li> </ul>
展開2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品を鑑賞する。</li> <li>・日本の美術作品に表された金箔の表現について理解を深める。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が思ったこと。他の人の感想を聞いて感じたこと。もっと知りたいと思ったことをシートにまとめる。</li> </ul>



研究の歩み  
規約  
名簿



# 全国造形教育研究大会のあゆみ

回数	年月	会場	大会主題
1	昭和 23. 10	一宮市	図画工作教育の根本理念の討議と解明
2	24. 10	京都市	図画工作教育振興の具体案如何の協議
3	25. 9	広島市	図画工作における評価の実際
4	26. 10	福岡市	鑑賞教育、全国児童図画工作展
5	27. 10	金沢市	生活と美術、全国児童生徒図画工作・作品展
6	28. 11	大阪市	指導要領の検討
7	29. 8	仙台市	指導要領ならびに指導内容の検討
8	30. 11	東京都	現下の図画工作教育を阻むものは何か、改善策
9	31. 8	札幌市	造形教育において、つくりだす力を養うにはどうすればよいのか
10	32. 10	松山市	現代日本の図画工作教育の反省と今後の方向
11	33. 10	長野市	図画工作科の本質を再検討し今後の対策をたてる
12	34. 10	神戸市	図画教育の実情を明らかにし、その新しい建設へ
13	35. 8	神奈川県	生きる喜びの基をつくり出す造形教育
14	36. 11	別府市	いきいきとした生活をつくり出す造形教育
15	37. 10	富山市	人間づくりの造形教育を確立するために
16	38. 8	東京都	科学と美術教育、伝統と美術教育、原理と方法
17	39. 11	宇都宮市	造形教育の実践をとおして、豊かな個性を育てる
18	40. 8	東京都	第17回国際美術教育会議東京大会の内容に包含されておこなわれた
19	41. 10	盛岡市	たくましい創造力を育てる造形教育の実際
20	42. 10	新潟市	人間形成をめざす造形教育の現実的課題と解決策
21	43. 8	高知市	造形教育の今日的課題を究明し、ゆたかな感性とたくましい表現力を育てよう
22	44. 8	那覇市	造形教育を風土の中でどのようにいかにするか
23	45. 10	秋田市	ほんとうの美しさをつくり出す授業をもとめて
24	46. 10	静岡市	たくましい創造力を育てる造形教育
25	47. 11	東京都	未来を指向する美術教育は何か
26	48. 10	京都市	わが国の造形教育の今日的課題は何か
27	49. 10	和歌山市	子どもと共にあゆむ造形 —ゆたかな発想をもとめて—
28	50. 10	山形市	ゆたかな心情とたくましい創造力を育てる造形教育
29	51. 6	東京都	緊迫した教育課程改訂にどう対処するか
30	52. 7	札幌市	みずみずしい中身でしなやかな子どもを育てる造形実践
31	53. 10	埼玉県	造形教育の本質にせまる実践はどうあるべきか
32	54. 10	仙台市	豊かな創造力を育てる造形活動を求めて
33	55. 7	愛知県	自らつくりだす喜びを育てる造形教育
34	56. 6	長岡市	生きているあかしの表現
35	57. 11	佐賀県	創り出すよこびを求めて —日々の実践の中で、今日的課題を探る—
36	58. 11	東京都	独自性を見なおす —国際的視野に立った発展する美術教育の今日的課題—



37	59. 10	長野県	心おどらせてとりくむ造形
38	60. 10	奈良県	明日に生きる創造力の開発をめざして
39	61. 8	旭川市	子どもの心をゆり動かす造形教育 ーつくる心の拡がりと深まりを求めてー
40	62. 10	千葉県	子どもの心を掘り起こす造形教育
41	63. 11	愛媛県	心ときめき、ひびきあう美術教育
42	平成 1. 8	青森県	子どもの心に創るよろこびをひきおこす造形教育 ー豊かな感性と、うるおいのある表現活動を求めてー
43	2. 11	熊本県	よろこび・いきいき造形教育 ー自己表現に心ふるわせる子どもを求めてー
44	3. 7	東京都	審美教育と英知
45	4. 11	京都府	新たな時代をきり拓く造形教育
46	5. 8	沖縄県	21世紀に向けての造形教育
47	6. 11	神奈川県	いま、さらに 豊かな感性・創造のよろこびを
48	7. 11	長野県	いのちにふれる造形活動 ーつくるよろこび自分らしさの表現を求めてー
49	8. 10	東京都	人間・表現・環境
50	9. 7	東京都	造形美術教育の再創造
51	10. 8	東京都	人間・造形美術・教育 ー造形美術教育の再創造ー
52	11. 8	埼玉県	自分“彩”発見 「自分さがしの旅」をしつづける子どもの造形活動
53	12. 8	静岡県	開く造形教育に 生き生き交流
54	13. 9	北海道	<いま><ここ><わたし>を基軸にして造形の未来を創る
55	14. 8	沖縄県	南風にのせ ! 手・目・心の万人(うまんちゅ)の造形教育
56	15. 11	東京都	「人間・造形・成長」 ー造形美術教育を問い直すー
57	16. 8	福島県	「ほんとうの空のもと ほんものに出会う瞬間」-自分いろの造形活動を求めて-
58	17. 11	神奈川県	つくり続けるよろこび、それは生きるよろこび ~色と形のメッセージIからWEから~
59	18. 11	長野県	私っていいな!! “いろ・かたち”生きあい学びあい
60	19. 11	熊本県	夢と勇気と感性とー 未来を拓く造形教育の可能性を求めて ー
61	20. 8	大阪府	こころの欲びを広げる教育美術のこれからー変えるもの・変えざるもの・教育原理の再構築へー
62	21. 11	千葉県	きらめく感性 ときめく思い うみだせアート
63	22. 8	福島県	「つくる喜び、みる感動!! 子どもの今と未来をつなぐ造形教育」 ~連携を大切にしたいこれからの造形教育を求めて~
64	23. 7	北海道	“わたし”を創る ー 自立と共生の造形教育をめざして ー
65	24. 8	沖縄	- <sup>ティーンズ</sup> 太陽の島から発信する造形教育 -
66	25. 11	東京都	造形美術教育のダイナミズム - 成長と連携 -

# 全国造形教育連盟規約

- 1 (名称) 本連盟は、全国造形教育連盟と称する。
- 2 (目的) 本連盟は、全国造形教育の振興をはかる。
- 3 (事業) 本連盟は、上の目的を達成するために、次の事業を行う。
  - イ 各加盟団体及び各学校種別部会間の研究の交流、その連絡を行う。
  - ロ 毎年1回大会を開き、研究ならびに必要な決議を行う。
  - ハ 目的を同じくする他の国際的機関および国内的機関団体等との研究の交換、その他の連絡を行う。
  - ニ その他本連盟の目的達成に必要な事業を推進する。
- 4 (組織) 本連盟は、各都道府県の造形教育団体をもって組織する。
- 5 (機関) 本連盟に次の機関をおく。
  - イ 決議機関として代議員会
  - ロ 執行機関として本部役員会
- 6 (代議員会) 代議員会は本部役員ならびに代議員を以て構成し、毎年1回委員長の召集により大会会期中に行う。代議員は各都道府県の代表7名とする。
- 7 (本部役員会) 本部役員会は、委員長1名、副委員長3名、事務局長1名、学校種別部長各1名を以て構成し、必要に応じて委員長が召集する。
- 8 (役員の任務) 委員長は本連盟を代表し会務を執行する。副委員長は委員長を補佐する。部長は学校種別に必要な事業を推進する。監査役員は2名とし、会計の監査にあたる。
- 9 (役員の選出任期) 委員長、副委員長、監査委員は代議員の互選により選出し、任期は2ケ年とする。
- 10 (事務局) 委員長のもとに事務局をおく。事務局は事務局長1名と事務局員若干名とし、本連盟の事務及び会計にあたる。
- 11 (経費) 本連盟の経費は、加入団体の負担金ならびに事業収入、その他寄付金をもってまかなう。
  - イ 加盟団体の負担金は、年額1都道府県8,000円(1都道府県内に2以上の加盟団体をつくるときは1団体4,000円)とする。(1998年8月19日、東京大会において負担金額改正)
  - ロ 大会会費は、その都度決定し参加者の負担とする。部会の経費は必要に応じ大会会費は、その都度決定し参加者の負担とする。部会の経費は必要に応じ、別に徴収することができる。
- 12 (規約の発効) この規約は昭和49年10月30日より発効する。平成18年11月1日改正、同日発効。平成19年11月14日改正、同日発効。

## 《申し合わせ事項》

- 1 各都道府県団体に各校種別(保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、特別支援学校)が揃っている場合は、それぞれから代表する代議員7名を限度として選出する。各校種が揃っていない場合は、所属する校種から偏りのないよう選出する。毎年5月末日までに連盟本部に連絡する。代議員は単なる代議員会構成員であるだけでなく、連盟本部を通じて全国諸団体との日常的な研究、交流、運動等の情報交換を行う。(1992年11月18日、京都大会において代議員5名を7名に変更)
- 2 当分の間、都道府県の実績によっては、当該都道府県団体の希望があれば、県内地域、あるいは学校種別団体の全造連への直接加盟を認める。この場合は加盟団体毎に負担金を納入し、代議員は学校種数の人数を選出する。
- 3 副委員長は、各都道府県から全造連全国大会開催地の当該年度代表者と次年度代表者、及び委員長が推薦した者の3名とする。



# 平成 25 年度 全国造形教育連盟本部役員

役 職	氏 名	勤 務 校 地 所 在 地	T E L F A X
委員長	永 関 和 雄	町田市立町田第三中学校 ☎194-0032 東京都町田市本町田 1853 e-mail<j-machida3-p@machida-ky.ed.jp>	042-722-6095 042-721-4386
副委員長	菊 田 寛	墨田区立両国中学校 ☎130-0015 東京都墨田区横綱1-8-1 e-mail<kikuta-hiroshi@sumida.ed.jp>	03-3625-0361 03-3625-0938
副委員長	浅 川 徹	蕪崎市立蕪崎西中学校 ☎407-0043 山梨県蕪崎市神山町鍋山1-1 e-mail<nirasakinishi-jhs@nirasaki.ed.jp>	0551-22-1431 0551-22-2976
副委員長	天 形 健	福島大学 ☎960-1296 福島県福島市金谷川1番地	024-548-8225 024-548-8225
副委員長	鷹 野 晃	北杜市立須玉中学校 ☎408-0104 山梨県北杜市須玉町小倉 200	0551-42-2021 0551-42-2022
会計監査	殿 村 靖 廣	葛飾区立大道中学校 ☎124-0011 東京都葛飾区四つ木 5-22-1	03-3693-3350 03-5698-1764
会計監査	平 田 耕 介	新宿区立愛日小学校 ☎162-0834 東京都新宿区北町 26	03-3266-1604 03-3266-8084
国 際 局	大 坪 圭 輔	武蔵野美術大学 ☎187-8505 東京都小平市小川 1-736 e-mail<cohtsubo@musabi.ac.jp>	042-342-6373 (TEL・FAX 共通)
事務局長	時 任 勝	八王子市立みなみ野君田小学校 ☎192-0916 東京都八王子市みなみ野 4-3-1 e-mail<cabocabo@d2.dion.ne.jp>	042-637-5505 (事務局直通・共通)
事務局	加 藤 幸 子	新宿区立東戸山小学校 ☎162-0052 東京都新宿区戸山 2-34-2	03-3205-9504 03-3205-9487
事務局	菅 原 亮	世田谷区立山野小学校 ☎157-0073 東京都世田谷区砧 6-7-1	03-3417-3322 03-3417-3348
事務局	山 崎 正 明	千歳市立北斗中学校 ☎066-0073 北海道千歳市北斗5丁目 1-1	0123-22-4151 0123-22-4152
事務局	上 野 目 浩 一	港区立六本木中学校 ☎106-0032 東京都港区六本木6丁目8番 16	03-3404-8855 03-3404-8856
事務局	佐 藤 真 理 子	大田区立南六郷中学校 ☎152-0033 東京都大田区南六郷 3-2-1	03-3732-9351 03-3732-9353
事務局	竹 谷 摩 維 子	豊島区立池袋第二小学校 ☎170-0011 東京都豊島区池袋本町 1-43-1	03-3986-7176 03-5951-3901

# 平成 25 年度 全国造形教育連盟 学校種別部長・事務局長

幼稚園・保育園 部 長	横 英 子	淑徳大学 ☎260-8701 千葉県千葉市中央区大蔵寺町 200	043-265-7331 043-265-8310
小学校(部 長) (事務局長)	高橋 香苗	江戸川区立南小岩小学校 ☎133-0056 東京都江戸川区南小岩 4-16-1	03-3657-1565 03-3658-5833
	濱方 克彦	北区立西ヶ原小学校 ☎114-0024 東京都北区西ヶ原 4-19-21	03-3910-5202 03-5567-4525
中学校(部 長) (事務局長)	殿 村 靖 廣	葛飾区立大道中学校 ☎124-0011 東京都葛飾区四つ木 5-22-1	03-3693-3350 03-5698-1764
	伊 藤 範 彦	墨田区立墨田中学校 ☎131-0033 墨田区向島 4-25-22	03-3625-0351 03-3625-0424
高等学校(部 長) (事務局長)	佐 藤 清 親	都立総合芸術高等学校 ☎162-0067 東京都新宿区富久町 22-1	03-3354-5288 03-3354-6322
	小野 征一郎	千代田区立九段中等教育学校 ☎102-0073 東京都千代田区九段北 2-2-1	03-3263-7190 03-3288-3499
大 学 (部 長) (事務局長)	三澤 一実	武蔵野美術大学教職課程研究室 ☎187-8505 東京都小平市小川町 1-736	042-342-9537 (直通 TEL・FAX 共通)
	北沢 昌代	聖徳大学短期大学部 保育科 ☎271-8555 千葉県松戸市岩瀬 550 e-mail<kitazawa@seitoku.ac.jp>	047-365-1111 047-363-1401
特別支援(部 長) (事務局長)	山口 真佐子	都立府中けやきの森学園 ☎183-0003 東京都府中市朝日町 3-14-1	042-367-2511 042-369-8476
	石 丸 良 成	都立府中けやきの森学園 ☎183-0003 東京都府中市朝日町 3-14-1	042-367-2511 042-369-8476
美術館(部 長) (事務局長)	三澤 一実	武蔵野美術大学教職課程研究室 ☎187-8505 東京都小平市小川町 1-736	042-342-9537 (直通 TEL・FAX 共通)



## 25年度 全造連東京大会運営委員名簿

役 職	氏 名	所 属 (25年4月1日現在)	校種
全造連委員長	永 関 和 雄	町田市立町田第三中学校	中
全造連事務局長	時 任 勝	八王子市立みなみ野君田小学校	小
大会会長	菊 田 寛	墨田区立両国中学校	中
大会副会長	大 坪 圭 輔	武蔵野美術大学	大
大会実行委員長	高 橋 香 苗	江戸川区立南小岩小学校	小
大会副実行委員長 (各校種より)	平 田 耕 介	新宿区立愛日小学校	小
	殿 村 靖 廣	葛飾区立大道中学校	中
	香 村 智	八王子市立中山中学校	中
	萩 原 和 彦	町田市立山崎中学校	中
	茜 谷 佳 世 子	足立区立竹の塚中学校	中
	市 川 治 郎	都立田無高等学校	高
	佐 藤 清 親	都立総合芸術高校	高
	石 丸 良 成	都立府中けやきの森学園	特
	三 沢 一 実	武蔵野美術大学	大
	田 村 秀 子	文京区立千駄木幼稚園	幼
	稲 庭 彩 和 子	東京都美術館	美
研究委員長	中 村 一 哉	府中市立府中第五中学校	中
研究副委員長	田 中 明 美	品川区立立会小学校	小
事務局長	大 道 博 敏	江戸川区立平井西小学校	小
事務局次長	佐 藤 真 理 子	大田区立南六郷中学校	中
	小 野 征 一 郎	千代田区立九段中等教育学校	高
	本 間 基 史	新宿区立戸塚第二小学校	小
	相 田 隆 司	東京学芸大学	大
研究局長	濱 脇 み どり	西東京市立田無第一中学校	中
研究局次長	田 中 明 美	品川区立立会小学校	小
	長 島 春 美	都立田柄高等学校	高
	水 島 尚 喜	聖心女子大学	大
	小 池 研 二	横浜国立大学	大
庶務局長	河 田 あ す か	日野市立第三中学校	中
庶務局次長	福 岡 貴 彦	目黒区立上目黒小学校	小
厚生局長	坂 東 由 香 里	足立区立第十四中学校	中
厚生局次長	池 田 仁 美	台東区立田原小学校	小
編集局長	上 野 千 絵 子	目黒区立中根小学校	小
編集局次長	奥 井 伸	墨田区立桜堤中学校	中
広報局長	加 藤 幸 子	新宿区立東戸山小学校	小
広報局次長	伊 藤 範 彦	墨田区立墨田中学校	中



役 職		氏 名	所 属 ( 2 5 年 4 月 現 在 )	校種
事務局	東京都 関係・ 会計	鶴内 秀一	府中市立武蔵台小学校	小
		浦野 加世子	江東区立豊洲小学校	小
		丸山 紀子	江東区立第六砂町小学校	小
	全国関係 ・ 渉外	諸井 奈津子	大田区立矢口中学校	中
		福島 淳子	町田市立金井中学校	中
		藤方 洋子	墨田区立八広幼稚園	幼
研究局	指導案 研究部	谷田 直勝	江東区立枝川小学校	小
		近藤 麻里	江東区立東雲小学校	小
	授業・ 協議会 計画部	高村 弘志	中央区立泰明小学校(幼小)	小
		松尾 美恵	中野区立中野中学校	中
		近藤 幸司	渋谷区立代々木中学校	中
		福地 誠子	新宿区立西戸山中学校	中
		落合 良美	千代田区立九段中等教育学校	高
		中西 一洋	都立両国高等学校	高
		仲田 恵	江東区立なでしこ幼稚園	幼
		亀井 愛	三井記念美術館	美
		平谷 美華子	東京富士美術館	美
庶務局	全体会場 運営部	加藤 真	杉並区立高井戸第四小学校	小
		石田 有希	江戸川区立下小岩第二小学校	小
	分科会場 運営部	石井 恵美子	文京区立第三中学校	中
		小澤 明子	江戸川区立篠崎幼稚園	幼
厚生部	レセプ ション 運営部	内田 佳代子	目黒区立碑小学校	小
		石田 智春	渋谷区立広尾小学校	小
		深見 響子	世田谷区立上祖師谷中学校	中
	昼食関係 接待担当	佐藤 真理	板橋区立赤塚第三中学校	中
		大村 志保子	墨田区立立花中学校	中
		矢野 靖子	葛飾区立水元幼稚園	幼
編集局	研究紀要 編集部	田中 武史	墨田区立中和小学校	小
		村上 剛	墨田区立中川小学校	小
		山崎 ゆき	荒川区立第七峡田小学校	小
		漁 美由紀	江戸川区立尾久小学校	小
	報告書 編集部	川田 保子	世田谷区立桜丘中学校	中
		瀬戸口 良太	都立東大和高等学校	高
		甲斐 健太	都立浅草高等学校	高
		能澤 大輔	都立足立高等学校定時制	高
箕輪 恵美	中央区立明石幼稚園	幼		
広報局	案内状 編集部	麻 佐知子	新宿区立市谷小学校	小
		菅原 亮	世田谷区立山野小学校	小
	Hp/Web 作成部	志手 伸圭)	足立区立淵江中学校	中
		松尾 英治	大田区立貝塚中学校	中
		若松 由希子	都立桐ヶ丘高等学校	高
		奥田 陽子	都立粕江高等学校	高
		中西 一洋	都立両国高等学校	高

## 全造研 幼稚園部会 組織図

担 当	氏 名	所 属 名
東京大会副実行委員長・ 分科会 1 提案者	田村 秀子	文京区立千駄木幼稚園
事務局	藤方 洋子	墨田区立八広幼稚園
研究局	仲田 恵	江東区立なでしこ幼稚園
庶務局	小澤 明子	江戸川区立篠崎幼稚園
厚生部	矢野 靖子	葛飾区立水元幼稚園
編集局	箕輪 恵美	中央区立明石幼稚園
実践発表	篠原 直子	練馬区立光が丘さくら幼稚園
	當銀 玲子	千葉県浦安市立美浜南幼稚園
	大澤 ちづる	東京学芸大学附属幼稚園
	飯島 弘子	神奈川県横須賀市立大楠幼稚園
授業者	矢澤 弘美	文京区立千駄木幼稚園
	鈴木 直子	
	野崎 美幸	
	木下 えり子	
	吉田 広恵	
	野木村 温子	
全造連幼稚園部会 代表	楨 英子	淑徳大学



# 第52回東京都図画工作研究大会



大会会長 (都図研会長)	高橋 香苗	江戸川区立南小岩小学校
大会副会長 (会場校校長)	山田 誠一	江東区立南砂小学校
都図研顧問校長	飯澤 公夫	八王子市立船田小学校
都図研理事長	平田 耕介	新宿区立愛日小学校
都図研副会長 (城東大会担当)	田中 明美 上野千絵子	品川区立立会小学校 目黒区立中根小学校
全道運務局長	大道 博敬	江戸川区立平井西小学校
実行委員長	小島 弘美	江東区立南砂小学校
実行副委員長 (城東5区図工部顧問校長)	君塚 清春 水越 康之 駒野真理子 飯村 誠一 島笠 秀男 伊藤 秀一 関 康男 小山 信明 森内 昌也	江東区立第三大島小学校長 江戸川区立上一色南小学校長 葛飾区立西亀有小学校長 荒川区立第六瑞光小学校長 墨田区立押上小学校長 江東区立南陽小学校長 江戸川区立南小岩小学校長 江戸川区立上小岩小学校長 葛飾区立幸田小学校長

## 城東大会研究推進委員会

### 城東大会研究全体会

事務局	◎浦野佳代子	江東区豊洲	○真野 優子	江戸川区一之江第二				
総務	小川 百合 工藤由紀子	江東区明治 荒川区汐入東	尾科婦美子	墨田区錦糸				
庶務	◎小林 知子	江東区深川	今井 成子	葛飾区飯塚				
会計局	◎丸山 紀子	江東区第六砂町	大道 博敬	江戸川区平井西				
区会計	古舘 俊江 管谷 千紘	江東区臨海 荒川区大門	吉野麻哉子	墨田区二葉				
事業局	◎浦澤 秀樹	葛飾区北野	○星野加代子	江戸川区南小岩第二				
渉外部	◎松元 利道 小野里雅由	江東区越中島 葛飾区南綾瀬	中村善代子	江東区東陽				
会場部	齋藤 隆俊 内野 正子 三浦 貴雄 石松 哲威 長塚 有紀 洞口 幸子 東 昌子	江東区豊橋 江東区亀高 江東区川南 墨田区緑 墨田区曳舟 墨田区八広 墨田区押上	稲葉 優子 大島淳一郎 箱崎 秀幸 山崎真由美 一文字裕子 四本 大祐 ◎寺島 秀明	葛飾区南奥戸 葛飾区奥戸 葛飾区上千葉 葛飾区東水元 葛飾区亀青 葛飾区柴原 荒川区第六瑞光	金指 圭吾 井上 香織 四ツ目 理恵 廣瀬 幸枝 山田 千尋 刀根 絵里	荒川区第一日暮里 江戸川区第二松江 江戸川区鹿骨 江戸川区西小岩 江戸川区宇喜田 江戸川区清新第二	佐山 雄基 佐久間 亮 星野 愛 高井 律子 小島 啓子	江戸川区松本 江戸川区平井 江戸川区小松川 江戸川区鶴崎第四 江戸川区小松川
設営部	青池 昭代 星 久美子 發知 美黄 ◎藤原 秀之 工藤 俊祐 田邊 寛	江東区東砂 江東区元加賀 江東区東川 墨田区東吾嬬 墨田区第二寺島 葛飾区東綾瀬	山田 洋 松本 美香 宇多田美幸 田平 愛子 古賀 愛 中林 樹生	葛飾区本田 葛飾区花の木 葛飾区川端 葛飾区西亀有 葛飾区洪江	笹野 浩子 坂村 幸雄 井手本美紀 星野 淳子 栢山 彰子 磯野 美希	葛飾区こすげ 荒川区第四砦田 江戸川区中小岩 江戸川区第二葛西 江戸川区清新第一 江戸川区上一色南	齋藤 淑子 石井 和好 森 幸子 青地 一 齋藤 誠子	江戸川区小松川第二 江戸川区大杉第二 江戸川区上小岩 江戸川区鶴崎第二 江戸川区南葛西
編集局	◎山崎 砂志	荒川区第七砦田	◎大塚 真	江戸川区東葛西				
ニュース部	◎檜森 秀子 佐藤 蘭子 薬師神道美 谷村 類子	江東区小名木川 江東区香取 江東区辰巳 墨田区外手	塚越摩有美 藤来 綾子 竹越 桃子 岡本 典子	墨田区立花若葉の森 葛飾区道上 葛飾区二上 葛飾区中青戸	浦本美枝子 井野早徳里 水田 麻衣 大堀 智子	荒川区汐入 荒川区尾久 江戸川区二之江 江戸川区東小岩	佐藤 理英 市川美和子 玉浦 敦子 漁 美由紀	
記録部	満田 彩香 兒島 知世 四ッ谷久美子	江東区第二大島 江東区数矢 墨田区第三吾嬬	◎阿部恵子 吉岡 法子 藤岡 奈々	葛飾区鎌倉 葛飾区幸田 墨田区小梅	内海 朗子 大野 美織 佐藤 実	荒川区尾久六 葛飾区西小管 葛飾区上平井	大井 理江 坂元 宣和 山崎由三子	
紀要部	込山 希 森脇 晃 ◎田中 武史 村上 剛	江東区北砂 江東区第二砂町 墨田区中和 墨田区中川	伊藤 香織 小塚 剛史 三木 恵子 丸山 陽子	葛飾区原田 荒川区第三日暮里 葛飾区中之台 江戸川区春江	菅野 幸恵 石上 雄矢 三浦 彩 賀数 真弓	江戸川区二之江第二 江戸川区鹿骨東 江戸川区小岩 江戸川区龜本	西川久美子	江戸川区西小松川

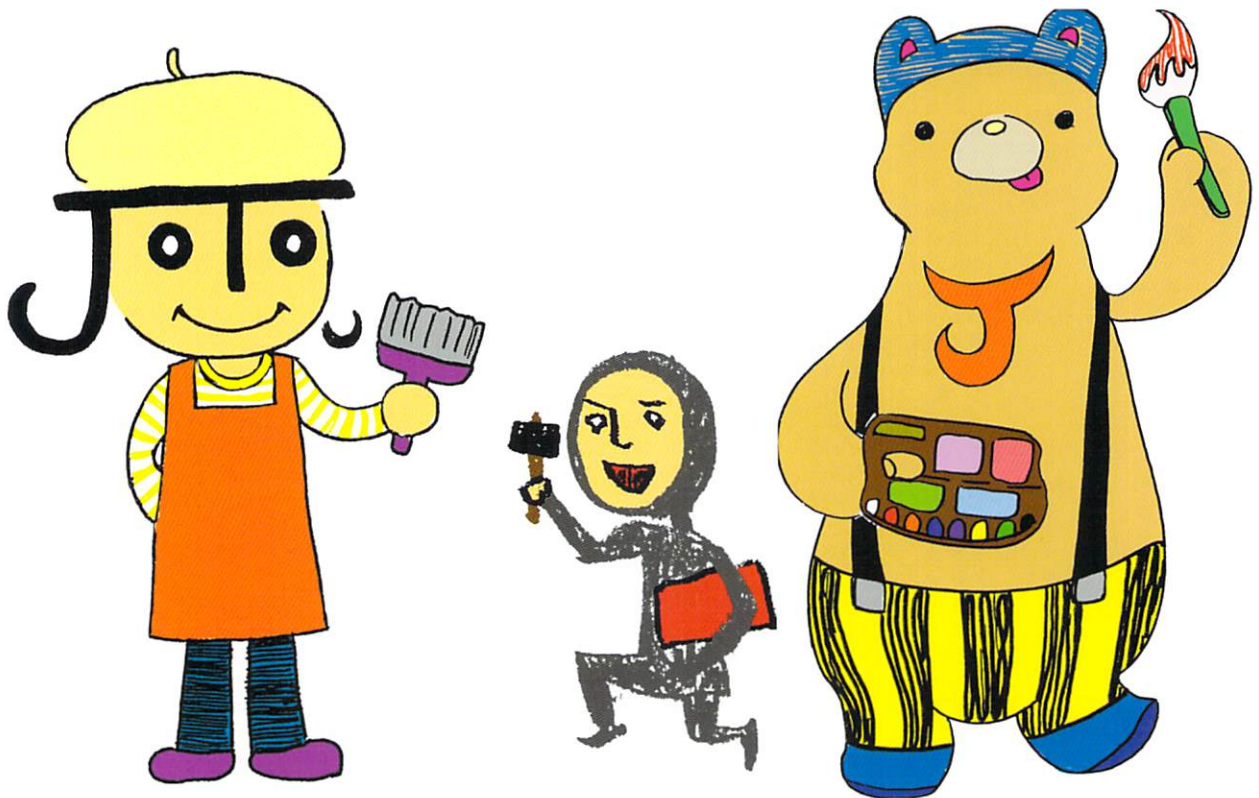
研究の歩み  
規約・名簿



# 城東大会研究全体会

研究局	1区研究員	◎谷田 直勝 江東区枝川 望月 慶 江東区大島南央 成田 麻美 江東区第五砂町 木口 恵子 江東区第一亀戸 ※近藤麻里 江東区東豊 堀井 未知 江東区浅間野川 菊地 彩香 江東区豊洲北 高野 健司 江東区第一大島 ※長塚 祐輔 江東区南豊 岩崎 隼 江東区水神 小林ちあき 江東区第二亀戸 川村 かおり 江東区第四大島 ※荻原 有子 江東区第三砂町 江尻佳奈央 江東区砂町 片山 知子 江東区毛利 菊地 光平 江東区八名川 半田 藍 江東区第三大島 佐々木大輔 江東区第二辰巳 上野果菜子 江東区平久 松澤 夏貴 江東区第五大島 平原 麻恵 江東区有明 船山 良子 江東区第七砂町
	2区研究員	○中村 和哉 江戸川区第二松江 橋本 尚子 江戸川区江戸川 奥田 良英 江戸川区北小岩 草薙 奈巳 江戸川区西葛西 南野友香子 江戸川区新田 中嶋 秀美 江戸川区一之江 川田 泰之 江戸川区船堀 山田真梨子 江戸川区第七葛西 大高 美和 江戸川区平井南 谷口 友梨 江戸川区篠崎 ※保科 綾子 江戸川区船堀第二 大森はるか 江戸川区鎌田 利重 初夏 江戸川区西一之江 鈴木 牧子 江戸川区船堀西 三好 知佳 江戸川区葛西 溝谷木育代 江戸川区小岩 ※志水 洋 江戸川区大杉 眞鍋 和美 江戸川区船堀第三 宇田 幸正 江戸川区第六葛西 鳥海 良太 江戸川区上小岩第二 ※宮内 応典 江戸川区瑞江 木澤 奈月 江戸川区下小岩 九十九由紀 江戸川区第六葛西 笠原 優子 江戸川区上一色 水谷さくら 江戸川区新堀 錦織 弘幸 江戸川区清新第三 衛藤 陽子 江戸川区下鎌田東 江戸 広美 江戸川区下鎌田 上手 佐希 江戸川区臨海 高橋 晶子 江戸川区南葛西第三
	3区研究員	○朝重久美子 葛飾区白鳥 吉原 沙織 葛飾区東柴又 奥山 美香 葛飾区金町 三五 郁美 葛飾区水元 ※渡邊 梨恵 葛飾区葛飾 本郷麻菜美 葛飾区半田 市川 佳純 葛飾区末広 中山美由紀 葛飾区柴又 小野 幸恵 葛飾区上小松 古川 理恵 葛飾区堀切 ※村尾 彩子 葛飾区よつぎ 山戸ちひろ 葛飾区宝木塚 木下亜希子 葛飾区小松南 吉田さやか 葛飾区木根川 秋葉かほり 葛飾区松上 峯本さおり 葛飾区清和 直井 有子 葛飾区柳田 上田 心み 葛飾区梅田 熊野 泉 三好真珠美 葛飾区綾南 丹羽貴美恵 葛飾区東金町 山川 知也 葛飾区青戸 ※荒谷 明恵 葛飾区高砂ヶやき学園
	4区研究員	○山崎 雅愛 荒川区尾久西 石川奈保子 荒川区第二峡田 ※近藤 愛 荒川区第六日暮里 杉田ひろみ 荒川区汐入 ※中込 里実 荒川区第二瑞光 大山 りみ 荒川区第二峡田 戸崎 恵子 荒川区むくらし 佐藤咲弥香 荒川区瑞光 粕谷 泰寛 荒川区第二瑞光 川上 耕 荒川区第五峡田 ※後藤真理子 荒川区赤土 福本雄一郎 荒川区第二峡田 豊島紗野花 荒川区瑞光 大石 利佳 荒川区第九峡田 桑島 有子 荒川区第二日暮里 川田 幸那 荒川区尾久宮前 ※田村久仁子 荒川区峡田 木下紗世子 荒川区第九峡田
	5区研究員	○東郷 拓巳 墨田区第一寺島 上野 邦義 墨田区第四吾嬬 京嶋 一喜 墨田区吾嬬 南 育子 墨田区業平 清水 一成 墨田区梅若 岩崎 麻美 墨田区柳島 内田 康子 墨田区隅田 高橋 智 墨田区両国 濱端 美穂 墨田区横川 京極 恵 墨田区第三寺島 池田 清美 墨田区菊川
都図研究員	雨宮 玄 あきる野市東刈留 加藤 貴子 世田谷区上北沢 河原 賢一 狛江市和泉 菅谷 千紘 渋谷区長谷戸 中島 綾子 台東区金亀 山田 和弘 千代田区新茶の水 宮内 愛 清瀬市清瀬八 光真 伸子 世田谷区駒沢 増田三恵子 太田区入新井一 和久井智洋 練馬区大泉 杉山 聡 板橋区板橋六 山野井 誠 狛江市狛江五 掛川 智子 町田市南四	

○副研究局長 ※分科会責任者



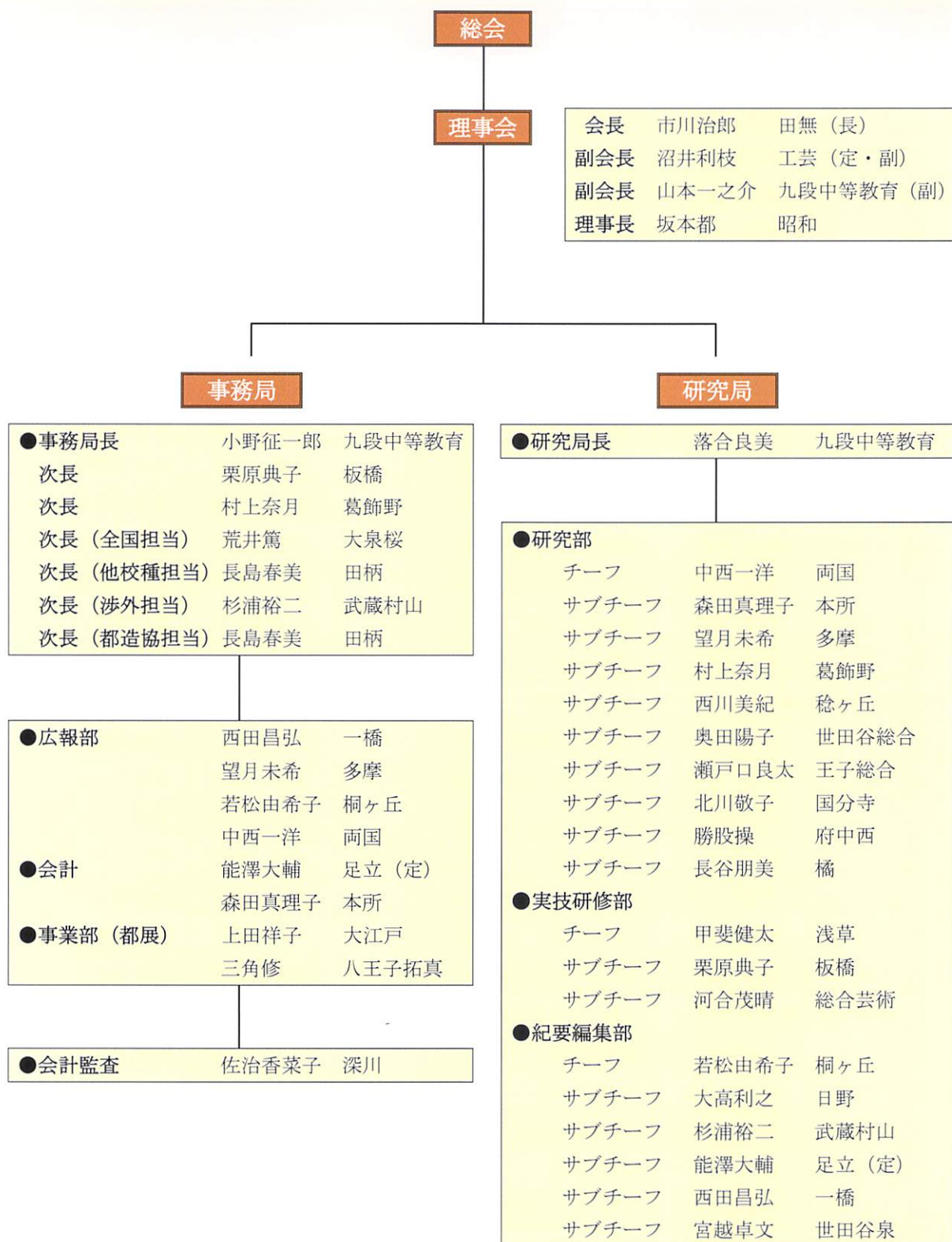
研究の歩み  
規約・名簿



# 第31回 東京都中学校美術教育研究大会 組織

役職	氏名	所属	役職	氏名	所属
1 大会会長	■殿村 靖廣	大道中学校	都中美関係運営委員 (前表記者除く)		
2 事務局長	伊藤 範彦	墨田中学校	34	福島 淳子	金井中学校
3 実行委員長	■茜谷佳世子	竹の塚中学校	35	長尾 菊絵	ひばりヶ丘中学校
4	萩原 和彦	山崎中学校	36	中村みどり	武蔵野第六中学校
5	岩永 章	新宿西戸山中学校	37	石井恵美子	文京・第三中学校
6	永久保佳孝	目黒・第七中学校	38	畠山 真理	桐田中学校
7 副実行委員	岩下 敏夫	砧中学校	39	松尾 英治	貝塚中学校
8	白倉 昌裕	笹塚中学校	40	小川 永祐	砧中学校
9	石黒 晋	尾山台中学校	41	大西 均	駒留中学校
10 都中美本部	菊田 寛	両国中学校	42	菊池 美聡	落合第二中学校
11 アドバイザー	香村 智	中山中学校	43	安島 典子	狛江第四中学校
第2ブロック関係運営委員			44	倉科 幸雄	西池袋中学校
12 事務局長	■福地 誠子	新宿西戸山中学校	45	大村志保子	立花中学校
13	奥山たみ恵	目黒・第八中学校	46	内田 善人	南中野中学校
14 次長	榎本 美深	尾山台中学校	47	高崎美也子	深川第四中学校
15	鹿倉 美帆	広尾中学校	48	猪口 正和	井草中学校
16 研究局長	■近藤 幸司	代々木中学校	49	花里 裕子	中野・第五中学校
17	深谷 玲子	牛込第三中学校	50	三浦 悦子	青井中学校
18 次長	早崎 希子	目黒・第九中学校	51	檜原 純子	目黒中央中学校
19	井上 牧子	砧南中学校	52	桶川希三子	千歳中学校
20	森 秀二	鉢山中学校	53	志手 伸圭	洲江中学校
21 都中美本部	濱脇みどり	田無第一中学校	54	深見 響子	上祖師谷中学校
22	松尾 恵美	中野中学校	55	中村奈穂子	世田谷中学校
23 大会本部	福地 誠子	新宿西戸山中学校	56	高津健太郎	弦巻中学校
24 編集局長	■吉村 響子	目黒・第十中学校	57	河本 珠実	東山中学校
25	川田 保子	桜丘中学校	58	永関 和雄	町田第三中学校
26 次長	田邊真由美	松濤中学校	59	中村 一哉	府中第五中学校
27	神野 智彦	西早稲田中学校	60	佐藤真理子	南六郷中学校
28 都中美本部	奥井 伸	桜堤中学校	61	河田あすか	日野・第三中学校
29 大会本部	羽塚美和子	目黒・第七中学校	62	坂東由香里	足立・第十四中学校
30 庶務局長	■黒葛原範顕	深沢中学校	63	諸井奈津子	矢口中学校
31	横山 真理	笹塚中学校	64	佐藤 真理	赤塚第三中学校
32 次長	立川 英司	新宿中学校			
33	片岡崇遠近	目黒・第一中学校			

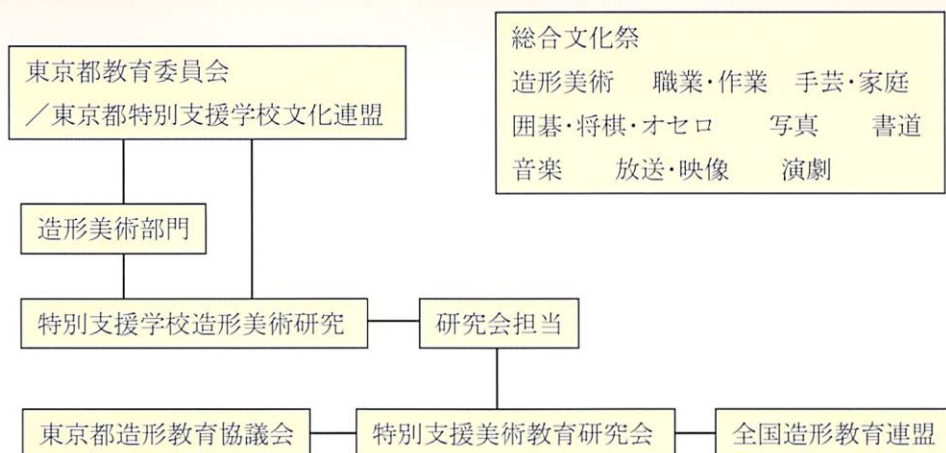
# 東京都高等学校美術工芸教育研究会 組織図



研究の歩み・規約・名簿



# 特別支援学校



# 大学部会

全国大学造形美術教育連絡協議会 (協議会)	
◎大学部会部長 新野貴則 山梨大学  大嶋 彰 滋賀大学 相田隆司 東京学芸大学 小澤基弘 埼玉大学 小池研二 横浜国立大学 井坂健一郎 山梨大学	○事務局長 三澤一実 武蔵野美術大学  磯部錦司 梶山女子学園大学 大成哲雄 聖徳大学
全国教育大学協会美術部門 (教大協)	全国大学造形美術教員養成協議会 (全美協)
◎代表 大嶋 彰 滋賀大学 ○副代表 山口喜雄 宇都宮大学 ○副代表 岩村伸一 京都教育大学 ○総務局長 相田隆司 東京学芸大学 ○部門総務部長 大泉義一 横浜国立大学 ・総務部 新野貴則 山梨大学 大成哲雄 聖徳大学 山田一美 東京学芸大学 郡司明子 群馬大学 松尾大介 上越教育大学	◎委員長 三澤一実 武蔵野美術大学 ○副委員長 磯部錦司 梶山女子学園大学 ○副委員長 大成哲雄 聖徳大学 ○事務局長 北沢昌代 聖徳大学短期大学部 ・事務局 杉山貴洋 白梅学園大学 畠山智宏 清和大学短期大学部

全造連美術館部会 大会委員および授業者・指導者	
三澤一実 武蔵野美術大学	美術館部会部長/大会副実行委員長
稲庭彩和子 東京都美術館	大会副実行委員長/中学校指導助言者
平谷美華子 東京富士美術館	大会研究局委員
小川直人 せんだいメディアテーク	小学校指導助言者
郷 泰典 東京都現代美術館	小学校指導助言者
亀井 愛 三井記念美術館	中学校授業者
熊谷香寿美 東京都美術館	中学校授業者
原瀬裕孝 ルーヴル-DNP ミュージアムラボ	中学校授業者
伊藤達矢 東京藝術大学	大学・美術館部会協力者



**2013 TOKYO**

**第66回 全国造形教育研究大会  
東京大会**

**造形美術教育のダイナミズム — 成長と連携 —**

2013年11月28日発行

発行者	東京都造形教育協議会
代 表	第66回全国造形教育研究大会 大会会長 菊田 寛
事務局	江戸川区立平井西小学校 TEL:03-3612-9498 TEL:03-3611-3201 大会事務局長 大道 博敏
表紙デザイン	江東区立辰巳小学校 葉師神 直美
印刷・製本	伊部印刷株式会社 福井県越前市家久町 29-8-1 TEL: 0778-23-5037